
龍の尻尾探聞録

緑麦 茶屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の尻尾探聞録

【Nコード】

N4032U

【作者名】

緑麦 茶屋

【あらすじ】

「俺は一般人だ！」

そう言い張る主人公で勇者。

「おれは変人じゃない！」

そう言い張る変人王様

「天才？そんな人はいないよ？」

そう言い張る天才賢者。

そんな3人は異世界の幼馴染と兄弟だった。

ゲームと全く同じ世界、ゲームと全く同じシステム、そんな世界に

飛んでしまった主人公はその目で、何を見、何をなすのか。

嫌いな人は嫌いな成分が多いです。面白いと思ったら読んでいた
だけとありがたいです。

プロローグ1 『黒い穴?』

「なあ頼むよ、生徒会に入ってくれよ。」

ココはある高校、1-A教室だ。そこで三年生の一人が眼帯を付けた一人の一年生に話し掛けていた。

「まだ言ってたんですか？先輩、俺は絶対にやりませんからね、絶対ですよ。」

「良いじゃないか、兄弟「先輩です。」まあまあ其処は良いから。兄貴の頼み、聞いてくれよ。お前の頭が必要なんだって。運動だつて結構出来るし、高校の二、二年全国一斉の試験でもでも一位だつたんだろう？頼むって！」

「頼ってくれるのは嬉しいですけど・・・やりませんよ。其れにあの試験で一位だったのは俺じゃないですよ。桃香先輩です。」

「あれ、そうだったの？教えてくれれば良かったのに。」

「昨日ログインしなかったからですよ。しかも部屋に籠りつきりでしたし。試験の結果が出たのは昨日だったんですから。」

「悪かったな、ちょっと忙しくてな。じゃ無くて！！頼むよ。」
「嫌です。」

キンコンカーンコン。

「ほら、予鈴が鳴りましたよ、戻った戻った。」

「クソッ！もうタイムリミットがきちまったか。俺は諦めないかなライトオー！！」

「どうぞご勝手に。」

俺は神埼雷斗、右目が見えない意外はごく普通の高校生だ。右目には縦に深い刃傷が在る。其れを隠す為に眼帯を付けている。それ以外は普通の筈だ。

軽くアニオタ。

ちよつとロリコン。

一時期ニートと呼ばれ不登校。

いや、俺は普通だ！

あ、そういえばカツアゲしようとしていたヤンキーを蹴っ飛ばしたらその人の兄貴が幹部だかなんだかをやってるとか言った何とか組って言う所のこわーいお兄さんたちに脅されたからその何とか組つてのを潰したこともあったなー（一人で）。

しかーし！俺は至って普通の高校生のはず・・・だ。

で、さっきの人は神埼宗谷先輩。

えーと、3年生の生徒会長で変人だった気がする。それ以外は、えーと、ああそうだあの人は俺の実の兄、血の繋がった兄弟という奴ですね。まあ、それ以外は知らない。その日のテンションしだいで全てが変わる人。うん、迷惑な話だ。それ以外は知らないし知りたくないし興味も無い。

さて真剣に授業を受けるか。

・
・
・

放課後

「雷斗」。一緒に帰ろうぜ。」

「げ、また来た。悪い、俺は逃げるから、また明日なー。」

「お、おう。」

ダッシュ。しかも軽く全力。

「む、逃がすかあ！」

「ヤバイ、速すぎんだろあの人！」

「捕まえたあ！」

「ちょ！捕まえたって、それはキック、ぎゃあああああああ
あ！」

「あの二人楽しそうだな。」

「さて俺らは帰ろうぜ。」

「じゃーなー雷斗ー。」

「おう・・・じゃあな・・・。」

「お前ら寄り道せずに帰れよ。」

「はい。」

「さて、雷斗、帰ろうか。」

「・・・しつこいですよ先輩。」

「まあまあ、その眉間の皺を消して気楽にいきましょう！兄弟だろ！」

「人にキックを食らわせた人のセリフとは思えないですね。」

「雷斗が逃げるから悪いんだぞ。ってか、あの集団の真ん中にいる
のは。」

「間違えなくあの人です。」

「やっぱりか・・・避けて帰ろう。」

「そうですね。」

「あ、ライ君にソウ先輩だあ。みんなゴメンね。今日はあの二
人と帰るから。それじゃ、また明日。」

「見つかったな。」

「ええ、しかも最悪のパターンです。とんでもない殺気が全部こっ
ちに向いています。」

「冷静だね。」

「慣れてますからね。」

「あ、何かいっぱいこっちに來たけど如何する？」

「やって良いですか？」

「殺さない程度になら許す。」

「じゃ。」

俺はポケットからバッヂを取り出す。そしてそれを上に跳ね上げ、右にステップする。それと同時に全力で回転。そしてタイミング良く裏拳を軽く打ち込む。すると……。

バガン！

「あれ本当に死んでねえだろうな。」

「回転のスピードは有りましたけど裏拳は軽くだったんで大丈夫かと……。」

そう言いながら落ちているバッヂを拾う。

「しかしいきなりあれを使うか。」

「面倒だったんでね。」

「これはありえねえだろ。」

「大丈夫です。死人はゼロなんで。」

「うーん、まあいいか。」

話は戻ってあの人。山代桃香。

暇人のノンビリとしたお嬢様だ。勿論お金持ち。そしてモテる……。

この人もプレイヤーである。

あ、皆さんプレイヤーだのログインだの何の話だ？って思ってますよね。

えーと、俺と桃香先輩、宗谷先輩は「ドラゴンテイル」って言う大規模なオンラインゲームをやってます。その説明によると、

『ここはバルゴリア大陸のテイルの王国。テイルというのは国名ではない。この大陸は西洋の竜のような形をしている。その尻尾の部分に当たるのがテイルの王国である。其の他にも、アームの王国などいろいろな国があります。そして、この王国は技術だけの発達を遂げた国、機械国エルトランス、魔法だけの発達を遂げた国、魔法国エルシエル、戦術だけの発達を遂げた国、戦国エルグランド、そして、全てを統括する王都エルスターの4国に分かれていて、全てをエルスターが統括しています。』

そして、貴方達は冒険者として、エルスターから出発し、このテイ

ルの王国を探索し魔王軍にダメージを与えて行つて貰います。魔王軍は、尻尾の付け根に当たる部分に居座つて国中に魔物を放つていきます。それを倒していけば、魔王軍にはダメージを与えていきます。

」

との事です。まあ、余計な説明もありますが、とにかく冒険者として、色々な事が出来るのが、このドラゴンテイルだ。

このゲームで俺達3人は知り合つた。

「ねえ、ライ君。何でソウ先輩といたの？」

「ストーリーキングされてました。」

「嘘をつくな！ただの勧誘だ！」

「勧誘でなんで帰り道まで一緒に居なきゃならないんですか？」

「御前から俺と雷斗の兄弟という関係忘れてないか？」

「忘れてました」

「二人そろつて・・・。」

「まあ、其れより一つ聞いていいですか？」

「この私がお聞きしましょう！」「黙って下さい。」・・・手厳しいね、雷斗君。」

「桃香先輩が聞きたいのは、ここにある黒い穴についてですか？」

「そう。それは何？」

「何だその穴、つてあああああああああああああ！」

「宗谷先輩！」

「きゃあああああああああああああ！」

「桃香先輩！つてうあああああああああつあああ！」

こうして俺達は意識を失つた。

ブローグ1 『黒い穴?』（後書き）

今投稿していた方はしばらく休載したいと思います。
その代りこっちを投稿していくのでお願いします。

プロローグ2 『国王病没』（前書き）

本当は同じ日に投稿する予定だった奴です

プロローグ2 『国王病没』

「遂にこの時が来てしまった……。」

「父上え……。何故、何故救えなかったのですか!？」

この国の王の一人娘、ファミールは王の専属の医師に怒りをぶつけていた。

「この国の王については王の娘である貴女が一番分かっている筈です。父親である王の事を知っているのも、この国の王は百年しか必ず生きられず、しかも其の王の死が訪れた場合、異界から召喚した次の王にこの国は受け継がれていく、という慣わしも含めて、全て貴女だけなのです。」

「何故なの、何故、見ず知らずの異世界の人間に百年もの間父上が治めて来た地を渡さなければならぬの?」

「……。」

この場にいる人間は全員口を閉ざした。

其れも其のはず。ここに居る人間は全員同じ気持ちを抱いているのだから。

「あ、あのう、一つ宜しいでしょうか?」

其の沈黙を破ったのはファミールのメイドをしている一人の少女だった。

「如何したのだ？ナナ？」

この子の本名は、朝霧奈菜。5年前、召喚用の魔方陣が暴走し此方に来てしまった少女だった。

「一つではないのですが・・・。」

「よい、言ってみなさい。」

「はい。まず慣わしとして、召喚は大衆の見ている中行うのですよね？」

「そうよ。国民の皆に見せる事によって、要らぬ疑いを生まぬようにな。」

「ならばしないのは不味いと思います。国王の死など隠せる物ではないので、緘口令を敷いてもこの情報は漏れます。そして新国王を召喚しない、などと言えば間違いなく国民は不安に駆られます。なので、召喚を行い、其の人間を見極めてから行動を起こせばよいと思います。」

「おお、流石ナナ。そうするでしょう。」

意見を挟ませず、一息に言い切った奈菜の言葉に最初に頷いたのは、国王が育てて来た右大臣のギルスターだった。

この国は知能の平均的なレベルが低すぎる。

先代の国王は、いや今までの国王全員がそう言った。

其れも其のはず、この国では読み書きと足し算も出来れば良い方で、其れを改善するため、先代の国王はこの人間は伸びる。と、国王は辺境の土地に居たギルスターを連れて来て育てたのであった。なので、ギルスターのような人間は少ないため、とても重宝される。

しかし、それでも当時、天才少女と言われていたとはいえ、15歳の少女にすら及ばなかったのだ。この国の知能の平均的なレベルの低さは分かるだろう。

「しかし、そんなの納得できぬ！」

其れに対し、反発を示したのはファミールだった。

ファミールは先代の国王に育てられたとあって、知能の高さは評価できるが、其れよりも感情等を優先してしまう、という美点であり欠点を抱えていた。

「ファミール様、お気持ちは分かりますが、ここはナナの言うとおりにするべきです。」

ギルスターは必死に説得を試みるがファミールは全く聞こうとしない。

「嫌！絶対に嫌なの！」

「ファミール様。」

とても冷たい声がファミールの名前を読んだ。

「な、何かしら？ナナ。」

「確かにファミール様が言っていることは分かります。全員が同じような気持ちなのです。しかし、今の現実を前にしたのです。よくお考えください。」

「・・・なあ、ナナのあんな声何時以来だ？」

「さあ？あ、でもあの半島の制圧のときはあんな声していなかったか？」

「ああ、そういえばそうだ。」

ひそひそと囁く声をする中、奈菜はファミールを見つめ続け、ファミールは下を向いて唇を噛んでいた。

「分かったわ・・・分かったわよ！私も覚悟を決める。ギルスター！勇者召喚の準備をなさい！私は王の執務室で書類の整理などを行います。ナナは私を手伝って！第壹戦闘部隊は王都の守備の強化、第貳戦闘部隊は国民に、王、勇者、賢者の死と、儀式についての説明を行ってきて！第参戦闘部隊はギルスターを手伝って！魔法部隊もよ。ギルスターの部下は第貳戦闘部隊と一緒に説明をしてきて。各自仕事をしっかり行うように！」

「・・・はっ！」「」「」

・
・
・

「之より、勇者、国王、賢者召喚の儀式を行う！其れでは、まずは国王の召喚を。ファミール様、お願いします。」

「はい。それでは、行きます！」

ファミールが召喚用の魔方陣に魔力を流し始めた。

（くっ！これを後二回も行うの？正直・・・きついわね。）

「きた！」

魔方陣が輝き、その光から全員が眼をそらした。

そして、其の光が消えると、そこには三人の人間が倒れていた。

「・・・？」

「・・・三人？」

「えーと、まだ国王様の召喚だよな。」

「・・・何でああ！？」

前代未聞の王国の始まりだった。

始まり1 『白い?』

『汝、名を何と申す?』

「え、俺?俺は神埼雷斗。あんたは誰?」

俺は今、真っ白な世界に居る。そして、頭の中に響いてくる声と喋って(?)いる。

『フム、雷斗か。そなたは何故ここに居るか分かっているのか?』

「分かる訳無いだろ!阿呆!て言うかここは何処だ!」

『まあ、そう声を荒げるな。御主ならあちらに着いてから知れば十分だ。』

「着く?何処にだよ?」

『其れもあちらに着いてから知れば良い。』

「少しは俺に状況を説明する気は無いのか?」

『だから、御主ならあちらに着いてからで充分だ。』

「……ん、ならさ、あんたについて教えてくれないか?」

『俺か?俺は神に最も近い存在かなあ?』

「……神様でいい?」

『良いのかなあ？』

「良いんじゃない？」

『なら其れでよい。』

「えーっと、その神様が俺に何の様？」

『之から俺の物を御主に預けるんだからな、その人間を見ておこう
と思ったただだよ。』

「物？物って何だよ？」

『力だよ。御主の望む力と、あちらで生きるための力だ。』

「・・・俺の望む力？」

『そうだ。御主の意識の更に奥に眠っている、御主が真に望むもの
を力として具現化するんだよ。』

「へえー神様ってそんな事も出来んの？」

『俺は神では無いから分からないけど、神様ならもっと凄い事が出
来るんじゃないか？』

「・・・もつと凄い事のイメージが俺には出来ないんだが、例えば
どういう事？」

『龍神の力や不死鳥の力、他にも世界を真つ二つに出来る程の腕力

とか、俺は人間の限界までしか出来ないけど神様なら其れも超えられるんじゃないか？」

「・・・。あっさり言ってくれるけど其れでもあんたの限界は充分凄いと思うんだが・・・俺だけか？」

『ふむ。そう言ってくれるのは嬉しいが、今の俺には何も出来ない。精々人に力を貸してその人間に頼む事だけだからな。』

「何かを俺に頼みたいわけ？」

『うむ。流石、聡明だな。』

「その程度に気付く位の頭は持つてるよ。で、何を頼みたいの？」

『世界を変えてくれないか？』

「嫌だ！」

『・・・流石に即答は凹むな。』

「そんな面倒くさそうな事進んでやる馬鹿が何処に居る！」

『しかし、後の二人はやる気充分だぞ？』

「っ！忘れてた。あの二人か・・・。」

『で、如何する？』

「・・・あの二人だけを放って置く訳には行かないしなあ。」

『では、引き受けてくれるか?』

「幾つかの質問に答えてくれたらな。」

『答えられぬ物は答えなくていいか?』

「ああ、別にいい。出来る範囲で答えてくれ。」

『分かった。御主は何が聞きたいのだ?』

「まず、ここは何処だ?」

『ここは召喚されし者が私と会える様に作った空間で、其方に繋がった門くゲート>と召喚陣の間に在るんだ。ちなみに、ここでは時間が止まっている。』

「なるほどね。んじゃ、二つ目あんたは誰?」

『・・・御主と同じ者で、力を失った存在だ。これ以上は言えない。』

「俺と同じ?・・・あんたについては興味深いところが多いが、取り合えず何も聞かずに置こう。」

『・・・感謝する。』

「なに驚いてんの?」

『いや、もっと食いついて来ると思ったからな。』

「食いついて欲しかった？」

『いや、食い付かないでくれた方がありがたい。』

「ん〜、色々聞きたいけど、これで最後にしよう。」

『何だ？』

「この頭に流れてくる記憶は誰のものだ？」

『勇者と焰皇と呼ばれた存在の記憶だ。勇者の記憶は代々勇者をして来た者が受け継いできた記憶で九百年分の記憶になっている。そして焰皇の記憶は昔存在した人類史上最強の火属性の魔法使いの記憶だ。』

「なるほど。俺は何人目の勇者なんだ？」

『十人目だ。』

「有難う。とりあえず後はあんたの言うあちらに着いてから調べるとするよ。」

『ああ。死ぬなよ。』

「あれ？そんな苛酷なとこに俺は放り込まれるの？」

『世界を変えるんだ、そう簡単なわけなかつ。』

「・・・えーと、俺は帰れるのかな？」

『御前次第だ。』

「・・・分かったよ。絶対戻ってやるよ。」

『ふっ。頼んだぞ。』

「頼まれてやらあ。」

そして、視界は真っ白になった。

始まり2 『御爺ちゃんって親切だね!』

「ファミール様は強すぎる魔力によって、普通は三回行う儀式をたったの一回で済ませたのだ!」

俺が目覚め始めて、最初に聞いたのは言い訳を必死とする御爺ちゃんの声だった。

(今一納得できない言い訳な気がするが……。)

そして、徐々に覚醒していく意識の中、眼を開くと最初に見えたのは多くの人達だった。

次に両側を護衛に守られながら言い訳を続ける御爺ちゃんと、俺より年下に見えるメイドさんを一人だけ連れたいかにも王女さまで感じのする人が立っていて、俺が寝ている床に不思議な模様が書かれているというのが見えた。

(えーと、この女の人ファミール様(?)かな?そしてこの模様は魔方阵つてことで良いのかな?)

ちなみに後の二人は全く動かない。理由として九百年分の記憶が一気に流れているからだろう。雷斗にも流れているが精神力の差だろうが、雷斗は頭の半分以上が既に起きている。

(……これ以上起きてるのは俺の頭が危険だな。よし、寝よう)

雷斗は起きかけていた頭を九百年の記憶に委ね、再び眠りに落ちた。

・
・
・

「む、起きましたかな?」

「うーん……貴方はあそこに居た御爺ちゃん?」

「あそこは召喚の儀式場の事ですか?」

「んー、多分そう。ていうかここ何処?」

「王宮のお客様用の寝室で御座います。」

「で、貴方は誰?」

ぼんやりする頭を必死で起こしながら質問を続ける。

「私ですか？」

「あんた以外の誰が居る？」

「私は、この国の右大臣、ギルスターで御座います。」

「えーと、先代国王が育てた男か。」

「何故其れをご存知で？」

「其れは言えない。」

「左様で御座いますか。」

「後の二人は何処だ？」

「隣の寝室で御座います。」

「其れじゃあ二人を一部屋に移動して。俺は自分で動くから。」

「・・・何故何も聞かないのですか？」

「何が？」

「なぜここに居るのか、本当の意味でここは何処なのか、何をすれば良いのか、貴方が聞きたい事は幾らでも有る筈です。」

「・・・三人一編に聞いた方が早いし、あの二人は何も知らなくても、あれが敵、と言われれば突っ込んで行く様な人達だしね。一緒に聞いた方が良いと思って。」

「・・・冷静ですね。」

「一週回ってフリーズしてるだけさ。」

「一週回ってフリーズ？」

「あれ？分かんない？言葉も通じるから分かんと思ったんだけど・・・」

「そうではないそうですよ。」

「ふーん、ま、後は宜しく。俺も移動するからさ。」

「了解いたしました。」

・
・
・

「記憶が多すぎて俺は戦闘の仕方と魔法についてだけ拾ったんです

が二人は如何したんですか？」

「俺は・・・思い出せないんだよ。」

「情報量が多すぎて分からなくなっただんですか？」

「いや、違う。詳しい所に記憶を伸ばそうとすると、ロックが掛かるみたいなんだ。」

「ふーん、何なんでしょうね？桃香先輩は？」

「うーん、昔の人たちの性格とかを捉えた分、他のは基礎程度しか・・・あ、でも魔法については確り拾ったわ。」

「なるほど。それよりも桃香先輩、宗谷先輩、勝手に行かないで下さいね。」

「何処にだ？」

「うーん、ライ君の言う通りにしてあげばいいの？」

「言う通りと言うか、相談するので一人で勝手に消えたりしない事分かります？」

「いやー、小学生じゃ無いんだからそんな事しないよ。」

「一番怪しい人が其れを言うとは。」

「ん？なんか言ったか？雷斗。」

「いいえ、何も。其れじゃあギルスターさん、説明お願いして良いですか？」

「あ、はい。分かりました。」

ずっと放って置いたので、いきなり話題を振ったら案の定ビックリした様だ。

「えーと、まずはこの国の説明から行いましょう。」

この後ギルスターさんが話したことを俺は一生忘れないだろう。

そして、この日ほど神様が居るなら殴ってやろうと思った日は一生無いだろう。

始まり3 『日本人！日本人だっ！！』

「えーと、まずはこの国の説明から行いましょう。」

この国バルゴリア大陸のテイルの王国です。テイルというのは国名ではないのですが、この大陸はドラゴンのような形をしているんです。その尻尾の部分に当たるのがテイルの王国になります。其の他にも、アームの王国、ヘッドの王国などいろいろな国があります。そして、この王国は技術だけの発達を遂げた国、機械国エルトランス、魔法だけの発達を遂げた国、魔法国エルシエル、戦う術だけの発達を遂げた国、戦国エルグランド、そして、全てを統括する王都エルスターの4国に分かれていて、全てをエルスターが統括しています。・・・如何かなされたのですか？」

「い、いえ、何でも無いです・・・。」

きつとアホみたいな顔を俺ら全員がしていたのだろう。

「？では続きを。私たちの国は色々な方面で発展を遂げています、しかし、それでも他国との貿易などが出来ないで居ます。その理由として、魔族、魔獣の存在が在ります。国中に魔王が放つてしまつた為、物を運ぶルートは国の中の4国でも1本ずつしか有りません。そして、尻尾の付け根にあたる部分の何処かに、魔王が居るそうです。」

「居るそう？見たやつは居ないのか？」

「ええ、誰も居ません。歴代の勇者は魔王の幹部を倒した時点で魔王のトラップに掛かり、勇者の力を失ってしまいました。」

「なるほど。続けてくれ。」

「はい。そして、あなた方に頼みたいのは、魔王の討伐なんです。」

「任せとけ！」

宗谷先輩・・・。

「困っている人を放って置く事など出来ません！私も出来る限り協力します。」

桃香先輩……。

二人とも、正義の味方だな。

「貴方様は？」

「……あの神様もどきに言われちゃったしなあ。ここは引き受けよう。」

「俺も行くよ。でも、その前に色々な国を周らせてくれないか？」

「勿論、大丈夫ですが。」

「其れとき、こっちの方が大事なんだけど、ここから帰る術は？」
「……。」

顔が曇ってる……。之は最悪のパターンだな。

「今の所、私たちが貴方方を元の世界に戻す術は見付かっておりません。しかし、もっと遙か彼方にある違う王国になら有るかもしれません。」

「分かったよ。他に説明は？」

「あ、はい……。」

かなり責任感じてるみたいだなあ。この人は良い人だ。

「私から、話そう。」

部屋にいきなり入ってきたのはメイドさん。

「あ、あそこに居たメイドさん。」

「雷斗知ってんのか？」

「知っていると云うか、見た？」

「まあそんな事は良いから、聞きたいことは無いの？」

「貴女は誰ですか？」

「私ですか？……ギルスター、私の代わりにファミリー様のサポートに回って。」

「分かった。」

あ、親切そうなギルスターさん行っちゃった。

「それでは、失礼しますね。」

？この人、何かこっちの国の人と違う気がする……？

「私はですね、朝霧奈菜。5年前、召喚用の魔方陣が暴走し此方に

来てしまった日本人です。えーと、10月10日生まれの人、
今は20歳です。」

あー、分かった、日本人だから違和感を感じたんだ。この国の人
つて礼儀とかある程度大雑把だから日本生まれのような礼儀を重んじ
る人って少し浮くんだな。

「奈菜さんは、何でメイドをやっているんですか？」
珍しい、栄二の質問だ。

「まあ、この国に事故とは言え、来てしまつて、勿論ですが何もし
なければ、生きてはいけないですよ。なので、最初に会ったファ
ミール様にお仕えたのですよ。」

「ファミール様っていいお方なのですか？」

「とてもいいお方です。そうでなければ王にもお仕えしませんでし
た。」

「そういえば、先代の王つてどんな方なのですか？」

「アメリカ人と日本人のハーフで、とても気さくなお方でしたよ。」
・・・？アメリカ人と日本人のハーフ？

「あの、王様つて、異世界つて言うか、元のあっちの世界の人なん
ですか？」

「そうですよ。王様、賢者様、勇者様の三人はあっちの人です。で
すから、貴方方の内でも、王、賢者、勇者を決めて頂かなくては
いけませんね。」

神様を殴ることが決定した瞬間だった。

始まり3 『日本人！日本人だっ！！』 (後書き)

7月2日、修正 西洋の龍↓ドラゴン
日本でも無いのに西洋ってどういう事よ？
って言う友達の突っ込みにより修正w

始まり4 『俺は勇者じゃな・・・勇者だ。』

「で、誰がどの役職なのですか？」

「「「・・・」」」

「あの、あんまり沈黙が長いと此方もやり辛いのですが。」

「ああ、すいません。えっと、俺が勇者ですね。」

「私が賢者です。」

「・・・ということは。」

「そうだ俺がこの国の王だ！」

「すいません。国を潰してしまう事になりそうです。」

「なるか！」

「よりによつてこの人が王様とは・・・。」

「分かりました。他に質問したいことはありますか？」

「俺らどうやつて魔王を討伐すればいいんですか？」

「あなた方にはいくつかの権限が与えられます。それを自由に使ってください。王はこの国の全てを動かす権限があります。賢者はこの国の文献、そして魔法組合についての権限です。そして、勇者はこの国における軍事力の全権限があります。」

「なあ、王様の権限つて勇者と賢者の権限と被つてないか？」

「そうですね、なので勇者と賢者の持つている権限が優先されます。」

「其れでも充分な権限が有るんですから我慢してください、宗谷先輩。」

「むう、俺より二人のほうが偉いのか。」

「本当に国を動かす権限を持った人のセリフですか？それは。」

「うるせえやい。雷斗は知らないのか？人間の欲は底が見えないんだよ。」

「やつぱり王様辞めて貰った方が・・・。」

「御免なさい、ちゃんとやりますから、許してください。」

桃香先輩、クスクス笑ってないで助けて」

「兎に角、宗谷先輩は黙ってて下さい。」

「はい……。」

「あのへ他に質問は？」

流石日本人、話に割り込まず終わったらしいと言つ所で話を戻したね。

「うーん、まだちょっと混乱してるから、今一質問が浮かばないんで今までの勇者が聞いていた質問を教えてくださいませんか？」

「勇者の能力を目覚めさせる何かって有るのか？とか……。」

「あー、きになる、そこ。」

「有りますね。」

「へえー大体ここもそんなもんか。どんなの？儀式みたいなやつ？」

「いいえ、この国には過去の王が作り出した意思を持つ装備があるんですよ。」

「へえー、イ・フィニツ・ストラ・ス（I・）みたいなやつか。」

「何ですか？それ？」

「んー、気にしないで下さい。」

「はあ。で、その装備をつけるとその装備と対話しなければならぬのです。そしてその時にその装備と相性が良いと分かるとその装備も色々な力の使い方を教えてくれるんですよ。あ、そつだ、国について聞きました？」

「聞きましたよ？」

「それなら良いですね。機械国エルトランスにも同じ様な物が有るんですよ。」

「意思を持った装備ですか？」

「いえ、身体能力強化のような特殊な能力を持った装備です。」

「其れなら魔法で充分じゃないんですか？」

「いえ、その装備ある一つの装置に、魔力転換システムが有るんですよ。」

「魔力変換システム？」

「ええ、この国の宝具にも使われていて、魔力を流し込むとその魔力を別なエネルギーに変えてチャージできるというシステムです。」
「なるほど、チャージ出来る。之はかなりの利点ですね。」

「ええ、魔力が無くなってしまうと使えなくなったり、移動だけに自分の力を使わなければならぬ魔法に比べて普段から少しずつチャージをして置けばいざと言ったとき全力で戦えますから。」

「なるほど。其れでは折角ですし、その宝具って言うのを見せてもらえませんか？」

「其れではそうしましょう。付いて来て下さい。」

始まり5 『呼ばれ…て無いよな?』

「ここが、宝具を保管している倉庫です。」

「こんなただの倉庫で大丈夫なんですか?」

「大丈夫です。これはただの倉庫ではないので。」

「・・・?どういう事ですか?」

「之を作ったのは宝具を作った過去の王なんですよ。」

「其れでも完璧なんてことは無いですよね。」

「いいえ、之はこの世界の人間が触れることは出来ませんから。」

「触れることが出来ない?之に何か仕掛けてあるんですか?」

「ええ、之と言うより之を中心とした半径50cmに、この世界の者の侵入を防ぐという概念が込められていて、異世界の物しか入れなくなっています。ちなみに異世界の者にも見えてはいまずし、特定の人物にもこの中の情報が受け継がれていますから忘れ去られる心配はありません。」

「・・・その過去の王って何者なんですか?」

「分かっているのはその王は女だった事と、物作りの能力に長けていて、その自分の作った物に何らかの概念を込める事ができた、という事だけです。」

「面白そうな人だ、会ってみたかったなあ。」

「そうですね、それじゃあ行きましょうか。」

・
・
・

「うわ 何だこの武器の山は。」

「之も全部宝具ですね。」

「何でこんなに作ったんだ?」

「その王に実際に聞いたと言う文献が残ってしましてね、其れにはこう書いてありました。」

「『今回の私たちの希望では駄目だった。ならば未来の希望ならどうだろうか？私はそれに賭けてみたい。』だろ？」

「何故知っているのですか？」

「思い出した。」

「ほう、面白いですね。まあ、その通りです。」

「で、その王様はこんな量の武器を一人で作った訳ですね。」

「そうなります。」

「凄い人だったんですね。」

「ええ、其れでは選んでください。」

・ ・ ・

・ ・ ・ ?

何かに呼ばれている気が・・・？

こんな所に人なんて居る訳無いしなあ。

でも、行かないやならない気がする。行って見るか。

進んだ先で見つけたのは紅色をした一つの箱。血の色ではない、そこまで鮮やかでもない。どちらかと言うと埃に塗れて黒ずんでいる。その中には透き通った黒色をした不思議な鉱石でできた指先が開いた手袋のようなものと、基本布だが、所々に手袋と同じような鉱石が使われた此方の靴と、見覚えのある気がするコインが一つ入っていた。

でも装備だけじゃ心許無いので、剣か何かを探そう。

と言うことで、その箱の近くにあった太刀と両刃剣を二本ずつ拝借。之でオツケエ。

てことで戻ると、まだ二人は戻って無かったので、奈菜さんとお喋りしてみようかな？

「奈菜さん、此方で日本人って浮きますね。」

「何ですか？」

「此方は作法とかは大体で済ませているので、礼儀を重んじる日本人って浮きませんか？」

「あゝ、なるほど。そうですね。かなり浮いた存在でした。でも貴族とかも礼儀とか良い人で私たち程度ですので、樂つて言えば樂ですかね。」

「貴族つて例えばどんな人ですか？」

「代表的なのはアルフレッドさんですね。こっちでは位とか一応付いてますけど大体の人がさん付けで呼んでますね。あ、これはアルフレッドさんだけでは無いですよ。」

その後もぐだぐだと話し続け、二人が来たので戻る事にした。

さーて、お部屋に帰りましょうかい？

始まり6 『速いぞー！すげー！』 (前書き)

初めて…？の戦闘シーンです。

始まり6 『速いぞー！すげー！』

「ああ、そういえばあの倉庫って掃除してんのか？」

「いいえ、基本してないですよ。殆どの人間が入れないので掃除をする意味が無いですからね。」

「そうなのか。」

「どうかしたのですか？宗谷さん？」

「いや、崩れちゃったみたいで物凄く悲惨な所があったからさ。」

「分かりました、後で私がかたづけておきますよ。」

そんな感じでのーんびりしていた。しかし其れは、一つの悲鳴によつて掻き消される。

「なんだ！？」

「宗谷先輩！ファミールさんと居て下さい。桃香先輩行きましょう。」

「分かったわ。」

いやーこの世界での生きるための力は凄いもので走るのが凄く速い。世界新なんて余裕だね！

そんな事を考えていると、王城の外に出た。悲鳴は大きかったので悲鳴の主はまだ近くに居るだろう。

「えーっと、こういう時はっと。」

受け継いだ勇者の記憶から聴覚と視覚強化＋イメージの標的をロツクオンする呪文を引っ張り出す。

「『我が耳に届かぬ音は無し』と、『鋭き眼の先には標的有り』つと。」

この世界での魔法は面白いもので多くの魔法単語＜マジックスペル＞を使って目的の魔法を作り出す。ドラゴンテイルにもこんなシステムは有ったがここまで複雑ではなかった。しかも、さらに古代魔法単語＜エンシェントマジックスペル＞という物も有ると言うのだから参ってしまう。

そして、後ろから桃香先輩が来ている事を確認する。俺等ほどではないが、敵もかなりのスピードで移動しているみたいだ。

そしてついに王都を出て近くの新緑に入って行って止まった。逃げている方も追いかけている方も疲れている。しかも場所は開けた広場、チャンスだ。

「桃香先輩、攻めて下さい。俺も少し装備を整えてから行きます。」

「分かったわ。まずは逃げていた方を助けるのね。」

「そうですね。まず、何処からか突っ込んでみて下さい。」

「分かったわ」

そう返事をすると思わずに走って行った。

その間に俺は先ほど箱から出した装備をつけ、二本の太刀を抜く。木の影から見てみると、一人は兵士の様だった、そして、もう一人は小さな女の子だった。

「もう逃げてでも無駄さ、諦める。お前にはその首輪が有るんだからさ。」

「知らないもん！私だって普通の人間の女の子みたいになってみたかったけどもん！」

「其れが無理だって話だよ。お前は奴隷だろ？人でないものの分際で自由などとほざくな！しかも、・・・誰だ？」

あつちやー。桃香先輩やつちやった。いや、その話は確かに聞いててイラッてしたけど、まだ出てくのは早いなあ。でも、俺も行こうかな。

「『速く駆ける事、風の如し。』」

あの先輩は絶対身を挺して守るという手段に出たんだろう。でも、俺は助けるぜ。

「貴方達はこの子を見て如何も思わないの！？」

「この子とは誰のことかな？というより、君は誰だい？」

「この子って勿論この女の子・・・？居ない？」

「クソッ！逃げやがったか！？」

「逃げてないよ。あそこに居る。桃香先輩、あの子を宜しく。」

「・・・分かったわ。」

「お前は誰だ？」

「救世主？ちよつと違うなあ。まあ、勇者って事で宜しく。」

「クソッ！」

手に持っていた両刃の剣で、俺らの胴を薙ぎに来る。こえー。でも・
・。

「避けるよっ！」

後ろを向き、相手の頭上を一回転して飛び越えた。そして見えた相手の背中を縦に切る。しかし、其れを相手は前に少し飛ぶことでかわした。しかし、そこから前に剣を突き出し、追撃をかける。其れをかわしきれずに、相手のわき腹を切り裂く。と同時にバックステップ、バツチを上跳到ね上げ、サイドステップからの・・・。

「死ねえ！」

バガアアン！

全力での裏拳。しかし少しずれてしまった様で直撃はしなかった。

「クソッ！覚えとけよこの女！」

ああ、逃げてく。よかったあ。脇腹から血を流して左手の辺りを全部抉り取った奴と戦いたくは無いからね。

「桃香先輩、大丈夫ですか？」

「ええ、この子も無事よ。」

胸に抱えられてスヤスヤと眠る少女を見て、ホッとした瞬間、頭に何かが流れ込んで来る。

「ライ君！如何したの？」

そのまま、意識は途絶えた。しかしその寸前一人の少年を見た気がした。

始まり7 『頭の中・・・精神世界?』

『全く、ここまで入り込むのに苦労するとわな、思っても居なかったな。』

誰だよ・・・今度は俺の頭の中か？

『頭の中というところとちよつと違うな。』

んじゃ、精神世界？

『其れが一番近いだろう。』

あつそう。

『・・・』

「で、お前は誰だよ？」

『お前も説明を受けただろう？宝具には意思があるっていう。』

「あー、其れね、聞いた気がする。」

『で、私はその中でも上位の宝具だよ。』

「自分で言つて良いのかよ・・・。」

『え、だって作る為に掛けた時間は二十八時間、込められた魔力は下手したら普通の人間一人分、素材も最高級だぜ。之を上位と言わず何と言つ！』

「いや、知らねーよ。」

『何だと!』

「そこまで驚くことかい？」

『この素材を知らないとは。私を誰かに見せなかったのか?』

「いや、箱に入ってたし態々見せる物では無いかと。」

『お前は何なんだ?』

「それは・・・人間?」

『その位知つておる!』

「まあまあそう騒ぐなよ、俺はあんたを作った王様と同じ異世界から来た人間かな?あ、でも、同じ所では無いかもしれないな。」

『不思議な奴だ。』

「不思議って言うなよ。」

『御前みたいなのは初めてだ。そんなに飄々としていて馬鹿みたいな事を言っているのに、考えている事は一級品だ。』

「其れ褒めてんの？貶してんの？」

『素直に褒めているんだよ。しかし、御前なら出来そうだな。』

「あのさあ、出来ればすぐ戻してくんね？」

『何故だ？』

「あんたが今してる顔をしていた奴でいい事考えていた奴は一人も居ないからだよ」

『まあそう言うな、これを使えば絶対強くなれるぞ。』

「・・・。」

『何を悩んでいる？』

「あ、分かる？」

『ここは御前の精神だからな。御前の感情は漏れ出してくるわ。』

「なる。」

『で、何を悩んでいる？』

「いや、今のままでも充分強い気がするからこれ以上強くなる必要も無い気がするのだが、しかし、しかしだな、これから何かするにしても、力って持っていて損する物ではないかなあと思ひもする訳だ。」

『なるほど。』

「だから、ちょっと悩んでいる。」

『では、ここは私の案に乗ってくれないか？』

「何だよ？」

『私を持つている限りは、私は御前の意識に入り込めるんだ。』

「んじゃ捨てるね。」

『いやいやいや、最後まで話を聞きなさい！』

「えゝ、面倒臭いなあ。」

『聞きな。』

怖あ。

「分かりました。」

『なのでな、御前が暇な時、頭の中で「出て来い。」というイメージをするがいい。そのイメージが送られて来たら、私の方でも周りの状況を見て頭の中に出て行こう。その時に返事を聞かせてくれればいい。』

「・・・分かった。」

『其れでは御前の名を覚えてくれぬか？』

「雷斗。」

『なるほど、雷斗か。では、私も名を覚えてやりたい所なのだがな。』

『

「名前が無い、ね。」

『ほう、流石雷斗。之だけで分かってくれたか。』

「まあな。で、如何すんの？」

『名前を付けてくれ！』

「・・・やだ。」

『いや、そう言わずに、頼むよ。』

「ん、じゃあ天馬で良いよ。」

『なるほど。では宜しくな、雷斗。』

「宜しく天馬。」

『あ、そうだ。』

「まだ何か有るの？」

『私を呼ぶ時、名前で呼んでくれないか？』

もじもじしてる・・・女性の母性本能を擽るんだろうなあこういう

奴。でも、まあ・・・

「いいよ。御前が呼んで欲しいんだろう？」

『ああ、私の持っている数少ない物の一つだからな。大事にしたいが、使える物は出来るだけ使いたいんだ。』

「ハハッ。いいよ。」

『ありがとう。』

「ん？何か言ったか？」

『いや、なんでも無い。』

「じゃ、どうやって戻るんだ？」

『眼を瞑って、そうだ、そして其のままあちらの世界でに有る、強く印象に残っている物を思い出せ。其のままそこから出てくる白い糸のような物を辿れ、それで戻れる。』

「分かった。じゃあな。」

『おう、待っているぞ！』

俺の意識はそのまま白い糸が作り出した道を辿りだした。

始まり8 『誰が女だああ!!』

「うゝん」

「あ、ライ君起きた。」

「あ、桃香先輩。」

「ここは、まだ戦闘を行った所から移動してないらしい。」

「よかった。いきなり倒れるからビックリしたのよ。」

「すいません、心配掛けちゃって。」

「いいのよ。それよりね、一つ問題が発生したの。」

「何ですか?」

「あのねと言いながら耳打ちしてくれた内容は俺の弱点だった。」

「俺は男だ!」

そう、俺は女顔で初対面の奴は大体俺の事を女と判断する。しかも髪の毛は肩まであつて後ろの方は跳ねている。そして止めは155cmしかない身長である。

「絶対違うゝ!女にしか見えないゝ!」

騒いでるのはさっき助けた女の子。この子は頭に何か付いていて首輪をしているし、今ここに居るとさっきの奴の仲間が来るとか色々考えなきゃならないが今はそんな事はどーでもいい。

「俺は男だ!今すぐにでも全裸になつて証拠を見せてやろうか!」

この異世界で人間が同じ作りをしていないとも考えられるが、俺の頭にはそんな事は些細な問題だ。

「其れは止めてくれないかしら?ライ君。」

「真ッ赤になつてる?何でだ?」

「桃香先輩は止めて欲しいのかも知れないですけど、男には譲れぬ時があるのです。どうかご勘弁を。」

「御前は女だろゝ。」

「うるさいっ!今証拠を見せてやる!」

「あ。」

「如何したんですか？先輩？」

「追手だ。」

「む、追手か、しょうがない、逃げますよ。」

「ほっ……。」

桃香先輩がホツとしてる？何でだ？敵が来てるってのに。

「放せ〜！」

脇の辺りでバタバタしている奴が居るが、勿論無視。

・
・
・

「ここまで来れば安心かな？」

「放せ〜！」

む、まだ脇の辺りでバタバタしてたのか。子供の体力恐るべし、だな。

「五月蠅いぞ、この野郎。」

「まあまあ、落ち着いて。それより奈菜さんとソウ先輩の所に行くのが先でしょ！」

「む、了解です。」

・
・
・

「あ、帰ってきた。」

「その子は誰ですか？」

軽く奈菜さんの視線が痛い気がするが気にはしないで置こう。俺にとっては馴れた視線だしな。

「変な人に襲われていたのを助けてあげたんですよ。」

「何で気を失っているのですか？」

「気にしないで下さい。」

「なあ、その子の名前何ていうの？」

「知らないです。」

「あつそう。」

「食い付かねえのか。まあいいや。」

「・・・如何するの？」

「いや、知らないですよ。」

「何でつれて来たの？」

「ソウ先輩、なんてひど「はっ、置いてくりやよかった!」・・・。」

「

「置いて来たら追手に殺られてしまう。御人好しの雷斗さんとしては置いて来る訳にはいかなかったと言う訳ですね。」

「いや、俺は御人好しでは無いんですが・・・。」

「・・・まあまあ、そう言わずに、本音は置いて行く事が出来なかったんですね。」

「奈菜さん、そんなにこいつを買い被ってはいけません。こいつはきつと気を失ったこの子連れて来て助けたと言いつつほんとは強姦するつもりなんですよ。」

「いや、軽くロリコンとは言ったが俺はそこまで落ちちゃねえよ。」

「え?でも。」

「違つかんな、絶対にそんな事しないぞ」

「う、うーん。」

「あ、起きた?」

俺はこの日、とんでもない罠に嵌ってしまった。

始まり9 『クソツタレ！女だと！ふざけるなあ！』

「う、ううゝん。」

「あ、起きた？」

この子の顔を覗き込む宗也先輩。軽く不審者に見えるのは俺だけだろつか？

「むう、ここは？ってうわっ！」

いきなり飛び退かなくてもよくない？おかげで腕が痛いんだが。

「御前ら、誰だ！」

覚えてねえのかよ！

「怖がらなくて良いのよ。」

「あ、あの時のおねえちゃん。と、女の人。」

「俺は男だ！」

「如何したの。」

相変わらずマイペースな・・・。

「あのね、この子がライ君を男だと認めないのよね。」

「女だと言いつづけていると。」

「そついつ事になるわ。」

「「え？違うの？」」

おゝいもう一人いゝ。

「あれ？奈菜さんに話してな「いいえ、すいませんね、本当はこいつ女なのに見栄を張って男の振りをしていたんですよ。全く、こいつもつまらない見栄を張るもんです。しかし純粋な少女と聡明な方には敵いませんね。」・・・。」

おい、この兄貴は何をほざいてんだ？

「ああ、良かった。」

「如何してですか？」

「いえ、この雷斗様、で宜しいんですね？」

「何で知っているんですか？」

「いえ、話を聞いていて何と無く。」

「なるほど。いえ、ばれてしまったんだ本名を言いましょう。こいつは神埼瑠奈って言うんですよ。改めてお願いします。」

「おいっ！何いつ、フガッ！」

口を塞がれてしまった。しかも桃香先輩に……。裏切られた！

「では瑠奈様で……。瑠奈様の部屋には女物しか用意して無いんですよ。」

「何がですか？」

開放されたため、口を挟んでみる。

「衣服等、その他諸々です。」

「……。」

「有難う御座います。其処までして頂いて。」

「嘘付いちゃ駄目なんだよ。」

黙れ。其処に居るちっこいの！何が言いたい！

「やっぱり女だったじゃないかあ。」

「……。」

「じゃあ、とりあえずお部屋まで案内してもらって宜しいですか？」

「はい。其れではこっちです。」

後で覚えとけ！

・
・
・

「ここが瑠奈様のお部屋です。右隣が宗谷様、左隣が桃香様のお部屋となっております。何か困ったことが有ったらこの廊下を真っ直ぐ行つた突き当りが私の部屋なので其処まで来てください。」

……。突き当りが見えないってどういう事？というかここまで来るのに歩いた道程すら覚えられないんですが……。

「見えねえ……。」

桃香先輩も同じ事を思っているはずだ。どんだけ広いんだよ！この王宮は！

「あ、そういえば、ファミール様と王妃様が後で会いたいと仰っていましたか？」

「うん。明日で良いですか？」

「分かりました今日の食事などは部屋に持って来ますね。」

「有難う御座います何かから何まで。」

「いえいえ。では、また後で。」

・ ・ ・

「うわゝ。広すぎる。」

俺は自分の部屋に在ったベットにダイブしていた。

「しかしこのベットふわふわで気持ちいいなあ。」

このベット、ここまで文化の水準が低い国でよく作れたな。と思った。勇者の記憶から拾った物の中でこの国の文化の水準についてもあったのを思い出しての考えだった。

「うわあ。ほんとに女物しかないよ。」

ベットでゴロゴロしていて目に付いたクローゼットもどき（クローゼットに似ているが形や装飾、取っ手の感じから少し違うと判断した。）を開けて見ると、其処には、この国での標準的な女物の服、煌びやかなドレスみたいなもの、冒険者用の動きやすい服など多種多様だった。

「しかし、今考えるとよくこの格好で居られるなあ。」

今俺が着ているのは学ランだった。因みに兄貴も同じく学ラン。桃香先輩はセーラー服だった。今時こんな格好をしなければならぬ様な学校は珍しいため、この世界に来る前も同じような視線に晒され続けていた為に慣れてしまっていて、こっちにとんで来てからもこの格好で居続けたのだ。

「しょうがない。んじゃ、着替えておくか。」

そう言つて標準的な女物の服と、下の方にあったサラシを手に取り、とりあえず着てみる。サラシを付けてみたのは何となく気分的なものだ。ん？変態とか思った人手、挙げる。今すぐ撃ち殺す！

「自分で見ても違和感が無いから怖いな。」

この国で鏡と同じ用途で使われている魔境石を見ながら呟いて、袖を持ちくるくる回って見たりした。

そんな感じの事をしてみて、また布団にダイブして10分（体内時計）程度過ぎた時にドアをノックする音がした。

「どうぞ。」

入ってきたのは何時もの二人だった。

始まり10 『人任せの人たちだ・・・』

「瑠奈」。

「早速その名前で呼びますか・・・。」

「いや、慣れて置く為に・・・。」

「やってしまった物はしょうがない。で、何のようですか？」

「いや、情報の整理をしようかと・・・。」

「なるほど。」

「瑠奈、御前は如何思う？」

「この世界はゲームでしか知りません。しかも、召喚した、と言うんですから元の世界の知り合いが居る可能性は少ないでしょう。」

「まずは、生きる術を探ることからかな？」

「いや、お兄ちゃんが残つて、王様としてこの国を見ていてほしい。桃香先輩はそのサポートをお願いします。」

ふつ、人の事を畏になんて嵌めるからいけないんだぞ。これからはお兄ちゃんと呼び続けてやる。ついでに一人称は私に直さないとかなあ。

「分かった。」

「瑠奈ちゃんは如何するの？」

「私ですか？私は一週間はこの国にある魔法をきちんと学びながら、冒険者としての登録証のこれが使えたらこれを使って、色々な国を回ってみようかと思っています。」

「一人で？」

「そういうことです。」

「じゃあ、私からも一つ言わせて貰えないかしら？」

「？どうぞ。」

「私は賢者と言う位だから、魔法をもっとしっかり学ばないとならないと思うの。」

「なるほど。」

「だから私は魔法国エルシエルに行こうと思ってるの。」
「えっ？」

「魔法についてなら魔法国に言っただけで学んだほうが良いと思うの。」
「それは分かりますけど・・・。」

「宗谷君を一人にするのが心配なのね？」

「まあ、そういうことになります。」

「大丈夫。ファミールさんと奈菜さんに任せていくから。」

「ああー。なるほど。俺は留守番か・・・。」

「じゃあそうしようよ。」

「待つて下さい。」

「？」

「魔法国に行く時、新たな賢者が修行のために旅立ったと言う情報と俺ら全員の性別などを公開したほうが良いと思いますが・・・。」

「何で？」

「まず、賢者のほうはそっちの方が待遇も良いですし、色々な文献にも触れられると思うからです。」

「公開の方は？」

「私は仕方が無いのでこの国で女として生きて行きます。その為に冒険者の登録の時や、周りの人間には女だと通した上で、全体で、私は男と紹介する事で、命を狙われ難いかなあと思うからですよ。」

「なるほど。」

「では、そのつもりで。」

「後、明日ファミール様と王妃様って方に会うことになっているのよね？」

「そう言えばそうでしたね。」

「この格好じゃ不味いわよね。」

「セーラー服と学ラン。不味いと思うな。うん。」

「瑠奈、その服何処で手に入れたんだ？」

「微妙に笑いを堪えてる感がある。絶対に笑ってるでしょうね。」

「其処のクローゼットもどきに入っていました。」

不機嫌なのを隠さず喋り続ける。

「儀式用、普段着用、冒険用、何でも有りますよ。」

「へえ、後で見てみよう。」

「それより、私たちは現状把握に来たのよね？」

「？そっだよ。」

「何でこんな話をしているんだろうって思わないの？」

「あー、そっだねー。」

「興味無さそうですね。」

「その辺は全部考えてあるんだろ？瑠奈。」

「フツ。その通りですね。」

「全く二人して人任せなんだから。」

「でも考えてあるんでしょ？」

「ありますよ。」

「ほらな。」

「瑠奈ちゃん。説明お願いしても良い？」

「はあ。ま、いいですよ。」

ため息を一つつき、私は自分で整理した結果を喋り始めた。

始まり11 『誰?』 (前書き)

ちょっと長めになりました。

まあ、特に変わらないかもしれませんが・・・w

始まり11 『誰?』

「まず、この国での言葉についてですね。一応言葉は通じているので、元の世界と同じ言葉、もしくは、この貰った記憶の中で言葉を自然に学んだか、二通りあります。私は後者の方が可能性は高いと思っています。そして、文字。これは本でも借りない事には分かりませんが、読めるんじゃないかと思っています。これも言葉と同じ理由ですね。次は戦闘に関してですね。身体は相当強化されてますよ。走ってみて分かりました。魔法はテイル（ドラゴンテイルの略称）と同じで、＜スペル＞を組み合わせで作ります。でも、ここでは＜エンシエントスペル＞と言うものも在るらしいですから学んで見たい所ですね。じゃ、質問のある人。」

「特に無ーし。」

「大丈夫ですわ。」

「これ以上で知りたいことは?」

「はい、質問。」

「なに?」

「ここはテイルの王国で間違い無いんだな?」

「それは現実でしょうね。」

「分かった。」

「はい、他にはー?」

誰も声を上げない。

「無いみたいだね。じゃ、説明終わり。」

重苦しい沈黙が部屋を包む。二人は真剣に考え事をしている。俺は説明が終わって暇だ。そして、この少女も暇そうだ……。えっ?

「うわっ!」

「如何したの?て、えっ!?」

「。。。。。」

其処の一人!反応無しかい!

「え、えーと……。何時から居たの？」

「……さつきから。」

「うーん、ごめんね、名前聞いてもいいかな？」

「……ルナル、ルナでいい。」

其処には、先程助けた少女、ルナルが居た。

トントン

「ん？如何したの？」

ルナに肩を叩かれた。

「座っていい？」

「いいよ。好きなところに座って。」

そう言くとルナは俺、いや私が。の膝の上に乗ってきた。

「……。」

なんか身長の問題もあって、すっぽりと嵌った。何か悔しいけど、まあ気にせずに。丁度いい所にあつた頭をついでに撫でてやってみる。

「そつえば、ルナは何でこの部屋に来たの？」

頭を撫でもらうのがルナは好きなようだ。気持ち良さそうに眼を細めながら答えてくれた。

「……最初は女の人の部屋に居た。で、ここは何処？って聞いたからお城だつて教えてくれた。で、何でここに居るの？って聞いたら襲われていた私を助けてくれた人が今はここに住んでいるからって言つてた。最後に、お礼を言いたいつて言つたらこの部屋に連れて来てくれた。……あの……。」

「どうしたの？」

喋りやすいように頭を撫でるのは既に止めている。

「……有難う御座いました。」

「私たちは人として当然の事をしたと思つてゐるの。まあ、私たちの勝手とはいえ、だから、良いのよ、お礼なんて。」

「……でも。」

「じゃあさ、もっと私達の役に立つ事をして貰おうよ。」

私の提案、ナイスじゃん！

「・・・役に立つこと？」

「そう！私たちの質問にちょっと答えてくれれば良いよ。」

「・・・分かった。」

しかし、この子ってこんなに無口だったわけ？

「君の耳に付いてるそれって何？」

あ、そういえばそうだ。

「・・・これは私が獣人族の末裔である証拠。」

「獣人族かあ。」

「・・・そう。虎型だから猫みたいってよく言われる。」

「何で黒いのですか？」

「何が？」

「ほら、ルナちゃんの耳、黒くありませんか？」

「そう言えばそうだなあ。」

「・・・これは・・・。」

「言いたく無いんなら言わなくて良いよ。」

「・・・いや、貴方達なら・・・。」

少しの間の静寂。

「・・・私のお母さんは獣人でした。」

彼女が静かに語りだした。

「・・・お母さんが暮らしていたのは獣人の村の中でも端の方に位置する森の中でした。そして、そんな所に籠った理由は、お母さんは元最強の12冒険者呼ばれた内の1人、アリー・フェルアで、もう騒がしいのはいやなの。と言っていてからだと思う。」

「ツツ！まさか、この世界であいつが母親をやっている？いや、結婚システムはゲーム内のシステムに有ったかも知れない。うん。確かあった。」

「・・・どうしたの？」

「いや、後で説明してあげるから、まずは全部話してくれ。」

「・・・分かった。・・・ある日、お母さんの住んでいた家の近く

の色々なものが急に騒ぎ始めた。その根源を探すために森の奥に行
って見たら、其処には男の人が血まみれで倒れていた。それが私の
お父さん。その人を家まで連れて帰って、看病したんだって。でも
ね、お父さんは・・・魔族だったの。でもね、お父さんは、人間と
魔族と亜人種が共存する世界を目指していたんだ。でも二人とも居
なくなっちゃったんだ。だから二人を追って旅に出たの。でも。す
ぐに捕まって、奴隷として売られてしまったの。これでお仕舞い。」
・・・何ともまあ変な巡り会わせだ。

「・・・お母さんについて何か知っているの？」

「・・・。前の世界では知り合いだった。私と桃香とお兄ちゃんと、
あの人と、もう一人、龍人族のエルア・スロイル。この5人は同じ
ギルドのメンバーで、私の名前はライル・エルトラスだった。」

「・・・！貴方がライル・・・。天秤宮のライルなの？」

「その呼び方馴れないんだけどなあ。」

「・・・じゃあ二人は？」

「俺はアルザック・シュトローゼ。」

「私はエイル・スタージュン。」

「・・・獅子宮のアルザックに白羊宮のエイル、そして天秤宮のラ
イル、天蝸宮のエルア。そして、処女宮と呼ばれたお母さん。その
5人のギルドってもしかして・・・。」

「竜の牙だよ。」

「・・・まさかこんなところで会うとは思っても居なかった。」

「まさかあいつの子に出会うとは私たちも想定外だったよ。」

「・・・お母さんってどんな人だった？」

「あいつか・・・あいつは・・・」

「元気の塊のような奴だと最初は思ってた。」

「でも、あの方は。」

「誰よりも仲間思いの優しい人だった。そして。」

「「アホだった」「」

「・・・。」

ごめんね、あいつがアホなのは否定しようの無い事実なんだ。

「・・・そっか、私もお母さんのようになりたい。」

「なれるさ、君なら。」

こうして夜は更けていくはずだった。

始まり12 『忘れてた？はっはっは、そんな事無いよ？』

『・・・ラ・・・ライ・・・雷斗・・・雷斗！』

「なにさ、五月蠅いな。」

『忘れてたでしょ。』

「何が？」

『僕を呼んでって言ったでしょ！』

「そーだっけ？」

あの後ルナとアリーについてずっと話してて、ルナが寝ちゃったから私も寝ようとしてたのに。

『そーなんだよ！』

まあ、いつか。

「で、何をするの？」

『特訓。』

「ヤダ。」

『いやいやいや！おかしいでしょ！君が力をくれて言うから手伝うって言ったのに！』

ふむ面白いな。

『で、特訓する？』

「してやらん事も無い気がしなくも無いが如何してもやって欲し
いなら、それ相応の何かが対価として必要なわけで、何か出せるか
？」

『おかしいでしょ！力を手に入れるための特訓に僕が付き合っと言
っているのに、何故、君に僕が対価を支払わなければならないんだ
！』

ふーむ、的確な突っ込み、いいね。

「よし、任せておきなさい、特訓とやら、受けてたとう！」

『ふう、やっと受けてくれるか・・・。』

「そっいえば、御前さ、そんな喋り方だっけ？」

『ああ、こつちが素だよ。』

「そつか。」

『では、特訓の内容を説明しよう。』

・
・
・

「鬼畜過ぎない？それ？」

『何も言つてないよ！』

「いや、だって、あれ（・　・　）が出たら飛ばしで、後で

俺が説明するパターンだろ？」

『いや、パターンも何も一言も喋つてないしね！一分どころか30秒もたつてないよ！』

「パターンは重要なんだぞ！ついでに言えばノリも！」

『どつちも今はいらないよ！？』

「今はいらなくても、いつかいるようになるぞ！その時後悔しても知らないからな！」

『その時後悔も何も今必要ないんなら、今は真面目に聞いてよ！』
分かったよ聞けばいいんだろ聞けば。

・
・
・

「鬼畜過ぎない？それ？」

『何も言つてないよ！』

以下省略

・
・
・

「なるほど。実際鬼畜じゃねえか。」

『否定はしないよ。』

この天馬が言つた特訓内容。

この世界には火、水、風、土、光、闇という6属性に分かれている。で、俺が習得するのは、色変換<カラーチェンジ>と呼ばれる、基本一つの属性以外は初級魔法しか使えないのに対し、全ての属性で（センスしただが）最低、中級魔法、最高、最上級魔法が使えるようになるらしいスキルだ。で、それを手に入れるために俺6人（火、水、風、土、光、闇）と戦えだ。

『大丈夫！個人では君の半分位の力しか持っていないからさ！』とか言ってた奴もいたなあ。うん。

「やっぱ止める。」

『いやいやいや、ここまで来て何を言う！？』

「だってー、6対1だよ？勝てるわけ無いじゃん。」

『でも6体召喚しちゃったよ？』

「わーお。」

襲い掛かってくる俺達。俺に俺が襲い掛かってくるなんて！困ったなあ。俺にはそんな趣味全然無いんだけど。ナルシストでもないし・・。

『今どうでもいいこと考えてたでしょ』

わーお、天馬君するどーい。

『早くしないとやられるよ？』

「殺してオツケー？」

『いいよ、別に。』

そう言われた途端左右にの腰にあった両刃剣を一振り、俗に言う居合いですね、しかも両手での。それによって、土の俺を撃破。（何で分かったかって？あいつの装備全身茶色だもん）その後、振った剣を少し斜めにし、左右の剣に時差を作って、踏み込みながら振ることによって俺を二体撃破。（緑と、青。）剣の軌道を途中で無理やり上に向け、飛ぶ。振り上げられた剣ごと上昇し、落ちて来る時の重力も使って次の奴を真つ二つ（黒）その間、魔法の詠唱をしていた赤から放たれたかなり大きな火炎球、着地して直ぐなので、危ないのだが、足のばねを使い横に跳び、かわす。しかし火炎球には

ホーミング機能があつたらしく、後ろから追跡してくる。しかし、前には白い俺、万事休す、一応ギリギリまでひき付けて、飛んで見る、しかし、白い俺はそれを予想していた様で、火炎球を俺に向かって、打ち上げてくる、おいおい、冗談じゃねえぞ、俺は空中にいる、かわせない、さて如何する……。よし、

「『我が周囲の風よ、壁となり、我が足場となれ！』」

風の壁を作り火炎球を防ぎ、ついでに足場になるようにしていたので、着地し、本能に従い横に跳び、下に着地する。案の定先ほどまで俺がいた場所には白い俺が無数の斬撃を食らわせていた、あぶねえな。しかし、其処に俺が居ない事に気付いたようで、此方に突っ込んでくる。それに向かつて俺も突っ込み、足首、脇腹、首に斬撃を放ち、あちらの剣を弾き飛ばした。（白殲滅完了）最後の赤が何をやっていいのかと思つてそちらを見ると、魔法を唱えている様だった。阻止は今更出来ないだろうから防御系の魔法を頭に浮かべておく。相手の詠唱が終わつた。放たれた魔法はたしか上級魔法の『赤き槍の雨』だつたと思う。中級魔法『赤き槍』つまりくファイヤーランス。それを相手の上に多数降らせるやつだつたと思う。案の定上から炎の槍が降ってくる。それを避けるため、かなり短い詠唱では、防御力は高が知れているので、火属性専用の防御系魔法を唱える。

「『火はわが身を焦がさず消滅せん。』」

しかし、あの量を、一つの防御系魔法で防ぐのには無理がある。なので、その防御が破られる前に、次の魔法を唱える。

「『我が領域に入りし者、その身はわが身に届かず、その手は、我が身を触れることなくその足は進む事を止める、全てを消滅せよ。』」

かなり上位の魔法を出したので大丈夫ではないかと思う。槍の雨が止んだようだ。さあ、反撃開始だ。俺が使えるワンスペルの中で数少ない中級魔法を繰り出す。

「『雷神の三叉槍くライジング・トライデント>！』」

かなりの魔力を込めたため、威力は保障できる。案の定、赤が張った防御魔法を貫き完全に殺せたようだ。しかし、呆気ないなあ。

「終わったぞ、天馬。ってうわっ！」

そう言った途端、後ろから風の斬撃が飛んでくる。其処には殺したはずの緑が立っていた。

『あ、そういえば、十回ぐらい殺さないといけないんだっけなあ。』

それに、最初はフルパワーじゃなくて一回復活する毎に強くなって行く筈だったなあ、そういえば。』

わー、どっかの馬鹿が、何か言ってるよ。あとで殺してやろう。

地獄絵図とは、正にこの事だった。

始まり13 『拷問？何それ美味しいの？』

「まったく、死んだら如何するつもりだよ。」

文句を言う体力が有るだけ良いのだろうか。

『お疲れさまー。ちなみにここは精神世界だから実際に死ぬと言っても物理的なものじゃないから大丈夫！』

「じゃあ、今ここでお前を殺しても平気だな？」

『い、いや、勘弁して欲しいかなあ〜。』

「遠慮するなつて。」

『いや、ちょ、いきなり<ライジング・トライデント>は無いだろつて連発かよ！しかも切りかかってくんなくて！ちょ、やめ、あああああああああああああああ！』

・
・
・

「説明はちゃんと最初にしようか？」

『は、はい。すいませんでした・・・。』

あの時は<ライジング・トライデント>を連発後、切りかかると生意気にも避けたので、魔法を試すことにした。風に回転を加えたものを、相手の方へ流し撃ち込みまくり、相手を動けなくする。そして、炎の玉を作りその軌道に合わせて撃ち続ける。すると、自動的に相手に当たる様になる。その道を十本ほど作り、色々な弾を撃ち続ける。10万発ぐらい当たったし、相手は間違いなく即死ですね。でも、死なないのだから、それだけで止めてやるほど甘くは無い。微弱な電流を流し、気付かせてやる。恐怖に歪んだ目は此方を真っ直ぐ睨んでいる。それに対し微笑み返して風で作った小型の縫い針に近い針を一本ずつ手足の爪と肉の間に突き刺していく。風魔法なので、自動的に小さく動いたため、自動的拷問魔法になった。次に行こうとしたら、気絶してしまった為、腹部に風の弾丸を撃ち込み、

気が付いたら次の拷問魔法を放つ。これ以上は気分が悪くなる人も出て来てしまっただろうから以下省略で。

と、言うわけで現在に至ります。

「で、このスキルは何時でも発動しているのかな？」

「はい。これは常時作用型のスキルだから、何時でも発動しています。」

「他に言いたい事はある？」

「あ、あの。」

「なに？」

「僕の居る場所である異次元空間を倉庫として使って下さい。」

「お、異次元倉庫か、便利そうだ。」

「はい。特に物が腐ることも風化する事も無いんで便利だと思いますよ。」

「よし。それで許してやろう。」

「ほっ。」

明らかにほっとしたよね。こいつ。

「じゃあ、もう一つ。」

「え？」

「俺の訓練に付き合ってよ。」

「え？」

「いやあ、試してみたい魔法がいっぱい有ってさ。」

「いや、その、勘弁して頂けると。」

「だーめ。」

「ですよね。」

魔法を製作して放つ。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！」

悲鳴が鳴り響いた。

・ ・ ・

「んじゃ、帰るから。」

『はい。さようなら……。』

「何時もと同じで良いのか？」

『まだ二回目なんですけどね、大体はそうですよ。』

「そうか、んじゃあな。」

『ほつ。』

「うん？今ほつとしたな？」

『い、いや、そんな事は……。』

以下省略。

・
・
・

「まったく、眠いのにあんな所で特訓なんてさせてー、怒っちゃうよー。」

装備していないので、天馬は返事をしない。いや、出来ない。

今は、ごうも・・・特訓を終え、部屋に戻って来た所だった。

「さて、寝るか。」

既にルナは寝ていて、早く寝ないと明日が大変だ。

寝るときに邪魔な眼帯を外す。すると、右目に違和感を感じた。

「なに？これ。」

何時もは右目に映るのは、完全な黒だった。それが、白に変わっている。

「特に何でも無いのかな？いや、疲れてるんだろう。」

違和感が残るが、明日の為に寝ることにした。

始まり14 『お買いもの！お買いもの！』

「くあく、よく寝た。」

朝起きてみると、時間はよく分からないが外が明るいという事で、かなりよく寝た気がする。ベットがふわふわな事も、熟睡に繋がったんだろう。

「おねーちゃん？おはよう？」

半疑問形で聞かれても……。

「おはよう。ルナ。よく寝れた？」

「うん。」

「さて、着替えようか。」

「私、服無いよ？」

「え？無いの？」

「うん。」

……困ったなあ。このまま、皇女様の前に出す訳にもいかないしなあ。私の服は大きいし……。

「よし、買いに行こう！」

「……え？」

「女の子はお洒落しなきゃ、駄目だよ。」

そう言って首に付いている奴隷の証である首輪に触れ、魔力を無理やり流し込み破壊した。

「……？えっ！？」

「女の子が首輪なんて駄目！こっちにしないで。」

そう言っつて、鞆の底の方からネックレスを取り出した。

「……ありがとう。」

心なしか、嬉しそうな顔をしている。それだけであげて良かったと思っただ。

「じゃあ、次は服ね！」

そう言っつて自分の服を手早く着るとルナを連れ出す。そして、隣の

部屋のドアを蹴破った。

「ルナの服を買ってくるから、先に皇女様に会ってね。」

「お、おう？」

「じゃ。」

まだ起きて直ぐだったらしく寝ぼけかけていた兄貴を置いてずんずん進む。後ろで兄貴が

「このドアどうすんだよ……。」

とか呟いていたがスルーで行こう。

・
・
・

「うーん、何処がいいかなあ。」

外に出て色々な所を回ること三十分結局服屋と思われる店は五軒ほどあった。

「……何処でもいいよ？」

「そっか、んじゃ、ここにしよう。」

目の前の店。名前は……フルールかな？に入ることにした

・
・
・

「これは如何？」

「……うーん、ちょっと派手すぎないですか？」

「そっかあ、何色が好き？」

「……黒か白？」

「地味ね。」

「……酷いです。」

「まあ、そう拗ねないで。」

今は店内にて服の物色中である。服は、動きやすい服を上下二つと、スカート一つ、ワンピースもどき（以下ワンピース）を二つ買う積もりである。しかし、１時間かけ、殆ど決まったので、後はワンピース

「ス一つと上着を一つである。」

「あ、これは？」

「・・・いいですね。」

眼がキラキラしている。こういう時は女の子だなあと心底思ったのは秘密だ。

「よし、後はワンピースか。」

「・・・わんぴーす？」

「いや、こつちの話。じゃ、行こ。」

「・・・うん。」

・
・
・

「くあ、いい天気だねえ。」

「・・・こんなにノンビリしてて良いの？」

「何で？」

「・・・え？」

「あ、あそこに小物屋発見！行くよ！」

「・・・。」

「あ、おじちゃん、この店のお勧めの小物は？」

「お？穰ちゃん誰かにプレゼントかい？」

「あの子にね。」

「あの黒服の子かい？」

「そだよ。」

「ほれ、黒服の穰ちゃんもおいで！」

「・・・。」

私に擦り寄って来て、隣からルナも頭を出す。目はやっぱりキラキラしている。

「あ、おじちゃん、これ如何？」

「いや、こつちじゃないか？」

「いや、でもこれも良いね。」

「其れならこれなんてどうだ？」

おっちゃんがそう言つて見せてくれたのは白い腕輪だった。I●の白●の待機状態みたいだ。

「お、良いねえ。其れなら私とおそろだ。」

そう言つて袖をまくり手首を見せる。其処には白い腕輪と対の様に真つ黒な腕輪があつた。

「・・・黒い。」

「それだけじゃねえぞ、こりゃあ。」

「そりゃそうですよ。」

「穢ちゃん何なんだ？それは？」

「教えないです。でも、その腕輪は貰つた！」

「毎度あり！又来いよ！」

「うん！」

そう言つて、お店を出て、又歩き出す。

・
・
・

「お腹すかない？」

「・・・それよりいいの？」

「何が？」

「お城。」

「あ、忘れてた。」

「・・・。」

いやあ、真面目に忘れてた。
ズドン！

「な、何？」

「・・・あつち？」

「ルナ、ここに居て。」

「・・・おねえちゃんは何するの？」

「見てくるだけ。大丈夫よ。」

そうして自分に風の浮遊魔法を掛ける。そして、飛び上がるとすぐ、音の正体が分かった。

「何よあれ……。」

真つ黒な体をした人型の何かが暴れている。あれは絶対人じゃあない。でか過ぎる。3 m以上はあるかな、見たただけだ。しかも体自体が真つ黒で、鎧を着てる訳じゃあない。どっちかと言うと鱗の様な物が光を反射してキラキラ光っている。頭で目立つのは赤い眼球。それ以外は全く何も無い。鼻も、口も、眉毛も、髪の毛も無い。なのに人型をしている。薄気味悪いやつだ。

「急いで戻った方がいいね。」

そうして着地すると、ルナを抱きかかえた。

「ルナ！捕まってるね。」

「え？」

問答無用で飛び上がる。お城に向かって飛んで行く。

始まり15 『デイフォート・アヴァロン?』

お城の正面の空中に到着。窓から乗り出してあっちを見ている人が多い部屋を選び、風を纏って突進。

「うぎゃあ!」

「な、何!」

「いつてえ」

などの声がしたが無視。

「瑠奈!」

「お兄ちゃん!」

「何が起きている?」

ラッキーな事に、ここで話をしていたようだ。って事は。

「あの人が王妃様?」

「あ、ああ、そうだが。」

「初にお目にかかります。私が今回の勇者、神埼瑠奈で御座います。どうぞ以後お見知り置きを。」

「硬い挨拶などは後でいい。今は現状の把握などの方が大切であろう?」

フツ、この人はもしかしたらこの国で一番気を付けなければならぬ人かもしれないな。

「はい、では、現状を報告します。」

黒い化け物について話して行く内に殆どの人の顔が青ざめていった。

・
・
・

「というわけで、早くしないと町の被害は拡がる一方だと思われるます。」

「皆さん?大丈夫ですか?」

何かやばそうだなあ。とか思っていたら、王妃様の隣にいるお爺ち

やんが話し出した。

「それは、SS級に指定されている魔族、デIFOート・アヴァロ
ンです。強大すぎる力とその敵味方関係なく攻撃する様な奴です
から魔族の幹部には成れませんが、力だけで言ったら幹部以上です。」
「質問いいですか？」

解らぬ時は質問するべきだね。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の
恥なんて言うもんね。

「どうぞ？」

「SS級って何ですか？」

「ああ、そうですね、説明しなきゃですね。冒険者ギルドは分
かりますか？」

「まあ、一応は。」

「其処で定められた強さの基準です。F、E、D、C、B、A、S、
SSと八段階に分かれています。SSランクの冒険者は世界で3人
しかいないそうです。まあ、SSの上のSS+とかSSSが有るな
んて噂もありますけどね。」

「なるほど、つまりあれは普通の人間じゃ倒せないと言う訳だな。」

「そう言う事になります。」

「私が行きます。」

「「え？」」

私とお兄ちゃんの声が重なる。

「あの怪物は町を壊し、人を殺しています。私が行かなければさら
に人が死にます。私は、人が死んで行くのを黙って見ていられるほ
ど強くありません。人を見捨てて生き残ってしまったら私は、死ん
だも同然です。手の届く所に有る命すら救えない、そんなの耐えら
れない。だから私は行きます。」

髪をクシャクシャと適当に掻いてみる。ああ、熱血で正義感を持っ
てる人だね相変わらず。あの時もそうだった。でもね、それはね・
・。

「本当に行くのか？」

「何を言われようと行きます。」

私の仕事だ。

「いや、駄目だよ。私が行く。」

「？」

「それは勇者として召喚された私の仕事だろう？」

「え？でも・・・。」

「賢者である貴方が死んだらどうやってこの国を支えて行くの？」

「いや、それは。」

「何を言っても無駄だよ。私が行くって言ったんだ。譲らないよ。」

「相変わらず頑固ね、貴方は。」

「そうかもしれない。」

「そうだね、私は、頑固で、我俣で、駄目な子だ。だからこそ、自分で出来ることが有るなら・・・。」

「お兄ちゃん。」

「なんだ？」

「この国の城には勇者専用の武器があるよね？」

「ああ、あるよ。」

「王妃様。」

「何だ？」

「その勇者の武器、貸していただけないでしょうか？」

「よい、それは元々勇者の為に創られた物じゃ。もって行くがよい。」

「

「有難う御座います。」

「んじゃ、ちよつと待ってろ。」

「分かった。」

ん？何か袖を引っ張られてる感じがする？

「お姉ちゃん。」

ああ、ルナか。

「なに？ルナ？」

「・・・行っちゃうの？」

「うん、行ってくるね。」

「・・・信じてる。」

「任せておきなさい。」

そして天馬を装備する。

「瑠奈、ほれっ。」

投げられた二振りの剣を空中で抜き放つ。

「オツケー。行ってきます。」

加速魔法と、特殊な魔法を自分に掛け、静かに浮かび上がり、空を蹴った。

空を蹴ると言うのは奇妙な感覚で、ゼリーを踏んだような感じた。

先ほどの標的に近づく。

先ほどは気付か無かったがその黒い奴は黒い剣を持っていた。しかも、剣は2mは優に超している。そして、その剣を振りかぶった瞬間、其処に向けておもしろき剣を振って生み出した衝撃波をぶつけた。すると、少し周囲が暗くなった気がするのは気のせいだろう。どちらにせよ、こっちに気が向いたようだ。有り難いことである。さて、これから如何するかなあ。

始まり16 『あなたはだあれだ？これはなあんだ？』（前書き）

中途半端なきり方になってしまいましたたがご勘弁ください・・・。

始まり16 『あなたはだあれだ？これはなあんだ？』

とりあえず、話しかけてみる事にした。

「元気ですか？」

『オ・・・マエハ・・ダレ・・ダ？』

おおー、喋れるんだ。これはありがたい事で。

「私？私はねえ、一介の冒険者だよ？」

『ウ・・ソラツク・・ナ・・ソノケン・・エクス・・カリ・・バ
ート・・・ブラス・・ター・・ブレード・・。ソレハ・・
ワガ・・ブキ・・・デュラ・・・ンダル・・ノキヨウダイ・・ノ
ヨウナ・・モノ・・・デアロウ？』

「へえ、そんな武器だったんだ、これ。」

『シラ・・ズニツ・・カツテ・・・イタノ・・力？』

「知っているも何も、さつき貰ったばかりだしねえ。」

『ソウ・・力・・シカシ・・・テカ・・ゲン・・・ハシナイゾ。』

『

「お好きにどうぞ。」

そういった途端、俺の首筋には黒い剣が当たっていた。

『コ・・ノテ・・イドモ・・ヨケ・・・ラレヌノ・・・力。』

「如何思う？」

其処には既に私は居ない。あれは残像だ。

『ス・・コシハ・・・タノ・・・シメソ・・・ウダ。』

「それは良かったね。じゃあ、次行こうか！」

先ほどと同じ動作をし衝撃波をぶつけ、左手のブラスターブレードで次来るであろう斬撃に備える。

案の定来た黒い斬撃をブラスターブレードで止める。

「いってえ。」

右手に持っていたエクスカリバーを使った斬撃攻撃は相手に殆どダメージを与えることは出来なかったようだ。

「なら・・・。天馬、アレやるから、出して。」

『え？アレやるの？』

「早くしなさい。」

『分かった。』

出したのは特殊な刻印を施した剣だ。この前のごうも・・・特訓の後天馬がくれた物の一つだ。

「神雷武装<ライジングボルト>」

この剣には、長ったらしい詠唱を無視して、無詠唱で、単語を唱えれば発動するようになっていいる魔法が封じられている。そして今、それを発動した。この神雷武装<ライジングボルト>は両手両足に雷で出来たリングが3つ現れる。このリングは補助、攻撃、防御、と何でも使える便利な魔法である。ちなみに、これのマックスパワー（リングを4分の1使用）では、村一つを普通に消し飛ばすことが可能なレベルだ。

「うおおりやあー!」

右手で全力の一撃を相手に叩き込む。

しかし、その一撃は易々とは行かなくても避けられてしまった。しかしそれも予想済み。右手を左斜めに振り下ろした瞬間左足の電撃を使い跳ね上がると、回転した。それを使つて、両足の全力を6発づつ使用する。そしてまた足を使い、相手に向かって急加速し、腕を使い雷を腕に纏うと、連続で殴り続ける。此方の方が電撃の使用量も少なく、簡単に避けられる心配が無いためこつちにしたが失敗かもしれない。反撃も半端無いから体中傷だらけになってしまった。服はボロボロ、眼帯も飛んでしまった。しかも先に力尽きるのはこつちだ。それを避けるために一回足を使用し離れる。

「強いねえ。流石Sランクと言った所か。」

『ソ・・・ンナ・・・アサ・・・デシカ・・・オツ・・・テイ・・・ナ・・・イ・・・ウエ・・・ニチカ・・・ラノ・・・シ・・・ヨ・・・ウ・・・リヨウ・・・モソ・・・コマデ・・・イッテ・・・イナ・・・イヤツ・・・ニイワ・・・レタク・・・ハナイ。』

両手両足のリングはあと一つづつと言った所か……。さて如何したもんかねえ。

ズキッ

「いつて！」

「……？」

右目の辺りが今一瞬だけ痛かった……。

何でも無いのか？気のせいか？いや、違う。右目に色が戻っている？景色が形を持たずに色だけで見える……。いや、形ができ始めている。これは、何故だ？見えると言うことか？落ち着こう、まず何が起きている？状況の整理をしよう

・今は戦闘中。

・神雷武装<ライジングボルト>を使用中。リングは両手両足後一つづつ。

・私の今の敵は真っ黒な体をした人型の何か。でもあれは絶対人じゃあない。でか過ぎる。3m以上はあるかな、目測だけど。しかも体自体が真っ黒で、鎧を着てる訳じゃあない。どっちかと言うと鱗の様な物が光を反射してキラキラ光っている。頭で目立つのは赤い眼球。それ以外は全く何も無い。鼻も、口も、眉毛も、髪の毛も無い。なのに人型をしている薄気味悪いやつだ。

・なぜか右目が見えるようになっている。しかもなにこのゲーム画面みたいなの？え、しかも集中してみれば基本見たものに関する情報が見えんだけど……。説明書いらすのゲームねオツケーオツケ

……。なわけあるかあ！何じゃこりゃあ！

まあ、わざわざ今発動したからには役に立つんだろうね？

そう思い、両手の剣を眺めてみる。

エクスカリバー

Lv:0

攻撃力：A（3100）

防御力：E（200）

魔力：G（0）

速度：G（-200）

耐久：B（1000）×∞

特性：耐久力×∞、使用者コード01、Verエクスカリバー

ブラスタースタブレード

Lv：0

攻撃力：A（2800）

防御力：E（400）

魔力：G（0）

速度：G（-100）

耐久：B（1000）×∞

特性：耐久力×∞、使用者コード02、Verブラスタースタブレード

「使用者コード？」

・・・使用者コード

宝具の中でも一部にだけ付けられているコード。入力するとその宝具の真の姿を見る事ができる。

「・・・この目は攻略サイトの情報が相手にカーソルを合わせると出てくるネットゲですかね？そんなの見たことねえよ。」

『サツ・・・キ・・・カラ・・・ナニ・・・ヲ・・・ゴチャ・・・ゴチャ・・・イツ・・・テ・・・イ・・・ル？』

「何でもないよ。ああ！もう！やってやる！」

始まり16 『あなたはだあれ？これはなあんだ？』 (後書き)

7月17日サブタイトルの書き忘れを修正・・・。

始まり17 『勝った・・ぜ』

「使用者コード01起動。02起動。」

『使用者コード01、エクスカリバー、使用者コード02、ブラスタースタールードを認識シマシタ。パスワードヲ入力シテ下サイ。』

「パスワード？」

・・パスワード

使用者コードと・・・・・に、つけられているロックを解除するためのもの。使用者コードの場合は『ドラゴンテイル』・・・・・に一つづつ別なパスワードが付いている。

「・・・何だ？この黒いの？まあいいや、やってやる！パスワード
『ドラゴンテイル』。」

『パスワードヲ認識、発動シマス。』

機械の音声のような声の後、右手のエクスカリバーは剣の刀身自体が光り輝く金色の光となった。左手のブラスタースタールードは剣の刀身はそのままだが、光り輝く銀色の光を纏い、大きな剣と化した。

「いくよ！」

『イ・・・ツデ・・モ・・カカツ・・・テ・・コ・・・イ。』

右手のエクスカリバーの光を長い太刀の形に変える。左手のブラスタースタールードは、先ほどの大きな大剣の形を少し凝縮し、先ほどまでしっかりと定まっていなかった形を、しっかりとした大剣に変えた。

そして、再びエクスカリバーとブラスタースタールードを右眼で見ている。

エクスカリバー（使用者コード使用時）

Lv：0

攻撃力：S（5200）

防御力：E（500）

魔力：G(0)

速度：E(500)

耐久：B(1000) × ∞

特性：耐久力 × ∞、使用者コード01、Verエクスカリバー、金の光剣、アンデッドキラー、光剣融合、速度上昇

ブラスターブレード(使用者コード使用時)

Lv：0

攻撃力：S(4900)

防御力：C(800)

魔力：G(0)

速度：C(700)

耐久：B(1000) × ∞

特性：耐久力 × ∞、使用者コード02、Verブラスターブレード、銀の光剣、バンパイアキラー、光剣融合、速度上昇

「何だこれ、スピードか？この速度つてのは、重さの分大体マイナスだと思うんだけど・・・。」

速度上昇って奴のせいか。それになんだこの光剣融合つて。」

・・・光剣融合

特性に光剣、と付いた物がある場合、二つ以上の力を合わせて一つにすることが出来る。

「へえ、まあいいや。まず行くよ!」

そう言つて振つてみると、とんでもないスピードが出た。(ちなみに一秒で10回ほど剣を振ることが出来た)

『ナ・ン・ダ・コノ・ス・ピー・ドハ?』

「ハッハッハ、教えると思います?」

『イ・ヤ、イ・イ。ソウ・デ・ナ・イ・トオ・』

・モシロ・・・ク・・・ナイ・・・カラ・・・ナ。』
「全部防いだくせに。」

そう呟きながらさらにスピードを上げる。

今度は防がれなかったのも有るようだ。

「よし、次で終わりにしちゃおう。」

『イ・・・イ・・・ダ・・・ロ・・・ウ。コ・・・イ。』

今度はエクスカリバーだけでなくプラスターブレードも使うことにした。

「光剣融合つてのをやってみようかな。」

そう言うと、プラスターブレードとエクスカリバーが、混ざり合うようにして、融合した。

「名前のまんまだね。」

金と銀の光を纏い、プラスターブレードの刀身を持ち、柄の部分はエクスカリバーの剣を見ながら呟き、右目で見てみる。

エクスカリバー＆プラスターブレード（使用者コード使用＋光剣融合使用時）

Lv：0

攻撃力：S（8900）

防御力：B（1000）

魔力：G（0）

速度：B（1000）

耐久：B（1000）×∞

特性：耐久力×∞、使用者コード01、Verエクスカリバー、使用者コード02、Verプラスターブレード、銀の光剣、金の光剣、アンデッドキラー、バンパイアキラー、光剣融合、速度上昇

「ここまで来ると最早チートにしか見えないよ。」

そう呟いていたら黒い剣が襲い掛かってきたので避けながら、時々一つになった剣ではじき、受け流し、隙を窺う。

すると、段々剣の速度が遅くなってきたので、懷に飛び込む。

「バイバイ。」
「」

そう言って剣を全力で振りまくる。

相手はミンチになりましたー！

「私の勝ちだよ。」

[illegible]

!!!!

お祭りレベルの五月蠅い歓声が上がる。さて、帰りますか。

始まり18 『ぶっ飛ばしてやる!!』

「くく あぶないっ!」「く」

ハッとなつて後ろを振り返る。見えたのはこちらに向かつてくる黒い剣と、それを持っているのはさっきの黒い奴の腕だけだと言うこと。

頭の中では出来る限りの防御系の魔法を思い浮べて見るが、唱え終わるまでに俺の体はミンチになってしまうだろう。

そこまで考えて、自分の中で割り切り、この剣でできるだけ衝撃を受けて、後ろに吹っ飛ばされることにした。

しかし、実際そうはならなかった。

兄貴が金色の装備をつけて、腕だけの敵に突っ込んだからだ。

「兄貴!?!」

「速く体勢を立て直せ!そのまんまじゃやられるぞ!」

「分かった。」

すばやく体勢を立て直し、空中でどんな事に対しても対応できる体勢をとった。

「兄貴!下がって!」

「ガハッ!」

遅かったか。

兄貴は黒い剣の攻撃をもろに受けて、城壁を越えて森の中へと吹っ飛んで木々をかなり薙ぎ倒していった。

黒い腕の周りに真っ黒な肉片が徐々に集まり、体になっていく。

『ザ・ン・ン・ネ・ン・ン・ダッ・タ・ン・ナ。コ・ン・ノ

テ・ン・イド・ン・デ・ン・ワタ・ン・シ・ン・ガヤ・ン・ラ・ン・レル・

・トデ・ン・モ・ン・オモツ・ン・テイ・ン・タ・ン・力?』

「……ゆるさない……。」

『……?』

「お前は絶対許さない!!!」

『!!!』

・
・
・

「この殺気……。」

「どうかしたか？桃香よ？」

「ええ。嫌な感じがするんです。」

「嫌な感じだと？」

「はい。ソウく……王が心配だからと言って飛び出して数分後、多分もう着いていてもおかしくないでしょう。そんな時にいきなり叩きつけるようなこの殺気です。心配としか言いようがありません。しかも見てください。」

「如何した？」

「あそこ、黒く見えませんか？」

「あの場所は、先ほどまで勇者が居たところではないのか？」

「はい。多分ですがアレは私が預けた兵器の一つです。」

「兵器だと？」

「はい。しかも一番性質が悪く、一度使えば数十秒で国一つが滅ぶようなものです。」

「……。」

「しかし、アレを使つたとなると、使用者が心配ですね。」

「それほどなのか？」

「ええ。無事だといいいんですけど……。」

・
・
・

右手首に有る黒い腕輪に手を当てる。

「おいで……。」

そう言つてI●もどきを呼び出す。

これを作つたのは、桃香先輩で、I●の様にシールドエネルギーな

どは無く、防御は薄っぺらいし、容量があつて、それで武器を使えるわけでもない。装備の一部として組み込まれているだけだ。それでも自立型の防御用のビットが搭載されていたり、空間圧縮型のハンドガンがあったり、電磁砲があったり、自動追尾形のミサイルが搭載されていたりする。それ以外にも色々武器が搭載されている。しかしあの人はこれを一人で、しかも自力で全てを設計、製作したという人じゃないレベルのことをやってのけていた。

頭で言えばこんだけ異常な幼馴染、身体能力で言えば異常な兄を持つていれば、大抵諦めは早くなる。まあ、私がやってきた事にごちやごちやとした雑念を持ち込めばやられる。なーんてこともあるけど、まあ、魔法が使えるゲームの世界に來ちゃいましたー、って言われても別にそこまで驚かない（それよりナトリウムを池に放り込んだときのほうがびっくりした）のはこのせいだ。

ま、それは置いておこう。今重要なのは其処ではない。

こいつには型がいくつかある。今使おうとしているのは、一対多に特化した銃の型だ。

「行くよ。」

敵をロックオンすると、両腕の自動追尾形のミサイルを発射する。撃ち終わると、両肩にある電磁砲を発射。そして両足に有る空間圧縮型のハンドガンを一丁を一組、三組使用する。それは、一組づつで、撃ったら投げて戻す、撃ったら投げて戻す。そして戻ると自動的にチャージされるため、次出てきたときにはもう撃てる様になっている。そして仕上げに同じく足にあるレーザー銃で跡形も無く焼き尽くす。

「ふう。」

これを終え、ふとさっきの奴が居た場所を見ると、黒い剣が落ちていた。

「あれだけ撃ち込んだのに壊れなかったのか・・・。」

折角なので拾って、兄貴のところへ向かう。

・ ・ ・

兄貴は数キロ先でぶっ倒れていた。

城壁を越え森に突っ込んだため、木々を数本押し折り血だらけになって倒れていたが、まだ死んではないようだ。流石丈夫だね、としか言いようが無い。

「にーちゃん。聞こえる？」

「・・・な・・・ん・・・だ？」

「意識はあるね。よし、これから治癒魔法をかけるけど、注意事項が二つ、まず一つは喋らないこと、二つ目は意識を保つこと。」

「わ・・・かつ・・・ゴフツ。」

あ、血を吐いた。

「喋るなつて言っただしょ！」

「ゴフツ！」

あ、思わず頭に打撃を食らわしてしまった・・・。

「んじゃ、行くよ。」

「（こく）」

首を縦に振ったから良いってことかな？よし、やるか。

「『われが唱えしは、祝福の賛歌。人の身を癒し、ひと時の安らぎを与える音色。この音を聞きし者は、傷を忘れ、安らかな眠りにつく。さあ、その耳で、いや全身で聴け、我が響かせし、祝福の賛歌を。』」

きれいで澄んだ音が響き渡る。それに合わせて私の口は勝手に開き歌い始めた。その声と音色は絡まり、離れ、3つにも4つにもなり、再び絡み合い、兄ちゃんの中に入っていく。それは内側から兄ちゃんをの傷を癒し、眠らせた。

「さて行くか。」

機体を装備したまま、黒い剣と兄ちゃんを担ぐ。

「はあ、これを使っただけでばれてるよなあ。」

最近溜め息が増えてきた気がする。

「はあ。」

本日何回目か分からない溜め息をついた。

始まり18 『ぶっ飛ばしてやる!!』 (後書き)

やっと終わった・・・。

疲れました…。

変な所があつたら何でも言つて下さるとありがたいです。

始まり19 『耳にタコができちゃっよ。』 (前書き)

忘れていた…。

昨日で予約が切れていました。

とりあえず今日中にもう1話うpしたいと思います。

始まり19 『耳にタコができちゃうよ。』

あれから4日が経ち、俺は何とか歩いて良いと言う許可を貰った。あの日は帰って兄ちゃんを降ろし、装備をはずすとその場に倒れこんでしまった。

これはあの機体を使った代償だ。

あれは、自分の運動エネルギーを使用する事によって動いている。と言うより自分の体が動くと言う行動を機体のエネルギーに利用し、そのエネルギーによって動いている。つまり生身でとんでもないスピードを出したり、銃撃や剣の衝撃、銃の反動を殺したりするようなものだ。その力は自分の体全体（あの機体を展開している範囲だけ）に向かうため、使用後は大体筋肉痛になる。

そのため、体を動かすことが出来なくなり掛けたので、全身の機体をシステムだけ起動させ体を支えて部屋に戻った。

そのときに道に迷ったせいで1日筋肉痛が伸びた気がするが気にしない。

まあ、あれ以降何があったか聞いてくれ、いや、聞いて下さいお願いします・・・。

誰にお願いしているんだろう？

自分の考えに首を傾げながらも回想を始める。

・
・
・

1日目

昨日は何とか体を支えて部屋まで行き、部屋についていたお風呂みたいなのを使って体を流し、そのままベッドに行って寝てしまった。起きてみると、体が上がらない・・・いや動かない。

動くには動くが、動こうとすると全身に激痛が走る。これじゃあ寝

返りも出来ないんだが……。そんな事を考えていたら、いきなりドアが開き、桃香先輩が入ってきた。

「ライ君。用件は分かっているわね？」

分かっています。分かっていますけど勘弁してください……。出来れば。

「それより、兄ちゃんはどうになりました？」

昨日から呼び方がお兄ちゃんから兄ちゃんに俺の中で変わったようだ。

「大丈夫。今は眠っているけどおそらく大丈夫よ。」

ホッとした。傷は塞がっていたけど、完全に治っているかも分からないから結構心配したんだ。

「それより、私はライ君に用があって来たんだけど？」

「そ、そうなんですか。」

「ライ君、あれ使ったわね？」

「……使いました。」

「危険な代物だから私に許可をとってからにしてって言うておいたわよね？」

「はい、言われました。」

「あれに伴う危険性も説明したよね？」

「されました。」

「……なんで勝手に使ったのかな？」

「……いや、あの、あれしか手が無いと思ったっていうか、きれ思わずあれを使ってしまったっていうか……。ごめんなさい。」

「つまりプツンしちゃったライ君が衝動的に使っちゃったと言う訳ね。」

「……はい。」

「あれは危険だから絶対使うなとは言わないけど、せめて私に相談して使えって行ったわよね？」

「いや、でも、あそこから相談しに行ったら町は大変なことになっちゃうっていうか……。」

「言い訳しない！」

「はいっ！」

「もう一度言うわ。あれは長時間かけて使用する運動量を一気に放出してるんだから人体への負担はとんでもないわ。今の貴方は酷い筋肉痛の状態で済んでいるけど下手したら細胞が壊れて、筋を切つてとか、一番最悪の場合腕や足が千切れるわよ。それでも貴方はこれを使うの？」

「・・・。」

「分かってくればいいわ。」

沈黙を肯定と受け取ったのか話を進めようとするので横槍を入れてみる。

「いざとなったらまた俺はこれを使うと思う。」

「!？」

「この世界には魔法やもつと不思議な物がある。それに対応し切れれば良いけどこの世界の物だけじゃ埒が明かなくなることも有るかもしれない。そんな時、これを使えなくて何も出来なかったなんて言ったら帰った時、親父に怒られちまうよ。」

「・・・はあ。」

「ため息をつかれても困るんだけど。」

「もう良いわ好きにしなさい。」

怒ってるように見えるけど、これは絶対に笑ってるな。

こういう熱血がこの人の好みだからな。嬉しくてしょうがないんだろっ。

これで1日目が終わってくれば良かったのに・・・。

始まり20 『ありがとう・・・。』 (前書き)

何とか間に合った…。
明日からも頑張ります。

始まり20 「ありがとう……。」

すねた振りをして出て行った桃香先輩を見送って眠りに落ちようとしていた所に災厄は現れた。

「瑠奈。」

「げっ、出た。」

「出たとは何だ出たとは。」

「動いちゃいけないんじゃないんですか？」

「暇だったから抜け出してきた！」

親指を立ててそう自慢げに言う目の前の災厄をどうやって追い出そうかと画策している所に災厄はとんでもない事を始めた。

「そういえば全身が筋肉痛で動かないんだって？」

「そうですか何か？」

「いやあ、なんでも無いよ。」

この目の前のニヤニヤしている災厄（馬鹿）をどうやってぶつ飛ばしてやるうかと再び画策し始めると、いきなり指をわさわさと動かし始めた。

「ふっふっふ。日頃の恨み、ここで晴らす！」

あの動き、あれは……！

[illegible]

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

そう、俗に言うこちよこちよ。擦りだ。

ただでさえ筋肉痛の所に触れられて、さらにくすぐりたいから身をよじると激痛が走る。

これは拷問か何かなのか？

物を考えられたのはそこまでだった。

「ちよっ！やめっ！あはは！イテエッ！ぎゃあ！だめだっ！それ以上はっ！」

「はっはっは！どーだ！これで分かったか！俺が日頃溜めに溜まったストレスがな！だがこれでは止めてやらんぞ！まだまだ色々持ってきているからな。」

そいつって肩にかけていたバッグから取り出したのは全自動こちよこちよ機……。

「そんなくだらねえ物なんで持ってたんだ！？」

「ここに来る前買ったばかりで学校で使ったばかりだったからだか？」

「あなたはそれでも元生徒会長ですか？」

「そうですか？」

さつきから「だから何？」とでも言いたそうな顔しやがって……。あー、もうあつたまきた……。

「『時間は止まり世界は我の下に動く。神と我を繋ぎし門が開かれ、我は神と同じ力を得る。神は時間を操り、空間を操り、この世界の全てを操る。神は我にその世界の所有権の一部を渡し、世界を変えることを許す。開け、神の扉よ。』」

「ら、雷斗君？それは上位魔法のさらに上に位置するレベルの魔法の、<神降ろし>では？」

「大丈夫、その中でも一番下の魔法だから、これは。」

「そ、そういう問題ではなくてですね……。」
手を伸ばして掴んで来ようとする。

『ソラ、エルカイル<その手をどけろ>』

これは一部の範囲に神が使っているのと同じ言葉をかけ、その現象を改変する事が出来るようになる物だ。

兄ちゃんの手はおかしな方向に曲がっている。

「痛い痛い痛い！！ちょ、勘弁して！」

「クスクスクス『ソラ、ヘルソラ、アガンダ<その手で別の手を掴め>』」

「えっ？」

『アリグランドヘルビル<気絶が出来ぬ程度の痛みをこの者に>』

「つぐあああああつあああああああつあああああ
！！！！！！！！」

•

•

•

「もうこんな事はしないと約束します？」

「はい、すいませんでした・・・。」

あの後にはしばらく放つて置いたため、とんでもない痛みが走ったことだろう。

「じゃ、私は寝ます。さっさと出て行ってください。」

「ああ。」

兄ちゃんが背を向けた。

「ありがとう……。」

その背に向かって放った言葉は聞こえたのだろうか？

いや、それはどちらでもいい事だ。

それよりも言ったという事が大切なんだから。

こうして、一日目は終わった

閑話 1 『過去の記憶1』（前書き）

主人公の過去を明かしていくためにときどき入れたいと思います。
アイデアが無くなるとこれに逃げるかもしれないですw

閑話1 『過去の記憶1』

「みんな、みんな大っ嫌いだ！」

教室の窓ガラスは割れ、それによつて切り傷を作った子、それ以外にも、打撲の痕がある子など、騒いでいる奴以外は、全員が怪我をしている様だった。

「なにしてるの！雷斗君！」

ああ、あれはあの時の俺か……。という事はこれは夢か……。

「お母さんは僕たちを捨てたんじゃない！旅に出たんだ！お母さんは帰ってきて、僕たちにいっぱいお話をしてくれるんだ！」
そう、母さんが消えてすぐの頃だった。

あの時から目に傷は有り、常に眼帯をつけていて、「カツコいい！」って言うてくる奴もいれば、「あれ怖い……。」って言うてくる奴もいた。

しかし、この事件の後、前者は減り、圧倒的に後者が増えた。

「雷斗君！みんなに謝りなさい！」

「お母さんを馬鹿にした奴なんか！謝るもんか！絶対に許さないもん！」

「君たち、雷斗君のお母さんの事を馬鹿にしたの？」

「……グスツ。だつて……お母さんも……お父さんも言つてた……。雷斗君のお母さんは……。雷斗君を捨てて……。どこかに逃げた最低で卑怯な人間だつて。」

「違つて言つてるだろ！お母さんは逃げたんじゃない！旅に出たんだ！そうお手紙にもあつたし、お父さんもそう言つてるもん！お前たちが馬鹿にしているような人間じゃないんだ！お母さんは、面白くて……。立派で……。格好良くて……。最高のお母さんなんだ！それを馬鹿にするお前たちなんか、大っ嫌いだ！」

ざわざわ

他のクラスの奴らも教室を覗き込んでびっくりしている。

それはそうだ、窓ガラスが全部割れていてみんな傷だらけで殆どの奴が泣いている状況なんて見たら子供だけでなく、大人でもびっくりしてしまうような光景だ。

しかし、その中に驚かずこっちに向かってくる2人の男女がいる。

一人は長い黒髪をそのままにした柔らかい雰囲気を持った美のつくような少女、もう一人は今のままでも十分美男子のツンツンの短い黒い髪の毛の少年。

二人ともこの時の俺より年上の様だ。しかし・・・あれは。

バシッ！！

「雷斗！！いい加減にしろ！」

「兄貴！桃香さん・・・。」

あの、頬を引つ叩いた少年は・・・兄さんか・・・。そして、もう一人は桃香さんだろう・・・。

「貴方がしなきゃならない事は友達を傷つける事なの？違うよね？あなたのお母さんはなんて言ったの？」

「『力は人を傷つけるためにあるんじゃない。守るためにあるの。あなたならそれができる。できるんだから、やるわよね？』」

「そう。貴方には守る事のできる力があるのよ？それをなぜ人を傷つけるために使うの？」

「だけど、アイツらはお母さんを馬鹿にした！そんなやつらをどうやって守れって言うんだよ！」

「お前は何時からそうなった？お前は出来る出来ないで全てを決めるのか？出来ないからやらない、出来るからやる？ふざけんな！どっちにしようとかやらないかや分かるわけねえだろうが！」

ふむ、さすが子供のころのあの人だ言っている事の訳が分からない。「兄貴。言ってる事の訳が分からないんだが。」

「・・・。」

「兎に角、雷斗君、お母さんの言いつけを破る気なの？」

相変わらず変な人なのに冷静だな、あの人は・・・。

「でも・・・。」

「まず皆に謝る。はいつ。」

「ご、ごめんなさい。」

「じゃあ、皆と仲良くするのよ。」

「はいつ。」

・・・。

微笑ましいとも言えるが正直シュールな光景だ・・・。
しかし、こんな夢を見るとはな・・・。

始まり21 『俺？私？うーん・・・俺！』（前書き）

明日一日だけ休みたいと思います。

その代り明後日2話分投稿する予定です。

始まり21 『俺？私？うーん・・・俺！』

2日目

「・・・お姉ちゃん？」

私、いや、俺？うーん頭の中で俺って言ってるとなんかの拍子で俺って言っちゃいそうなんだよなあ・・・でも、うん。頭の中では俺で行こう。

俺のその時の目覚めはこの一言だった。

「・・・ルナ？」

「・・・ぐすつ。」

・・・鼻をすする音を聞いたのは俺だけなんだろうか？

「ル、ルナ？如何したの？」

「・・・心配・・・したんだよ？いきなり出て行って、帰ってきたと思ったらいきなり倒れて・・・無茶したんでしょ？」

「い、いや、無茶って言うかなんて言うか・・・。ごめんね、心配かけちゃって。」

「・・・うわああああああああああん！」

泣き出しちゃった。

「大丈夫、もう無茶したりしないから。ね？」

そう言って、何とか動くようになった右手をルナの頭に乘せた。

「・・・おねえちゃん。」

いきなりルナは飛びついてきた。

「いたつ・・・大丈夫、私が守るから。こんな風にならずに、きちん。」

「・・・約束だよ？」

「約束もきちんと守るよ。」

ふつと何かの糸が切れたかのようにルナは俺の上に倒れてきた。

「ははっ、ちよつとイテエな。」

そう呟き、ルナの頭を撫でながら窓越しに空を見上げた。

「今日は暑くなりそうだ・・・。」

・
・
・

コンコン

「どうぞ。」

「ルナちゃんは・・・やっぱりここでしたか。」

入ってきたのは案の定奈菜さんだった。態々ノックしてから入ってくるなんてこの人だけだろう。

そう思っていたのは雷斗だけで、メイドさん全般がそうなのだ、と数ヵ月後知ることになるが、それはまた別のお話に・・・。

「如何したんですか？」

「ルナちゃんが起きるなり、とてつもない速さで出て行ったものですから探していたんですよ。」

「ああ、そうだったんですか。」

そんなに心配してくれていたんだな、この子は。

「それにしても、今回は無茶をしましたね・・・。」

「ここに来た人全員に言ってますが、それに関してはすまないと思っっていますよ。」

「二度とこんな事しないで下さいね。周りが心配します。」

「分かりました。」

「この子なんて最初ソワソワしているだけだったけど、しばらくしたら、私も行ってくる。なんて言い出すものだったから止めるのに苦労したんですよ。」

これには驚いた。この子の行動力を見誤っていたようだ。

「この子ってそこまで行動力が有ったんですね。」

「ええ。行くて言ったときは、周りが驚きまくっていました。」

「ほんとに心配かけちゃったみたい・・・。」

「ま、反省だけしていただければ此方としてはいいのですが・・・。
あ、あとは少し自重して頂けると此方としてはありがたいですが・・・。」

「・・・善処します。」

「じゃ、ルナちゃんを連れて行きますね。」

「お願いします。」

そう言つて奈菜さんはルナちゃんを静かに抱き上げ出て行こうとした。しかしドアの前で少し立ち止まった。

「・・・心配したんですよ、私も。」

「？奈菜さん、何か言いました？」

「いえ、何でもありません。ゆっくりお休み下さい。」

今度こそ奈菜さんは何もせずに出て行った。

「・・・なんだったんだろう？」

こうして2日目も過ぎていった・・・。

始まり21 『俺？私？うーん・・・俺！』（後書き）

恋愛要素は今の所微妙です。

メイドさんと幼馴染とお姫様とちっこいの以外は出て無いので当り前ですね。

そのうちあるかもしれません・・・？

始まり22 『魔法学ってやつかな?』 (前書き)

今日中に二話投稿する!

とか言ってたのですが無理なことに気が付きました。

どうなるか分からないので、

何時とは言えませんがいつか二話投稿すると思います。

始まり22 『魔法学ってやつかな?』

3日目

どうにか指先も動かせる様になってきたので、この世界に関する資料を集めてもらった。

集めてもらってから文字が読めるかどうか心配になったが、特に問題なく読めた。

しかし、日本語のほうは如何なのかと思い、自分が持っていた本を取り出し読んでみると、此方は此方で読めた。しかし、二つの文字が同じという事でもなく、違う文字だという事は、見比べて分かったことだ。

まあ、兎に角読めるようなので、桃香先輩が魔法学校から借りてきた魔法に関する書類や本と、奈菜さんが持ってきてくれたこの世界の歴史に関する書類を読んでみる事にした。

この本と書類の題名は、魔法に関する基礎知識講座と、バルゴリア大陸の歴史かあ。

まず、魔法を覚えるにあたって重要なことがある。

一つ、魔法はこの世の理を無視し、捻じ曲げている物であり、決して軽々しく使っていい物ではない。

二つ、魔法とは人々が繁栄し、豊かになりたい、という気持ちから生まれた物であって、人を殺すなど使うことは、必要最小限にすべきである。

この記述を見て気が付くことがあった。

この記述には人を殺す行為をするときに、絶対使うなどと言っている訳では無い。

この本の作者は人に絶対使うなどといっても人殺しとの方法として使われてしまうことが分かっていたのだろう。

魔法には大きく分けて、五つある。

まず一つ目、詠唱魔法。

詠唱を唱える事によって、魔力をこの世の理を無視し、捻じ曲げている物に変換する魔法。

二つ目、精霊魔法。

精霊に魔力を与える事によって、精霊の力を借りる魔法。

三つ目、方陣魔法。

特殊な方陣に魔力を流し込む事によって、発動させる魔法。

四つ目、供物魔法。

魔力だけでなく、特定の供物も使うことによって、威力を上げたり、特殊な効果を発揮する魔法。

五つ目、特殊魔法。

体のどこかに刻印がある、または普通の魔法より大きな威力の魔法を無詠唱で放てたりする。という五つだ。

五つ目の特殊魔法は、魔法として分類していいものか、魔法の専門家たちは議論を続けているらしい。

続いて、属性についてだ。

火・・・その名の通り、炎などを使える。水に弱く、風に強い。

水・・・水や氷を使える。土に弱く、火に強い

風・・・風や、草を操れることも有る。火に弱く、土に強い。

土・・・土などの、大地に関連するものが扱える。風に弱く、水に強い。

光・・・光や雷を使える。4属性に対して特に得意は無いが、闇に
対してだけ強い。

闇・・・闇や病気などを使える。4属性に対して強く、光に弱い。

無・・・基本使えるものは無く、回復魔法や特定の魔法しか使えない。
得意不得意無し。

属性に関しては、得意不得意はあっても、基本一つの属性しか使えない、
ということはない。しかし、特殊体質の人間の中に、一つの属性しか使えないが、
その属性の魔法の攻撃力が以上に高くなる。という体質者がいたり、
闇は魔族にしか基本使えなかったり、光は人間にしか使えないなどの例外がある。

その本を読み終え、魔法に関する資料を見ると、興味深い記述があった。

S A F についての研究。
スキルアウトフィールド

S A F について。

魔法を使い、魔力を消費した後は回復するのに、その他の普段はどうなっているのか？

魔力が限界まで回復した後は溢れてしまわないのか？それが体に危害を及ぼすことはないのか？私はそれについて調べてみた。

しかし、魔力を見ることはできない。そこで、方法の一つとして、魔法などの流れが見える魔法を作り使ってみた。

すると、驚くべきことに精霊が人に群がっていたのだ。そこで、一つの仮定を立てた。人間が必要のない魔力を生産した場合、それを外に放出している。精霊はそれを食べているのではないか？

幾つもの実験を行い、この仮説が正しいことが分かった。この人間が無意識に入らない魔力を放出している現象をスキルアウトフィールドS A F と名付けるこ

とにする。

・・・面白い記述を発見した。これを使えば色々な事が出来る気がする。

始まり23 『面倒だ……』

次は、バルゴリア大陸の歴史について調べることにした。

この大陸は世界神という者がいて、その神が世界を作ったとされる。さらにその下には、空間の神、時間の神が居る。

その下には音楽をつかさどる神、食物をつかさどる神、色をつかさどる神などがいて、人や獣人、魔族などが居る。

その神々は、自分の分身となるものに、自分の力の一部を分け与えて世界を監視している。神々の分身は、人であったり、獣であったり、魔物であったりする。

「神々の分身かぁ……。出来れば会いたくないな、面倒ごとに巻き込まれそうだ。」

神域について。

「神域？」

神々が祭られた祠などがあり、神の許しを得たものしか入れない場所。

入り口と呼ばれるものが必ずあり、それは扉だったり鳥居だったりする。その前に立つと、神が如何するかを決めるようだ。許しを得ると、中から使いのものが出てくる場合が多い。出てこなくても何かしらの合図はあるはずだ。何も起きない場合は速めに立ち去ることをお勧めする。下手をすると神々の怒りを買ひ、下手をすれば死んでしまう場合も有る（死傷者は既に出ている）。

「……絶対行かないことにしよう。」

この世界を作ったのは神で、人間などを作ったのも神であるが、この大陸を繁栄させたのは人間の一人だった。

「人間だと？」

その人間は0代目勇者と呼ばれ、その二百年後に現れる一代目勇者とは違った。

その人間はこの大陸に生まれたもので、異世界から召喚された訳でもなく魔王を倒すという目的があつた訳でもなく、普通に生まれてきた人の男の子だった。

普通に育つた少年は、一つだけ誰にも言つてなかつた秘密があつた。彼は、空間の神の分身だった。

しかし彼は、それを使って如何しようという訳でもなく、力をもてあましていた。

そんな中、彼の幼馴染がこう言つた。

「世界を作ろうぜ！」

それは子供の頃の戯言だったのだろうか？ いや、違う。

なぜかつて？彼の幼馴染は、時間の神の分身だったからだ。

といつても何からすればいいのか分からない。だから彼らは世界を見て回ることにした。

家を飛び出し、広い世界を見、彼らは結論付けた。

この世界には圧倒的に指導者が足りない、と。

村ごとなどで村長などが居るがそれだけでは人間同士の争いは避けられない。

そのため、彼らは村をいくつも回り、村の人々や村長を説得し国を作つていった。

作つた国は違う人間に任せ、次の国を作る。それを繰り返し、今の世界の国の原点を二人の人間が作つたのだ。

この二人は後に零の勇者と零の王者と呼ばれるようになる。

「なるほどね。」

コンコン

「はい。」

「お茶をお持ちしました。」

そう言って入ってきたのはこの本を届けてくれたメイドさんだった。

「有難う御座います。神様の分身さん。」

「・・・何の話ですか？」

「この資料、あの人たちがまとめた資料に貴方が手を加えたものなんですよね？」

「だから何の話ですか？」

何時までも埒が明かないので、つけていた眼帯を外した。

「この眼は全てをステータス化していますから何をごまかしても無駄ですよ。色の神の分身、アリュージェ・ティラさん。」

「そこまでは覚えていましたか。」

「右眼で見れば一発です。」

「全く困りましたね。その力。」

「まあ、そう言わずに。」

「まず、一っただけ伝言があります。」

「誰からですか？」

「世界神の分身からです。」

「その世界神の分身ってどんな人ですか？」

「・・・人では無いとだけ言っておきましょう。」

「そうですか・・・じゃあ、伝言をお願いします。」

「『天の領域で待つ。御前があの子の言っていた人間であることを切に願う。』だそうです。」

「天の領域？」

「世界神の神域では？」

「・・・いかねえ。」

「え？」

「絶対行きたくない！」

「そ、そんな事言われても・・・。ま、まあ伝言は伝えましたよ。」

「・・・分かった。」

「そ、それでは。」

こうして、3日目も過ぎていった。

始まり23 『面倒だ・・・』 (後書き)

昨日は閑話を投稿したのですが気付いて頂けたでしょうか？
あれは読まなくても大丈夫なように物語を進めたいと思っています。

始まり24 『お祭りっていいね。』（前書き）

変なはじまり方になってしまった・・・。
まあ、気にしないで行きましょう！

始まり24 『お祭りつていいね。』

こんな感じで今日に至ったわけだ。分かってくれます？このややこしい事に巻き込まれた感満載の日々。

はあ、後が思いやられるよ。

まあ、とりあえず俺は歩いていいと許可を貰ったので、町へ繰り出すことにした。

因みにアリューゼ・ティラさん憑きだ。

ん？漢字が違うつて？気にするな。

「ルナさん？」

「はい？何でしょうか？」

「考え事をしていたようですが、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。」

今、この町は勇者が国を救ってくれた、と絶賛お祭り騒ぎ中だ。

その中で、勇者として歩き回るのは嫌なので女として町に出てきている。

勇者の情報は既に全国にファミールさんから伝えられている（男として）。しかも勇者は我らを守るため戦った時に負った傷を癒すために療養中となっている。

まあ、お祭りは嫌いではないので盗^{調達してきた}んできたお金を使い、ティラさんと色々な食べ物を食べ歩いていた。

「にしてもお祭り騒ぎで変な奴が多いですね。」

「そうですね。」

ここは城から1キロも離れていない所なのですが、ここに来るまで痴漢、スリ、ナンパ、その他諸々にあつていた。

まあ、周りにばれない様に撃退しておいたが…。

うん。でも、この世界の料理って煮ると蒸すという考えが無く、焼く、炒めるが主流である。

とりあえず今度シチューやらカレーやらを作ってみようかと考える。

ちなみに俺の持っていたカバンには、色々なものが入っていた。護身用の武器だったり、料理を作ろうと思って買ってきた材料だったり、買いこんで学校で読み漁っていた料理本、教科書、ノートなど、正直な話をすればもつと入っているが、今説明が必要なのはこの程度だろう。

しかし、この材料ではいつか足りなくなってしまうと言っか、全然足りないと思われる。

同じような材料を調達することを心に決めたのだった。

「そういえばルナさんは料理できるんですか？」

「まあ、人並みには。」

「そうなんですか…。」

何故なんだろう。彼女の顔にはとても悔しそうな表情が浮かんでいる。

それを見た俺の頭の中で、一つの仮定がたてられた。

「もしかして、料理苦手なんですか？」

「うっ……。」

俺の仮定は当たっていたようだ。

「今度良ければ教えましょうか？」

「良いんですかっ!!」

かなり近くまで詰め寄ってくる。

そういえば言い忘れていたがティラさんは相当な胸の持ち主だ。

今まで特に気にしていなかったのだが、こう上目づかいで谷間が強調されるようなポーズをとられると、中身が男な俺は非常に困る。

「わ、分かりました。教えますから、離れてもらえませんか…。」

「

「あ、すいません。」

俺が男だと知っているのだろう。若干顔が赤い。

「あ、あの。」

「なんですか？」

「料理を教えてもらえる対価として何かしたいんですけど…。」

「え？いや、そんな事しなくて良いのに。」

「いえ！それでは私の気が済まないんです。えーと……。そうだ！私、絵が得意なんですよ。よかつたら如何ですか？」

ここで断るのは野暮って物かな……。

「分かりました。では今度教えてください。」

「決定ですよ！忘れないで下さいね！」

「分かってますよ。」

料理を教わる事が出来るのがそんなに嬉しいのか、彼女の足取りは軽い。

「そういえば、何時にするんですか？」

「何時でもいいですよ。」

「うーん……。」

「私は明日から特に何もすることが無いので何時でもいいのですけど……。」

「では、明後日をお願いして良いですか？今日いきなりお休みを下さいと言って、明日すぐに休めるものでも無いので……。」

「あ、そういえばティナさんって本職メイドでしたね。」

「忘れていたんですか？」

「いやーすいません。」

「昨日会ったばかりなのですけどね。」

「うっ。」

「明後日の約束が心配になってきました……。」

「だ、大丈夫です。そういう約束は割と覚えてる方なので。」

かなり疑われてる……。

「だ、大丈夫ですって！」

「じゃあ、信用しますからね。」

「大丈夫です！」

こうして楽しい時間は過ぎて行つた。

始まり24 『お祭りっていいね。』（後書き）

ティナさんは色の神の分身なので絵が得意なのです。

ティナ 「エッヘン！」

それ以外はほとんど特技と呼べるものではありません。

ティナ 「・・・。」

始まり25 『ランクS』

今、俺は冒険者ギルドの前に立っている。

ティナさんに料理について教える。という約束をし、その後、城に帰ってみると、ばったり奈菜さんと出くわした。

世間話をした後、俺は一度行ってみたいと思っていた、いや、行こうと思っていた冒険者ギルドについて聞いてみると、快く教えてくれたので、暇になってしまった一日を潰すのに、ギルドの登録をしに来たのだ。

「よし。行くか。」

「・・・うん。」

ルナ付で。

何でルナがくっついて来ているかって？俺と奈菜さんの会話を盗み聞きしていたらしく、朝城を出たら尾行して付いてきてしまったのだ。

尾行している奴がいるなあ。とは思っていたがまさかルナだとは思わなかった。

そして、ギルドに到着する前に近づいてきて、俺と接触し、一人で何かさせる訳にもいかないので、連れてきてしまった。

まあ成り行きてやつだ。

ギルドのドアを開けると、にぎやかな声が聞こえてきた。

ギルドというのをゲーム以外ではじめて見たが、テイルと一緒に酒場のような造りになっているようだ。一階にはF Bランクの依頼がカウンターの隣に有るクエストボードと呼ばれるものに貼っている。二階にはA S Sランクの以来が貼ってある。しかし二階はクエストボードが置いてあるだけだ。それ以外の場所はギルドマスター、ギルドマネージャーの部屋になっている。

クエストは、クエストボードから受けるクエストの紙を取って、一階のギルドマネージャーに渡すだけで受けられる。

まあ、ギルドの説明はこのくらいにしておいて、冒険者としての登録をしよう。

「すいません。」

「はい、何でしょうか？」

「あの、冒険者の登録をしたいのですけれども。」

「ああ、登録ですか？少々お待ち下さい。」

そう言つて、ギルドマネージャーは奥に行ってしまった。

「暇だなあ。」

そう思い、ギルドを見回すと、とても騒がしい場所があった。

「なあ、俺も連れて行ってくれよ。」

「私も！」

「ねえ、良いでしょう？」

何だバラサイト寄生虫か。

しかしあんだだけの量がいるとなると、相当な実力者か……。

「いや、あの、今日は頼まれごとが在つてここに來ただけでクエストは受けないんだ。」

「へえ。」

「なーんだ。」

「つまんないの。」

そう言つて人々は散つて行つた。

「ふう。」

そこに残つたのは、少し小柄（俺よりはでかい）な男だった。

その男はきよるきよると周りを見回して此方を見るとこっちに近づいてきた。

「……。」

嫌な予感しかしねえ。

「ルナさんですか？」

「はい、そうですが……何か御用でしょうか？」

「えーっと……まずは自己紹介が必要ですね。僕はアイク・レトリヨーズ。S級の冒険者です。」

「S級!？」

S級っていったらもう上はSSしかないじゃねえかよ。

「はい。えーと・・・私に何の御用でしょうか？」

「いえ、あの人からの預かり物です。」

そう言っ取り出したのは大きな袋。

「ここに入っているのは龍貨5000枚です。」

「龍貨？」

「はい。一つ金貨1000枚分。金貨一枚銀貨1000枚分。銀貨一つ銅貨1000枚分。」

銀貨一枚あれば人は一ヶ月余裕で過ごせます。しかし冒険者の場合一ヶ月に金貨一枚必要なってのはさらにあります。」

この辺はテイルと変わらない金銭感覚でいいのだろう。

「ちなみにこれ以外の武器や防具やら色々あるのですが如何します?」

「・・・。」

もうこれは口があいて塞がらない状況だ。

「えーと、暫く僕が預かっていますから、ギルドに倉庫でも借りてください。」

「な、何でそんな大金と武器と防具などが私に？」

「ライル・エルトラスさんからです。」

「!？」

ライルだと・・・。

確かにテイル内ではそんな大金と武器と防具を持っていた気がするなあ。

でも、なんで？

「あの人は消えてしまいました。」

「消えた？」

「ええ。その前日に俺に会いに来てルナって人に渡せって言われたんですよ。」

「・・・。」

どういう事だ？

俺のコントロールを失ったから自由に動くようになったって事か？
くそつ。謎が多すぎる上にこっちの手にあるカードが少なすぎる。
何をさせたいんだ、俺達に・・・。

「まあ、暫くはこの周辺でクエストを行なっている積りですから倉庫か何かの保管場所が出来たら声をかけてください。それと・・・これを。」

そう言つて差し出してきたのは光る明るい青色をした剣だった。

「これは・・・。」

「分かりますか？」

「はい。大丈夫です。」

「では、また会いましょう。」

彼を見送った後、無事にギルドに登録することができた。
ここでも一悶着あったのだが、それは別に機会としよう。

始まり26 『ギルドカードと食材』(前書き)

単なるお買い物ですw

始まり26 『ギルドカードと食材』

「これがギルドカードかあ。」

一枚のカードを見ながらそう呟いた。

ギルドに登録した際に作ることになったのがこのギルドカードだ。ギルドカードには基本、名前、職業、性別が載っている。

これ等はギルドカードを作るときに自分自身で入力できる項目だ。

さらに、このギルドカードには、イメージすることによって現れる空中投影型ディスプレイのようなものが現れる。そこには能力値や特性等が表示される。

俺のはこんな感じだった。

ルナ・カンザキ

Lv:30

攻撃力:A(250)

防御力:A(250)

魔力:A(2500)

精神:S(8000)

速度:S(8000)

耐久:A(2500)

魔攻:A(250)

魔防:B(100)

職業:勇者

装備:金剣エクスカリバー、銀剣プラスタブレード、闇剣デュラ
ンダル、黒龍石の手袋、黒龍石の靴、黒き腕輪、旅人の服。詠唱破
棄の剣、宝剣の太刀×2 宝剣の両刃剣×2

特性:光剣の所持者、勇者の加護、深眼(右)

能力値だけで言ったらもうSランクに到達しているそうだ。

ちなみに一人のギルドの職員にこれを見られてしまった為、ギルドマスターの部屋で口封じをしてきた。
ギルドカードを異次元倉庫に放り込み、明日のための食材探しをすることにした。

・
・
・

とりあえず色々な所を回ってみたが、この世界の野菜は前の世界と同じような野菜が多い。味に関してはそれを料理した店に行ったらた
め保障できる。

しかし、異質なのは肉や魚の類、それに果物だ。

魔力を浴びて凶暴化したような魚や動物の肉（野菜にも無かったわけ
ではないが少なかった）などが売られている事もある。それ以外にも
色々な此方に合わせた成長をした動物も多かった。

この世界で生きていく上で、狩に行き取ってきて食べることや、野
宿で、狩ってきた獲物を食べることもあるだろう。そういう事を考
えた上で、肉、魚類は此方の世界の物を使うことにした。

これで主食や前菜を作ることとは可能だ。

ここで当たる壁が、デザートだ。

此方の果物は、見た目と味が元の世界の物とずれている場合が殆ど
だ。

あちらの世界の調理法ですと、味と見た目が合わないため、酷い
デザートになるなんて事が起きかねない。

これは時間をかけてやるしかなさそうだ。

「お姉ちゃん。」

「如何したの？ルナ。」

「あれ食べたい。」

そう言っ指差した先にあったのはちょうど情報を求めていたこの
世界のデザートだった。

「よし、食べようか。」

そういつた途端ルナの目がひかり、デザートを売っている所に飛び込んで行った。

「やれやれ。」

そう言つて追いかけてつて見ると、そこにはデザートと言うよりは、果物を切つて、何かを添えただけの様なものが多かった。

しかし果物その物の味が出ているので、この果物はこんな見た目だがこんな味がする。というのが良く分かったので有難かった。

ルナは梨のような見た目と触感をして林檎と蜜柑を足して2で割つたような味がした物にちよつとしたソースのようなものがかかっているものだつた。

俺は林檎のような見た目と触感をしていてマンゴーのような味のする物をドリンクにした物を飲んでいた。ちなみにこれのソースをかけたものは既に食べ終わっていた。

「お姉ちゃん。」

「なに？」

「美味しいね！」

そう言つたルナの顔はキラキラと輝いていて少し眩しかった。

・
・
・

「お姉ちゃん。」

「なに？」

「重くないの？」

ルナからの質問はもつともだつた。

だって俺は今、食材の入った袋を6つも抱えているのだから。

「ちよつと重いかな。」

嘘だつた。全然重くない。

こつちに來た時手に入れたらしい勇者の加護とやらで筋力も人より優れている体になったようだ。

「持つ？」

「大丈夫。ルナに持たせるわけにいかないよ。私の荷物だもん。」
「そっか。」

夕日が沈もうとしている中、二人の影は長く伸びていた。

始まり26 『ギルドカードと食材』（後書き）

特性は書き忘れたがあるかもしれないので、後から足すかもしれません。

始まり27 『ダークマター』… 『(前書き)

やっとの事で30回突破・・・。
これから頑張ります！

始まり27 『ダークマター』』

「おはよう御座います。」

「おはよう。」

早め起きて厨房を借りることを城の料理長に頼んで、食材を運んで来た所にティナさんは現れた。

「何を作る気なんですか？」

「私の居た所で作られていた料理をこっちの材料で作ってみようか
と思っっているんですよ。」

「へえ。これは何ですか？」

そう言ってティナさんが珍しそうに眺めているものは、カレールー
だった。

「それがこの料理を作るのに大切なんですよ。」

「いや、聞いている所は其処じゃ無いでしょうが。何なんですかこ
れ？」

うーん改めてなんだと聞かれると・・・よく分からなかったりする。

「調味料みたいなものかな？」

「へえ、これがですか。」

「まあ、僕はこっちで作るんで、そっちで野菜炒めを作ってもらえ
ませんか？」

これは小手調べだ。ここからならよく見えるからどんな風になるか
は見る事が出来る。

「分かりました！」

凄く張り切ってるなあ。

「はい、これ。」

野菜の袋を渡し、既に調理に取り掛かる。野菜の皮をむき、野菜を
切りボウルに入れていく。ティナさんも慣れない手つきながらもが
んばっている。

よし。ちよつと気合を入れて野菜を片付けていく。

俺の包丁は護身用を兼ねているため良く切れる。素人に渡せばあつという間に指の山がでかかねない。

野菜を切り終わり、肉も準備が出来た。それらを底が深めの鍋に入れる。

それらを炒めながらティナさんを見ると、頑張つて野菜を切り終えたようだ。

水を入れしばらく待つている間、ティナさんを観察することにした。切った野菜をフライパンの様な物に入れ、炒め始めた。

そこで一回鍋のふたを開けかき混ぜてからカレールーを入れ、再び混ぜながら観察する。

そして、しばらくそれを眺めていると、いきなり野菜が真っ黒な物体に変わった。

「何が起きた!？」

「いや、私が火を使う料理を作ろうとすると何時もこうなるんですよ。」

「……。」

これは思ったよりも大変だ。

そう思い、眼帯を外して右目でティナさんを見してみる。

特性：色の神の分身、絵の天才、アンチ料理

「……何このアンチ料理って。」

「私の特性の話ですか？」

「そうだよ。」

「生まれた時から憑いてたんですよ。」

気のせいかな違う漢字が表れたような気がした……。気のせいだ、うん。

「たぶん料理が出来ないのはそのせいですよ。」

「そうなんですか？」

泣きそうな顔で上目遣いにこっちを見てくる。

そういえば言い忘れていたけど、ティナさんはエルフのため、背が小さい。プラス耳も尖っていて、金髪だ。

「そうだと思うよ。」

少しづつ下がりながら話してみるが、ティナさんは一気に距離を縮めて来る。

「何ですか？」

「そのスキルは、例えば火を使う料理を作ったとしましょう。すると、ここまでは焼かないといけない。という最低ラインまで焼いたときに、焦げるように設定されているんです。だから成功しないんですよ。」

「ど、如何すればそれは治るんですか？」

「いや、それをこっちに來たばかりの私に聞かれても……。」
「そうですね……。」

も、物凄い落ち込んでしまっている感じがあるんだけど……。

「た、旅の途中で直す手段が分かったら直してあげますからね。」

「約束ですよ。」

「分かってます。任せてください。」

「じゃあ、私は如何すればいいんですか？」

「そこに座って見ていて下さい。」

「分かりました。」

ティナさんは大人しく椅子に座った。

「よつと。」

ちよつと掛け声を掛けながら急いで野菜炒めを仕上げる。

次に此方のフルーツを切って盛り付ける。カレー、野菜炒めも出来ているので盛り付ける。

「作ったのは良いけど多かつたな。」

「王様と賢者様を呼びましょう！」

「えー、ヤダ。」

「何ですか!？」

「面倒くさい。」

「いやいやいや、おかしくないですか!？」

「ま、いいや。奈菜さん呼んできて。そうしたら、盛り付けておいた料理を、隣の食堂に運んでおいて。」

そう言つて盛り付けをし、手早く片付けると、部屋のほうに戻っていった。

「ルナ、起きて。」

「おはよう。お姉ちゃん。」

「おはよう。ご飯だから一緒に行こう。」

「うん。」

「お着替えしてて。お兄ちゃんと桃香さんを起こしてくるから。」

「うん。」

次は隣の部屋か。

・
・
・

「おはよー。」

「ドアを毎回蹴破らないで欲しいのだが。」

「ご飯だから食堂にきてね。」

「スルーですか？」

「じゃ。」

「・・・。」

・
・
・

桃花さんは起きていた。

「ご飯なので食堂に来てください。」

「はい。」

・
・
・

部屋に戻ると、ルナが着替えを終えて待っていた。

「いこっか。」

「うん。」

食堂での朝ごはんは、楽しいけど騒がしく終わった。

・
・
・

ティナさんの料理はスキルのせいでもあると分かったので、料理を教えようと思っていた時間の朝食後の時間が余ってしまった。

なので、ギルドに行こうと思ったら、ルナがくっ付いて来て、遊ぶことを要求してきたので、一日がそれで終わってしまった。

しかし、ティナさんのあれは予想外だったな・・・。

始まり28 『貴方はどうしたい?』 (前書き)

この前30話だ!とか言いましたけど、今日で一か月でした。
とにかく頑張ります!

始まり28 『貴方はどうしたい?』

朝早起きをして、体を軽く動かす。

そして、防具や武器を売っている露天へ向かった。

冒険者には朝早くから活動している人も多いため、露天は割りと早くから開いている。

しかし、まず、今の武器と防具では怪しまれる事は確定と断言していいだろう。

なので、その露天で、ちよつと重めの両刃剣を選んで買い、防具は、動きやすそうな、皮の装備を選んで買った。靴と手袋は魔法でコーティングしてあるから、珍しい物だって分る事も無いだろう。

「よしっ、行くか。」

準備が整ったところで、ギルドに向かうと、クエストボードの前にアイク・レトリヨースさんが居た。

「おはよう御座います。」

「ん? ああ、おはよう。そういえば倉庫は借りたかい?」

「いえ。冒険者用に貰ったバッグじゃ駄目ですか?」

「それだと、容量が足りないと思うな。」

「じゃあ、借りてきます。」

・
・
・

「借りてきましたよ。」

「じゃあ、移し返しようか。」

「どうやるんですか?」

「倉庫を借りると、ギルドカードに倉庫つていう欄が出るよね。」

「はい、出ています。」

「それを開いてみて。能力値の時と同じ感覚で。」

「出来ました。」

「その右下に渡すと受け取るっていうのがあるよね？」

「あります。」

「その受け取るを選択して。」

「はい。」

「送るよ。」

「あ、来たつて、倉庫一気に埋まっちゃった!？」

「多かつたからね。じゃ、渡すものは渡したよ。」

「あの・・・。」

「如何したの？」

「最初つてどんなクエストを受ければいいですか？」

「最初かあ。やっぱり、ダンジョンには行かずに、そこら辺の討伐系を受けるべきかなあ、もしくは、運送系とか。」

「運送系？」

「何かの道具を何時までに、何処に届けて。とか、手紙を届けて。とかのクエストの事だよ。」

「なるほど。」

「じゃ、僕は次のクエストをやってくるから。」

「何のクエストですか？」

「護衛の依頼だね。」

「護衛かあ。」

「それじゃ。あ、そうだ。」

「如何したんですか？」

「あつちに山があるよね？」

アイクさんが指差した方には、一つ山があり、その向こうに町もあったはずだ。

「あります。」

「あその山を通るときはモンスターに気を付けてね、産卵時期で荒れている奴が多いみたいだから。」

「分かりました。」

「じゃあ、今度こそ。」

「有難う御座いました。」

その後、初心者が受けるようなFクラスの依頼を3つ受けた。

一つは、アイクに注意された山を通る手紙の配達依頼。

二つ目はその手前の草原にいるモンスターを数匹狩っておくこと。

その条件として、モンスターの換金できる部位の一つをギルドの職員に渡すこと。

三つ目は山にいるモンスターを狩る依頼。条件は二つ目の依頼と同じだった。

アイクに注意されたのになあ。

そう思いながら、なんで自分がこの依頼を選んだのか迷っていた。

二つ目の依頼は割と早めに決めた物だった。

しかし一つ目と二つ目は最初は除外した物だった。

それなのに2回目見た時に、俺はその依頼を手にとっていた。

危険だ。と言われてそこに突っ込むのは馬鹿だろう。なのに、そう、なのにだ俺はそこに突っ込むつもりとしている。

俺は今、死にたがっているのか？

いや、興味本意か？

それともこの世界で強くなった俺の实力を知りたい。なんていう考えか？

自分の事が分らない。とても恐ろしく感じる。

それを排除するには如何したらいい？

俺はその手段を知らない。知っていたとしても何かするのだろうか？
しかし依頼を受けてしまったのは事実だ。これをクリアしてから考えることにしよう。

ギルドを出ると、すでに太陽は真上にあった。

始まり29 『初クエストでの災難』

ギルドの職員に教えてもらった通りに進む。

街道をずっと進んでいくと、モンスターがウロウロしている草原がある。其処のモンスターを狩ればいいらしい。

多少魔法も使って走ったので、草原には10分程度で着いた。

「ウロウロしているな、確かに。」

ゴブリンやスライム、人食い花のようなモンスターがちらほら見える。

「それじゃあ、行きますか！」

そう言って走り出し、手ごろな場所にいたスライムを真つ二つにする。それを見て寄ってきた他の人食い花やゴブリンを叩ききる。流石に人間に近い姿形をしているゴブリンを切るときは顔をしかめたと、人食い花は正直気持ち悪いし、スライムはきつたときの感触を好きになれるとは思は無かった。

5分程度で粗方片付け終わったので、ギルドカードをかざしてモンスターから戦利品を取っていく。

ここはゲームじゃないから、勿論モンスターに近づいてAボタンを押すなんて事は出来ない。しかし、このギルドカードには便利な所があり、このカードをかざすだけでそのモンスターで売れそうな部位を取ってギルドカードに保管してくれる。これは倉庫も同じで、今自分の持ち物として持っている道具をかざせば倉庫に入れることも出来る。

しかし、倉庫に入っている道具は町の外では出せないらしい。

1分ほどで、戦利品の回収は終わり、草原を突っ切って、山道を進んでいく。

今回魔法は戦闘で使わず、移動または逃走用にしようと思っている。そのため、移動速度は速いの何の、三十分程度で山の頂上に着き、見下ろすと、麓にある村を目で見る事が可能だった。

する。

足に食い込んで、あと少しで切れそう！という時に、ドラゴンの腕が上から迫ってきた。それを辛うじて回避し、もう一度攻撃する。それが続いていると、ドラゴンが空へ舞い上がった。

「これはヤバイぞ、ブレスだ！」

口を開けている為、のどの奥のほうが見える。そこは赤く光っていて徐々に炎が競り上がって来る。そして一度口を閉じて、その口の炎を吐き出した。

それを待つ間、俺は何もしていなかった訳ではない。炎に強いタイプの障壁魔法を何重にも掛けていた。

「移動と逃走用だったんだけどなあ。」

ブレスが来る間、障壁の中で何もしていなかった訳ではない。次に攻撃に転じるための準備を整えていた。

「来た。」

ブレスが放たれ、障壁がだんだん削られていく。しかし、障壁は何とか耐え抜き、次に攻撃に転じた。

ブレスが炎だったから、こいつはレッドドラゴンだろう。鱗は鈍い赤だ。鱗が鮮やかなほうが強いなんて思いがちだが、この世界では鈍いほうが強い奴が多い。鱗に不要な成分が段々増えてきたのが、鱗が鈍い色になってしまう理由だ。生まれたばかりのドラゴンは、鮮やかな赤だが、年を取れば鈍くなる。

ドラゴンの中で年をとるという現象は、強くなる、と置き換えて大丈夫だ。

つまり、こいつは結構強いというわけだ。

このドラゴンはレッドドラゴン、つまり、炎を使うドラゴンなわけだから……。

「水系の魔法をぶち込む！！」

そう言つて、展開を終えて待機状態になっている魔法を次々に放つ。

『アイスランス ウォーターカノン アイスゲイザー
「氷撃槍」 『水流撃』 『氷柱』」

どれもドラゴンに直撃、右の翼と、左腕、脇腹の辺りを損傷したよ

うだ。

[illegible]

とんでもない音量の咆哮だ。耳を塞ぎ一気に片を付けるため、目の前のドラゴンに突っ込む。

逃げるはずだったのに、まともに戦っちまつてる。何でだろうなあ。背中に悪寒が走った。これは嫌な予感の前兆だ。そう思い、空中に飛び上がった。

嫌な予感は当たったようで、もう一匹のドラゴンが其処には居た。

これは人が相手の戦い、戦争のような大規模なものでも使える便利な魔法だ。

しかも、方陣を書く時間を魔法で短縮しているため、方陣魔法の欠点を消す事が出来る。あえて弱点を挙げるならば、魔力の消費の激しさだろう。その辺は勇者の加護によって如何にでもなっているの
で俺にとって心配する事もない。

このドラゴンは死んでいるのだろうか？

ふとそんな疑問が頭に浮かび、ギルドカードをかざしてみる。

しかし、戦利品化しない事から、生きていることが判明する。

「このまま放つて置いてもいいんだけど、念には念を入れておくか。」

「アイスグラウンドもう一度凍土で魔方阵を書く。」

「『ヘルファイヤ地獄に堕ちし堕天使が作り出した炎煉獄の火炎発動！』」
闇と火の属性を混合させた属性魔法、煉獄ヘルファイヤの火炎。

ケルベロスを模した黒い炎が対象を食らいつくすというこの魔法、威力は申し分ないのだが、とにかくスピードが無いことが弱点だ。しかし今は敵が氷漬けで動けない状態、スピードに関しては気にしないが、気を付けないと換金する部位が一つ残らず燃え尽きてしま
うなんてこともあり得るので、ずっとギルドカードをかざしておく。
一匹が戦利品になる。もう一匹もその内なるだろう。

「早くしろ。」

そう呟いた瞬間もう一匹のドラゴンも戦利品になった。

「よし、次は三つ目のクエストだ。」

山の中のモンスターについては、草原にいたモンスターが少し強くな
った奴や大きくなった奴しかいなかった。

「よし。」

粗方狩り終え、戦利品をとり終え山を下って行き、手紙を届ける。

また山を越えて元の王都へ戻る。

「はあはあはあ。」

あの戦闘の後魔法をぶつ続けて使って、しかもずっと走りっぱな

しだったのだ。勇者といえど、これは辛いものがある。
その日はギルドによらずに帰ると、ルナのタックルを食らったので
あった。

始まり31 『上下の関係』

「ふあゝ。」

一つ欠伸をして、ベッドから起き上がる。

冷蔵庫の代わりとして魔法を掛けた戸棚から卵と肉を薄くスライスしておいたものを取り出す。魔方陣を起動して火を作り、フライパンに二人分のベーコンエッグもどきを作り、何とか手に入った塩と胡椒を軽く振りかける。そして、こっちにあったフランスパンのよなもので、主食としてよく食べられているパンを切り、昨日の朝作り置きしておいたシチューを盛り付ける。

「よしつ。」

朝ごはんは完成した。後はルナを起こして……。

うん？

俺、昨日どうやってここまで帰ってきたんだ？

えーと、ドラゴンを退治して、村に行つて手紙を届けてこの町まで戻ってきたのは覚えている。証拠として鞆の中に手紙が届いたという証明書も貰っているし、ドラゴンの素材が戦利品化してあるギルドカードも入っているだろう。

そう考えて、鞆を漁ってみると、証拠は直ぐにそろつた。

「魔法の使いすぎでヨレヨレになつてしまつたからギルドに行くのは諦めたんだよなあ。」

そして、剣を杖のようにして何とか城まで帰つてきて、そこから兵に捕まつて、其処に兄ちゃんが通りかかったため、運よく解放してもらえて、癪だけど部屋まで肩を貸してもらつた。そして部屋まで着いたら……。

「ああ、思い出した。ルナのタツクルを兄ちゃんが食らつたんだ。」俺にタツクルをしようとしたのだろうが、肩をかしてくれていて隣にいた兄ちゃんにルナのタツクルが当たつたんだ。

「ルナはかなり焦つてたみたいだったけど。」

王様にタツクルしたと分ると、とんでもない勢いとまでは言わないが、ルナにしてはとてつもない速さで謝り始めた。

そしてこっちを向き直り、お化けがいても一目散に逃げ出すような顔をして一歩一歩ゆっくり進んできた

「おゝねえゝちゃゝん？」

「は、はい？」

「無茶をしないって言ったよね？」

「言いました。」

「これは無茶に入らないのかな？」

「い、いや、あのですね、予想外のハプニングが起きたためこうなつてしまいました。本当はこうなる筈ではなかったのですよ。」

「だから無茶してもいいなんて理由になると思ってるの？」

「思ってます。」

「今度やつたらお城から出れないようにしちゃうからね。」

「はい。」

その後は、ルナが夜ご飯を要求してきたため、朝作っておいて置いたシチューと、肉をたれで焼いた物、そしてサラダとパンを出して食べて、そのまんま寝たんだ。

そーだそーだ思い出したよ。

とりあえずルナを起こして、朝ごはんを食べよう。

・
・
・

昨日の報告のために今はギルドに着いたところだ。

ルナからは、今日は買い物に付き合ってもらうからついていくって言い出したので、ルナも連れて来ている。ついでに監視も兼ねているようだ。

「すいません。」

「はい、何でございましょうか？」

「クエストの終了報告と、ギルドマスターに用があつてきました。」
一瞬だけ疑わしいものを見るような表情を浮かべたがそこはギルド
マネージャー、一瞬で営業スマイルに切り替える。一瞬の表情も営
業スマイルだと分かつていても口を出すのは無粋と言うものだろう。
「クエストの報告は今ここで行わせていただきます。ギルドマスタ
ーへのお話は少々お待ちください。」
そう言つて奥に消えて行つたマネージャーを一瞥し、ルナにここ
に来る前に買った飴のようなものを与え、自分でも食べてみる。

「ん。結構美味しいね。」

「お姉ちゃんは甘いのが好きなの？」

「うん、結構好きだよ。」

「ふーん。」

そんな雑談をしていると、奥からマネージャーが戻ってきた。

「こちらのクエストでよろしいでしょうか。」

4つの紙を順番に見渡し、返事をする。

「これはよろしくない!!」

そついいながら一枚の紙をマネージャーに突きつける。

そこには、餌を取るために最近山に出没しているドラゴンを倒して
くれとの依頼内容があつた。

しかもそれはA+と書いてあつた。

「A+つてAランクの人がパーティーを組んでやつたというレベル
ですよネ!?それをなんで一番低いランクの俺が受けた事になつて
いるんですか!?!」

「それもそうですね。とりあえずマスターの所へ行つてみましょう。」

・
・
・

「ごめんなさい。」

ひれ伏すギルドマスター、啞然として動けないルナとマネージャー。

そして絡めた指の上に顎を乗せ、ニコニコと柔和な笑みを浮かべる俺。

「とりあえず勝手に受けたのなら報酬を貰うよ。」

「はい。」

絞り出したかのような細かい声を出しているギルドマスターが差し出した袋を受け取り、証明となる物をテーブルに乗せる。

「それじゃ、次こういうことしたら……。覚悟してね？」

「はい。」

こうして雑談は終わった。

ちなみにあそこで行ったことは、生涯5人しか知らない秘密となるのであった。

始まり32 『スキルマスター』

「お姉ちゃん。」

「なに？ルナ。」

「ドラゴンを倒したんだからレベルアップしてるんじゃないの？」
そういえばそうだ。

ルナの言うことはもっともだったので、ギルドカードを見てみた。

ルナ・カンザキ

Lv：35

攻撃力：A（300）

防御力：A（300）

魔力：A（3000）

精神：S（8500）

速度：S（8500）

耐久：A（3000）

魔攻：A（300）

魔防：A（200）

職業：勇者

装備：金剣エクスカリバー、銀剣ブラスターブレード、闇剣デュラ
ンダル、黒龍石の手袋、黒龍石の靴、黒き腕輪、旅人の服、詠唱破
棄の剣、宝剣の太刀×2、宝剣の両刃剣×2、傷だらけのブロンズソ
ード、皮の鎧

特性：光剣の所持者、勇者の加護、深眼（右）、ドラゴンスレイヤー竜殺し、火耐性、
闇耐性

ドラゴンスレイヤー
「竜殺し……。」

「お姉ちゃん、カッコいい！」

ルナの目がキラキラしている為、何か面倒くさそうで隠すスキルが

増えたなあと思っていることは、口に出さないでおく。

「そういえばルナもカード作ってもらってたよね？」

「うん。」

ルナが俺の登録の時も付いて来ていた為、一緒に作ってしまったのだ。

その時に、師弟システムを使ったため、ルナが冒険者として払わなければならぬ様な物は俺が全部払っている。

「見せてよ。」

「・・・駄目。」

「ええっ！？なんで？」

「お姉ちゃん的能力値が高すぎてなんか癪だから。」

「ひどい！それだけの理由で!？」

「・・・冗談。」

そう言つてルナはクスリと柔らかい笑みを浮かべた。

ルナってこんな表情も出来るんだ。とか思いながらルナが取り出したギルドカードを覗き込むようにして見てみる。

ルナル・セイン・ファブリュート

Lv:1

攻撃力:F(10)

防御力:F(10)

魔力:G(0)

精神:C(1000)

速度:D(500)

耐久:F(100)

魔攻:F(10)

魔防:F(10)

職業:

装備:白き腕輪、旅人の服、

特性:能力使い
スキルマスター

ここで俺の目を引いたのは魔力が0という所と、特性にある能力使用^{スキルマス}という物だ。

「ルナ。」

「・・・なに？」

「この能力使いつて何？」

「分らない。」

「この能力使用^{スキルマス}については本人の自覚が無いらしい。しかし・・・。」

「これじゃ、魔法使えないね。」

「・・・うん。」

自分でこれを見たときから落ち込んでいたのだろう。それに俺が事実を突き付けた事でかなり凹んだようだ。

「だ、大丈夫だよ。ちよつと待ってね。」

「・・・？」

右目を使ってルナの能力使用^{スキルマス}を検索する。

「・・・これは・・・。」

「お姉ちゃん如何したの？」

「ルナ。」

「・・・何？」

「能力持ちが見えたら言いなさい。その子を仲間にする。」

「・・・？」

「能力持ち^{スキル}はただでさえ魔法が使えないという特性を持っていていじめの対象になりやすいんだ。その上に能力^{スキル}なんて化け物じみた事を出来ることが分かったらもう周りはいじめなんかで留まらず下手すれば、その人たちを排除しようと動きかねない。それを私の仲間にしちゃえば簡単に手出しは出来ないと思う。」

「・・・待つて。能力^{スキル}が見えるってどういう事？」

「ルナ、貴方の能力使用^{スキルマス}は、能力^{スキル}を見分け、弄る事が出来る筈なんだ。でも弄るのは危ない可能性がある。大丈夫だって判明する

まで待つてね。」

「・・・分かった。でも・・・。」

「如何したの？」

「そんなに仲間を増やして大丈夫なの？」

「大丈夫。その子達はお城へ送るよ。」

「どうやって？」

「転送魔法を作っておく。それを使ってお城のお兄ちゃんの所に飛ばす。」

「なるほど・・・。」

「分かってくれた？」

「もう一つ聞いていい？」

「なに？」

「能力スキルって何？」

「・・・。魔法より大規模で応用性が利くけど、一つの事しか出来なくなる言わば特化型の魔法。これは、今、特殊魔術として国に扱われているけど、本当は能力スキルという名称があり、差別の壁を作っているものだよ。」

「ふーん。」

「例えば私のこの右目も能力スキルなんだよ。」

「・・・。」

「兎に角、ルナ、貴方には見えるはずだよ。」

「うん、自覚したときから出来る様になってるよ。」

「そっか。」

「・・・お姉ちゃん。」

「何？」

「帰ろう。」

「一箇所だけよってからでいい？」

「いいよ。」

既にお昼は過ぎていて、食べ物を買ってから行くことにした。この日は、俺とルナにとって、印象に残る一日となった。

始まり33 『ハトとグレネードランチャー』 (前書き)

サブタイトルに大した意味はありませんww

始まり33 『ハトとグレネードランチャー』

俺が寄りたかったのは武器の専門店の様な所だ。

今使っている両刃剣を研いでもらうのと、太刀と弓、太刀が駄目ならもっと大きく、重い、大剣を探すためだ。

弓に関しては、俺の使える武器の中で一番の得意武器で好きな武器な為、何があっても手に入れたい武器である。そして、元の世界で使っていたため、太刀はやっぱり欲しいところだ。宝具の太刀は装飾がかなり凝っていた為、人前で使うと勇者だとばれてしまう可能性がある。それを使えるのはいざという時だけなので、出来れば普段から使える太刀がほしい。それが駄目なら、出来るだけ重くて大きい、大剣のような武器が欲しいところだ。太刀の修行のほかに、太刀の斬るの逆の武器として、叩き潰す形を取る大剣を使ったことがあるため、他の武器よりはいいだろう。もう一つ槍も使えるから、あつたら買っておこうと思う。

「こんにちわー。」

「いらっしやいませー!!」

店のカウンターの所に立っていたのは、一人の少年だった。

「君がこの店のご主人？」

違うと思うが聞いてみる。

「違うよ。ご主人様は奥で剣を作ってるよ。」

案の定違ったので、とりあえず少年に砥ぎの依頼と欲しい武器を言ってみた。

「この武器を砥いでもらえないかい？」

「これは明らかに新しいの買っちゃった方が良いよ？」

「そうだよ。そう思ったからさ、代わりにこれは溶かしてナイフを作ってもらえないかな？」

「分かりました。」

「後は・・・。」

自分の欲しかった武器について聞いてみると、やはり太刀は無いようだ。残念ではあるが、一番重い大剣を出してもらうと、かなり重かった。

「よく片手で持てますね……。」

呆れ顔で少年が言った。

それもそうだろう。少年が扉を開けて、なんとか引きずり落とすのが限界だった物を片手で振っているのだから。

「よし、これを貰おう。弓は一番張りの強い物でお願いして良いかな？」

「はい。」

そう言っただけ戸棚から出てきた弓に驚きを隠せなかった。

それは黒く、どこまでも引き込まれてしまいそうな黒い色をした弓。それは、俺の原点だった。

「何で……何でこれがここに……？」

「……？これは商人が売っていたものを買ったものですが……？」

「そ、そうですか。これを下さい。」

「分かりました。矢はどうしますか？」

「有るものを下さい。」

「えーっと、この二つとナイフ、弓は矢付きで金貨50枚ですが……」

・大丈夫ですか？」

「大丈夫、今払っちゃうね。」

龍貨5000枚を手に入れた俺にとって特に痛い出費でもない。

それよりも、俺にとつてダメージが大きかったのはこの弓だった。

これはさっきも言ったが俺の原点。俺の深い所に関わる物だ。弓の強さは変えられているようだが、それ以外はすべて元のままだ。

「あ……。」

お金をゴソゴソと弄っていた俺の前で少年が躊躇いがちに話しかけてきた。

「どうしたの？」

「お願いがあるんです。」

「なに？」

「お姉さん、冒険者ですよ。」

「そうけど？」

「ある二人を助けてほしいんです。」

「ある二人？」

「はい。僕の友達で、とてもいい人なんですけど、ある時から苛められているんです。」

「ふーん。で？」

「その二人を助けてやって下さい！！お願いします！！」
顎に手を当て、3秒ほど思考の海に沈む。

「・・・いいよ。」

「かるっ！？」

「その子は昔から苛められていた訳じゃ無いんだね？」

「はい。」

「君とその子は毎日のように会っている訳でも無い？」

「何でそんな事まで？」

「ただの推測だよ。」

俺には思い当たっている事があった。そのためには彼に許可を取らなければならぬ。正直に言えば彼だけでなく、その張本人の二人からも許可を取るべきなのだが、それは後にする。

「君はその二人が生きていれば会えなくてもいいのかい？」

「・・・えっ！？」

「その二人にはもしかしたらある事が起こっているかもしれない。その時は、私の力を使ってその二人を隔離する必要がある。」

「・・・。」

「だから、君は会わなくなる覚悟も出来ているのかと聞いているんです。」

「あの二人が生きているなら会えなくてもいいです。」

「そっか・・・。分かった、私がその二人を助ける。その代り、二

人の居場所を覚えてくれない？」

「あの二人は、今は孤児院に住んでいるはずです。」

「分かった。ナイフは三日でできるかな？」

「あつ、ハイ。出来ると思います。」

不意打ちを食らったのかハトがグレネードランチャーを食らったような顔を少年がした。

「その時に二人と合わせてあげるよ。」

そう言つて、金貨をカウンターに置き、剣と弓を持つ。

「じゃ、また三日後。」

「あ、ありがとうございます。」

・
・
・

「お姉ちゃん。」

「なに？」

「何であんな依頼受けたの？」

「……あの子が言つてた二人の子供、スキル持ちの可能性がある。」

「えっ!？」

「一応ね、見てみて異常が無かったら苛めの元をどうにかするよ。」

「……分かった。」

「今日は帰って寝よう。」

「そうだね。」

始まり33 『ハトとグレネードランチャー』 (後書き)

ハトがあんなもの食らったら、まず死にます。人でも死にます。

閑話 2 『過去の記憶2』

「・・・私を殺してくれ。」

「そんなことできるわけ無いだろ！」

そう叫びながら出てくる少年がいた、その少年がドアの外に飛び出すと、別な少年とぶつかってしまった。

「・・・兄貴。」

「見てたのか？」

「・・・。」

その少年は沈黙を肯定と受け取ったのか、言葉が続ける。

「父さんはもう長くは無い。このまんまベッドの上で死ぬくらいならお前が殺せだって。既に遺書も書いて・・・俺は父さんを殺すことなんて出来ない！！」

悲痛な叫びをあげ、走っていく兄の背中、それは、いつか消えてしまうのではないかと思うくらいに小さかった。

「雷斗、入ってくれ。」

ここは知り合いの経営している病院、父さんが少し我が儘を言い個室にもらっている。

「何ですか？」

「私を殺せ。」

「それは父としての最後の願いですか？」

「そうだ。」

「卑怯だ、父さんは卑怯だよ。」

諦めたような笑みを浮かべながら吐き出すように言葉を発する。

「そうかもしれない。」

「兄貴がそんな事出来る訳が無い。それを分かって言っているんでしょ？俺が其処にいたことも知っていて、錯乱した兄貴は必ず俺にぶつかるだろう。全ては父さんの計算通り、いや、思い通りだよ。」

「計算なんてしてないさ。結果的にこうなったがな。」

「兄貴が断れば、もう兄貴にやらせない為に俺が動くことも分っていたんだよね。・・・父さんは何時までも卑怯だよ。」

「卑怯なのは分っている。でも、私はこのまま病院で静かに死んでいく事を潔く受け止めることは出来ない。ならば最後の最後まで・・・。」

「はあ。」

ため息をつきベッドに座って俯いている父を見る。

昔は大きく感じたあの背中も今では俺の成長と共に大きく感じなくなってしまった。病院に入ってからにはさらに小さくなってしまい、触れたら壊れてしまいそうな気がする。しかし、眼だけは死んでない。

「俺がやる。家に帰ってきて。」

「ありがとう。」

俯く父さんの顔は濡れていた。

・
・
・

黒い弓を片手に持ち、矢を準備し弓を引き絞らず構える。

目の前には太刀を構えた父さんが立っている。

「雷斗、まさか御前とこういう風に向かい合う日が来るとはな。」

「誰も思わないさ。自分の父親や息子と剣を持って向かい合うことがあるなんて事。そんな事をする必要が無いからね。」

「雷斗！！何をする気だ！！！」

家の柱に縛り付けておいた兄貴が叫んでいる。

「父さんがそうしろって言っているんだ。殺すに決まってるんだろ？」

「てめえ！！ふざけんな！！今すぐこの縄をほどきやがれ！！」

そう兄貴が叫んだ瞬間頬を血が伝い、頬の横には矢が突き立っていた。

「それ以上ごちゃごちゃ言つと足から潰すからね？」

そこには明らかに殺気がこもっていて、正直な話人が正面から向き

合うこともできないレベル、下手したら獣でさえも一瞬で屈服してしまうほどだ。

「さて、何時でもいいよ？」

「では・・・いくぞっ!!」

そう叫び、構えていた太刀で頭を狙ってくる。

しかしすでに決着はついていた。

「がはっ。」

血を吐きだし、倒れる父さんの姿。

その両足両腕と、心臓には深々と矢が突き立っていた。

「・・・。」

「父さん、何か最後に言うことは？」

「・・・。」

「!!!!」

「・・・これは宗谷には絶対に言うな!!アイツに言ったら・・・アイツは・・・。」

「分かった。父さん、その太刀は、兄貴に渡していいんだよね。」

「ああ。頼んだ。」

「それじゃあ、バイバイ。」

「楽しかったぞ。」

それだけ言い残して、父親は死んでいった。

「・・・雷斗おおおおおおおおおおおおおおおお!!
!!!!!!」

ついに兄貴がプツンして縄を腕力だけで切ってしまった

本当に人間なのか疑いたくなるが、とりあえず突っ込んでくる兄貴を止めるために雷斗君は矢を足元に打ち込み、怯んだすきに回し蹴りを打ち込み、気絶させる。

この後起きた兄貴をなだめたり、何だかんだしたのを覚えている。

これも、過去の夢・・・か。

始まり34 『孤児院』（前書き）

気に入らなかったので修正を加えて再投稿することにしました。

始まり34 『孤児院』

「っ……!」

目覚めは最悪とっていいだろう。

あの記憶は俺の中で一番触れたくないものであり、封印して、心の奥底に封じ込めたはずの記憶だった。

たぶん、あの弓を見たからだろう、手に入れたからだろう。

「こういう時は風呂にでも入ろう。」

この城にはどの部屋にも備え付けの風呂があり、ありがたい事に、いつでも入れるようになっていた。

ルナを起こさないようにそっとベッドを抜け出し、風呂場兼洗面所の場所へ入った。入るとすぐに汗で濡れてしまっていた着ていた物を全て脱ぎ捨て、風呂に浸かる。

本当は体を洗おうとも思ったのだが、そんな気にはなれず、とりあえず浸かってあがる事にした。

「お姉ちゃん？」

「あ、ルナ起きちゃった？」

そつと起きたのはいいが、ルナを結局起こしてしまったようだ。

「うっん、さつきから起きていたから大丈夫。」

「ちよつと待ってね、お風呂から上がったら朝ごはん作っちゃうからね。」

「うん、分かった。」

・
・
・

朝ご飯を食べながら今日の予定について話し合う。

「今日はターゲットの二人に会ってみるため、孤児院に行くからね。」

「ターゲット？」

「うん。目標とか、そういうものだけど、今回はあの鍛冶屋の少年が言っていた二人にあってみようと思っっているんだ。」

「うん。」

「その時、ルナも一緒に来てくれる？」

「分かった。」

この子は物分りがいいため、一つの事を言えば、7ぐらいまでは理解することが出来る。流石に10までは理解してはくれない。

因みに俺は1を聞いて1→10を飛ばして11→38ぐらいまでを理解する馬鹿を見たことがあるので別に驚きはしない。

つと、ルナが食事を終えたので、食器の片づけをしなければ…。

・
・
・

「ここが孤児院かぁ。」

俺たちの目の前に立っているのは小さな幼稚園のようなものである。今日ここには、ギルド側からの手伝いの派遣となっている。

これを聞いたときに孤児院の職員の中には疑問を持つものや、仕事が減ると小躍りしたものもいるだろう。

しかし事はそう簡単ではない。

ここの理事長は堅物で、仕事の放棄や子供たちを危険にさらすのをよしとしない。いや、するわけがない。この理事長をいかに説得するかが問題だろう。

「こんにちはー。」

入り口のドアを叩き、とりあえず声をかけてみる。

「はいはい。」

そっついながら出てきたのは、この孤児院の園長だった。

「えっと、ギルドから派遣されて来ました、ルナ、カンザキです。」

「ルナル・セイン・ファブリュートです。」

「ああ、連絡にあった……。今日一日お願いね。」

「はい、お願いします。」

そう言つて中に入つていくと、園長さんが中に向かつて、何か言つていた。

「今日は冒険者の人たちが来てくれましたよー！みんなおいでー！」
「わー！！おねえちゃん冒険者なのー！？」

俺に引つ付いてきた少年がそう叫ぶ。

その時俺の心のぐっさりと突き刺さる物があつたのは、間違いではないはずだ。

「そうだよ。私はルナ。あつちはルナル、あの子もルナなんだよ。」

「そうなのー？」

「うん。私はお姉ちゃんと同じ名前だよ。」

そう言つて子供たちに笑顔を向けるルナ。ルナも子供たちに囲まれていて、

「わー、おねえちゃん猫みたいな耳がはえてるー！！」とか、

「触らせてー！！」とか

「おんぶしてー！」

とか言われている。傍観しているような口ぶりの俺にその言葉は無かつたのかつて？あるに決まっている。既におんぶと抱つこと肩車を同時にやりながらも、足元に引つ付いている子供の相手をしているそれを続けていると、園長さんから、

「みんなー！中に入つて！」

と言われ、玄関のあたりで止まっていた俺達はやつとのことで中に入る事が出来た。

ルナが隣を歩いていたので、その耳元に口を寄せて、

「子供好き？」

と聞いてみると、彼女は首を縦に振つた。

子供たちが俺達に群がっている時、二人の子供が外れた所に居るのもちゃんと確認してある。

こんな感じで潜入活動は始まつた。

始まり34 『孤児院』（後書き）

ちよつと短くなつてしまいました・・・。

始まり35 『餌付けww』

教室のようなところが二つあって、その中で俺達は子供たちと遊んでいた。

俺が、ターゲットのいる部屋、ルナはもう一つの部屋にいる。

「おねえちゃん、おままごとやるー!!」

「つりしようよー!!」

「おんぶしてよー!!」

「だっこー!!」

「かたぐるましてー!!」

「くらえー!!」

「ぼうけんのおはなししてー!!」

こんな感じで、今俺の周りは凄いことになっている。

ちなみに、一番上のセリフの子はお飯事をしている数人の子の内の一人の子が言った。

二番目は、よく分からない材質だが、何かで出来た魚にヒモでわっかが作ってあり、釣り竿のほうには、針がついている。めちゃくちゃ危ないんだけど・・・。

三、四、五番目は勿論俺の足元に引っ付きまくっている子達が言った。

六番目はこれまたよく分からない材質で出来た剣を俺に叩きつけている子供が言った。ちなみにその剣あたるとかなり痛い。

そして最後のセリフは、同じく俺の足元に群がっている子が言ったセリフだ。

「じゃあ、みんな座ってー!!」

そう言って子供たちを座らせる。

「円になって・・・そうそうそう。其処の二人の子、ちゃんとこっちに来て。」

そう言って俺が声を掛けたのはターゲットだ。

二人はこっちに来る気がないようなので、女の子の方を抱きかかえ、男の子の方を背中に乗つけた。

そういえば言うのを忘れていたが、今回のターゲットの二人の子供は、双子であり、上の子が女の子、下の子が男の子である。という事が分かつている。親は生きているが、昔から何かおかしい所を感じ取っていたのだろう、この双子を孤児院に放り込んだ。最初はこの二人もみんなと仲が良かったようだ。しかし、あるときスキルがいきなり発動してしまい、二階となっていた所を破壊してしまったようだ。子供たちは最初はカッコいいと言っていたが、親が何かを吹き込んだのだらう、この双子に近づく子供はいなくなり、今ではこの二人が近づくと、避けるようになったそうだ。

俺が二人の子を抱えていくと、子供は若干俺から離れたようだ。

「よし、私が冒険のお話をしてあげよう。」

そう言っ言葉を始める。

「あそこの山を知っているかい？そう、何処にでもあるような普通の山で、出てくるモンスターはゴブリンや、人食い花、スライムなど、大きくなったら倒せるモンスターばかりだ。今の君たちじゃあ倒せないよ。倒してみなければ大きくなってギルドに入ってからにするんだよ。」

そこで一呼吸おく。

「まあ、大きくなれば倒せるモンスターばかりの山、私はそう思っで、山を越えた村に手紙を届けに行った。しかし、知っているかな？あそこには時々餌を求めてやってくるドラゴンが出てくることがあるんだよ。」

そう言っ少し前のめりになりながら話す。

「でもね、私はそれを知らずに、ドラゴンが出てきたとき逃げるための道具なんて持っていなかった。だからそのまま進んで行っただ。そして頂上まで着いたから休憩をしていると、後の方で何かが折れるようなバキッ、バキッ、て音が聞こえてきたんだ。何だろうと思っで、後ろを振り向くと、向うの方に赤い物が見えたんだ。よ

く見ようと魔法を使って見てみたらね、その赤いのは・・・ドラゴンだったんだよ。」

そこまで話すと、少し話を止める。そうすると、子供たちが騒ぎ出す。

「ドラゴンだつてー!」

「すごい。」

「ドラゴンって大きいの?」

「大きいよー。」

「知ってる?山よりも大きいドラゴンがどこかにいるんだつてー!」
一人の子供が自慢げの話すのを聞いて、そんな奴には会いたくねえというかいてほしくない^と心の底から思ったのは俺だけじゃあ無いだろう。

「ねえ、お話の続きはー?」

全員がキラキラした眼でこっちを見てくる。

「そうだね。続きを話そうか。そのドラゴンを唾然として見ていたらね。上が真っ暗になったんだ。だから上を見てみた。するとそこにはね・・・。」

ゴクリと子供たちの数人が生唾を飲む音がする。 リアル 実際に。

「もう一匹のドラゴンが居て、こっちを見ていたんだ。」

「うわああああ。」

キラキラした目でこっちを見てくる子供が半分。疑いの目で見ている子供が半分。

「ん?君たち疑ってるね?よし、証拠を見せてあげよう。」

そう言つて、ドラゴンの鱗である赤い物体を取り出す。

「みんなと会った記念として、これを皆にあげよう。」

小さめの鱗を選び出して子供たちに手渡していく。

「うわああああ。」

「これがドラゴンの鱗・・・。」

「かっこいいー!!」

「すごいー!!!!」

「さっすがおねえちゃんは冒険者だね！！！！」

女の子は鱗の綺麗さに驚きながらも見つめていて、男の子は本気で感動している。

ちなみにドラゴンの鱗から不純物を取り出す魔法（それ以外の用途のない屑魔法）を使って、ドラゴンの鱗はきれいに輝いている。

全員に餌付けが終わって（もちろんターゲットにも）満足そうに俺は微笑んだ。

同じ部屋に居た孤児院で働いているお姉さんの顔が引きつっていたが、別に気にしないことにした。

始まり36 『孤児院戦闘』

あの後お話しもしっかりして、自己紹介をしてもらうことにした。

「私は知つての通り、ルナ・カンザキです。よろしくね。」

俺が自己紹介をすると、次は左側に座っていた子が自己紹介を始める。

「私はハンナ、ハンナ・スタッドです。」

「俺はカイン、カイン・アルソートだぜっ!!」

そうして、一週回つてきてターゲットの子の番になった。

「私は、カナ、カナ・アルステイル。」

「僕は、セイン、セイン・アルステイル。」

「よし、みんなの自己紹介が終わったし、何して遊ぶ？」

「おねーちゃんは魔法を使えるの？」

「使えるよ。」

「見せてー!!」

キラキラとした目で、みんなこっちを見てくる。

「ちよつと待ってね。」

安全で、全員に危害が及ばない魔法を考える。

「『光よ、我が手に集まり、翡翠の色となり、全員を照らす蝶となれ光の蝶』
ライトバタフライ」

魔法を唱えると、光が手に集まり、いくつもの蝶を生み出していった。

「わあ。」

「きれい・・・。」

その蝶はひらひらと舞い、全員を包み込むように動く。

「どうかな？」

「おねーちゃんやっぱりすごい!!」

「きれいだあ。」

セインやカナもうつとりと見つめている。

そこで悪戯を思いついた俺は、蝶に少しづつ魔力を込めていく。そして、蝶を全員の掌に載せた。そこで俺は、指を鳴らした。すると、蝶は弾け飛び、光を撒き散らした。蝶を爆発させたときに、数人は驚いて尻餅をついたが、殆どの子供はそのまま光を眺め続けていた。

・ ・ ・

「そーれ。」

一人の子供を捕まえて、高い所まで上げて、降ろす。

背中にくっ付いている子供は私の耳を触りまくっている。しかし、それを気にしていると、他の子供たちが騒ぎ出すため、どうしようもなかった。

「おねえちゃんは魔法を使えないの？」

一人の子供が最初のほうに、私にこの質問をした。この質問で、軽く心がズタズタになったのは言うまでもないだろう。

私、ルナル・セイン・ファブリュートは、残念ながら魔法を使えない。お姉ちゃんは、「私ができるようになる方法を探すから。それまで我慢して！」と、言ってくれたが、私が魔法を使える事は無いと直感が告げていた。

「おねーちゃんどうしたの？」

考え事をしていた為、ボーっとしてしまっただようだ。子供たちが、心配そうにこつちを見つめてくる。

「何でもないよ。」

そう言っただ笑顔で、子供たちに答える。

「さて、次は何をしようか？」

・ ・ ・

「そーれっ！」

子供たちは今、絶賛浮遊中だ。

俺が範囲にかける魔法を使って、子の部屋の重力を殆ど無くした。そこで、ボールを投げたりして遊んでいる。

「わー！！！！！」

飛んだり跳ねたりと、子供たちは大忙しだ。

そんな光景を微笑ましいと思いながら眺めていると、違和感を感じた。

この感じは・・・魔力？いや、弱いけど魔法だ！しかも攻撃の意思がある！！

「『盾よ、我らを守れ！！』」

一番詠唱が短く、強度も弱いが、あの程度も魔法なら防げるだろう。

「クソッ。何だつてんだ！！」

そう思い外に出ようとして寸前で止まる。

また魔法か？しかもこれは方陣魔法だ！！

「みんな伏せてっ！！」

そう叫び、魔法を解除する。

この場で攻撃されているとの理解が出来ているのは俺だけ、隣りの部屋にはルナがいるが、この攻撃に気が付いているか分からない上に、気が付いていても何もできないことを思い出し、全体を守る事にした。

「クソッ。広範囲すぎてこのまんまじゃ対応が追い付かない！」

そう思い、近くにいた先生に、この部屋の子供を隣に連れて行くように指示する。

「で、でも・・・。」

「いいから早く！！」

状況の判断の出来ていない先生は、俺の気迫に押されて、子供に指示を出し始める。

「状況を判断できない・・・。」

出来れば子供たちから離れたくないけど・・・。

この状況を打開するために、ドアを蹴破り外に出た。

すると、外にいたのは仮面に黒い服の、いかにも怪しい人たちが立

っていた。

その人たちは、俺を見た瞬間に逃げだした。

それを疑問に思い、中に戻ろうとすると、地面が光った。

「方陣魔法の発動が今かよっ！」

心の中で毒づきながらも、園内に飛び込もうとするが、魔法の発動のほう及早かった。

その光は、孤児院を満たして消えて行った。

光が眩し過ぎた為、閉じていた眼を開くと、孤児院は紫の気持ち悪い物体と化していた

始まり37 『スライムの館』

「何だこりゃあ・・・。」

目の前に広がる紫色の物体。元々孤児院だった所に、薄く紫のスライムを塗ったかのような状態だが、中の孤児院は勿論見えず、しかもただのスライムだったらしいのに、気持ち悪い奇声を時々上げる口があちこちについていて、こちらを見るわけでもない、何処を見ているのだから分からない虚ろな感じのくせに、ぎよろって効果音が聞こえてくる感じがしそうなほど見開かれている目が付いていたり、趣味の悪い物になっている。

「魔法発動後にこれか・・・。これは魔法と関連して何か起きたと見るべきか？例えばあの魔法は目くらましだったとか、それ以外だとこれを作るのに魔法を使ったというぐらいしか思い浮かばないのだが・・・。」

とりあえず入り口だった所に近づくと、驚くべきことが起きた。

「『アハハッ、楽園の入り口によろこそつ、死にたく無いという臆病者は帰りなっ！！死んでもいいっていう無謀なものは大歓迎だぜっ！！』さあ、貴方はどっちなかな！？入りたければこの門の中に進みなっ！！臆病者は帰って布団にでも包まってるといいよっ！！」

「人型で、先ほど家に付いていた口と目が顔と思われる部分に付いているスライムが現れて、喋っていたのだ。」

「気持ち悪いな・・・。でも、この中にあの子達がいるなら臆病者だとしても入るしか道は無いね。」

そう呟きながら、門の中に進んだ。

・
・
・

「くっ・・・！」

子供たちに怪我をした子はいないようだが、先生の中に子供を庇って怪我をした人がいるようだ。

「大丈夫ですか!？」

怪我をした先生に近づいてみると、崩れた孤児院の破片が刺さっているようだ。

孤児院は崩れ、今周囲に広がっている紫のスライムに吸収されてしまった。気味の悪いスライムには、眼と口も付いていて、そのせいで怖がる子供が多く居るが怪我人は少ない。崩れたところにいたのに怪我人が少なかったのはスライムが全部崩れた孤児院の破片を吸収してくれたおかげだ。それでも落ちてくるのはあつたわけで、かすり傷を負っている先生は少なくない。しかし、今すぐの処置が必要なのはこの先生だけのようだ。

「ちょっと痛いかもしれませんが、これを噛んでいてください。」

そう言つて、手を拭くために用意しておいたハンカチ（お姉ちゃんがそう呼んでいた）を噛んで貰う。

お母さんが治療について一通り教えてくれていたので何とかかなると思う。

ハンカチを噛んで貰ったのは、舌を噛み切られないようにするためだ。こういうのを抜いたり、手足を切断するとき、痛み止めの魔法を使わないと、あまりの痛みに舌を噛んでしまう人がいるらしい。

自分がやった訳ではないので何とも言えないが・・・。

兎に角、刺さってしまった破片をゆっくりと慎重に抜いていく。あまりにも痛いのか、この先生の顔がかなり歪んでいるが、一気に抜いてしまうと危ないので、慎重になつてしまうのだ。

「ふう、やっと抜けた。」

抜けた破片を置き、自分の着ていたワンピース（お姉ちゃんがそう呼んでいた。）の端のほうを切り取つて、先生の足に強めに巻きつける。

「大丈夫ですか？」

かなりの激痛だったはずだ。しかし、この先生はとても強い。しっ

かりとした顔で頷いた。

「お姉ちゃん……。」

この部屋から出て勝手に動き回るのは危険と判断し全員を同じ部屋に押し込んでいる。最初にちよつと外に出たときは、壁から触手の様な物が出てきて攻撃されそうになったので、外に出るものはいない。しかも元の孤児院の作りとは全く違った形になってしまっている為、触手を突破できても道に迷ってしまうだろう。

「お姉ちゃん……。」

唯一の希望である、自分の命の恩人呼び続けながらも、自分の出来ることである治療の手は休めない。そうでもしないと気が狂ってしまうだろう。

それでも助けを信じながら治療を続けていく……。

・
・
・

「おりゃあ!!」

炎を纏わせた大剣で触手を叩き切って行く。

魔法を使ってしまうと、子供やルナ達がいる部屋ごと爆破してしまう、なんて事が起きかねない。それを防ぐため、炎を纏わせた大剣で戦っている。

そのままの大剣の攻撃では跳ね返されることは無くても、一本一本を切るのに時間がかかりすぎる。だから炎を纏わせて、炎で焼いたところを一気に大剣で切ることにした。

「きりが無い……。」

ドアと思われる場所はどんどん空けて行っているが、誰一人として見つからない。同じ部屋に固まっているだろうから、個別に見つかっても困るのだが……。そんな中ドアを開けると、子供や先生、ルナがいる部屋が見つかった。

「皆!!無事だった!?!」

「おねえちゃあん!怖かったよお。」

始まり38 『能力と魔法』（前書き）

始まりなげえよとか最近思い始めました・・・。
そろそろ終わるように努力します

始まり38 『能力と魔法』

隣の部屋に駆け込んだとき、カナとセインは部屋に押し潰されそうになっていた。

「クソッ!」

魔法を使っている間は間に合わなくなるため、魔法を使わずに突っ込む。

しかし、打撃系では跳ね返されてしまう。このままでは助けることが出来ない。

「クソッ、如何すればいい、如何すればこいつ等を助けられる?」

そこで思い浮かんだのは、魔法の歴史についての本だった。

買い物をしたときに買った本の一つで、今読んでいる本だ。その中に、過去の賢者や勇者の中には魔力をそのまま具現化できる人がいたらしい。

「やるしかない!」

魔法を初めて使った時からずっと感じていた何かが流れ出すような感覚、それを自分の意識で行い、掌に集めていく。

「出来た・・・。」

確か魔力には人それぞれ色があってそれを見ればその人の性格が分かっちゃうとか言ってた本があった。かなり胡散臭いけど・・・。
俺の掌に集まった魔力は碧色をしていた。

「まずはこれをぶち込む!」

潰そうとしている壁に対して魔力の弾をぶつけて道を作る。

次は魔力を身に纏い突進していく。

「おりゃあ!!」

両手に魔力を多く込めることによって、両手に剣を形作る。その剣を使って壁を切りながら、子供たちに近づいていく。

「大丈夫か!」

カナのほうは無事なようだ、しかし、セインのほうが・・・。

「ルナ、終わった？」

「終わった。」

「この子の治りが遅すぎる。どういつ事だと思う？」

「多分だけど能力持ちだからだと思う。」

「どういつ事だ？」

「能力は本来魔法と反発し合うものの筈なの。お姉ちゃんは何でか知らないけど両方使えるけど・・・。」

「成る程。なら能力を取り除いてしまえば・・・。」

「如何する気？」

「ルナの能力を使えば移せる筈。」

「誰に移す気？」

「私が一時的に預かる。この子が治ったら返してあげればいい。」

「そんな事したら！！」

「そんな事したらどうなるの？」

「・・・多重能力は危険物です。」

「・・・爆弾ですか？」

「反発し合う能力、たとえば水と炎などを持った場合、体内で反発し合った能力によって体のほうが持たなくなってしまうんだよ。」

「へー。」

水と炎・・・爆弾だ。

「大丈夫。私がそう簡単に死ぬと思う？」

「でも・・・。」

「今迷ってこの子を死なせる気？」

「っ・・・。」

「早くして、時間が無い。」

「どうなっても知りませんよ！！」

そう叫ぶように言って、ルナが作業に取り掛かる。

セインの胸のあたりに手を当てて集中しだす。

俺は邪魔にならない様に移動して、ほかの場所から襲われないように注意をしながらセインに止血の魔法をかけていく。

「行くよ。」

そうルナが言ってセインの胸から離れた手には白く輝く球体状のものがあつた。

始まり39 『爆塵』

「それが能力^{スキル}？」

「うん。固定化して分かりやすいように形にしてみた。本来見えな
いはずの物なんだけど私の力を使えばこんなものかな。」

「凄い……。えらいよ、ルナ。」

頭を撫でてやると気持ち良さそうに眼を細めていたが、今の状況を
思い出し、手を払いのけた。

「早くしないとこの子が！！」

「大丈夫、治療はずっと続けているから。確かに能力^{スキル}が無くなって
からは治りが早い。既に治すのはかなりの部分まで進んでいる。胸
の辺りの骨やらが突き刺さってしまっていたのは抜いて元に戻して
突き刺さった所の穴は塞いだし、頭の方の頭蓋骨は元に戻ってる
し血管は塞いだ。ここからはすぐに終わるだろう。ルナは私に移す
準備を。」

「……頭蓋骨？血管？」

ああ、そうだった。こつちの人じゃ分からないか……。

「なんでもないよ、ルナは移す準備に集中して。」

「……分かった。」

「セイン、君を死なせるわけにはいかない。全力で行く！！」
今自分に出来る最高の治癒力の魔法を放ち続ける。

「よし。粗方治ったかな？」

傷は無くなって、右目で見た限りでも異常は見られなかった。しか
し、血をかなり失っていたのが心配な所だ。

「こつちも終わったよ」

ルナが準備を終えたようだと話しかけて来る。

「……お姉ちゃん。」

「何？」

「治療が終わったならこの子に能力^{スキル}を戻しても大丈夫じゃないの？」

「それがねえ、今この子の傷は塞がってるけど、そんなにしっかりと閉じているわけじゃないんだよ。中の重傷のほうに大きく力を割いたからあんまり力が残っていなくてね、自然治癒力を上げる魔法を掛けておいたけど、それを弾かれて傷口が開きでもしたら、もう私に出来ることは無い。だから今能力^{スキル}を戻すわけにはいかない。」

「そう・・・。」

「早く、逃げる時間が無くなっちゃう。」

「分かった、そのままじっとしててね。」

そう言っつて、ルナは俺の後ろに回りこんで俺の背中に手を当てた。すると、とんでもない激痛が俺の体を走った。

・
・
・

「何なの？あの人達は？」

あの子達が忌み嫌われた子供だっというのは見ていてわかっているだろう。

その子達を命がけで助けようとしていたり、それ以前に今日初めて知り合った筈の私たちの為に命をなんでかけられるの？

何故？何故？何故？

私の中には疑問しか生まれない。この世界で生きていく上で普通の人だったらほかの人間を助ける余裕などあるだろうか、いや、無いだろう。しかし彼女はほかの人を助ける余裕まである。

彼女は何者なのだろうか？

疑問、不安、恐怖、負の感情が押し寄せてくる。

知らない事に恐怖する。

彼女達冒険者について何も知らなかった。無償で手伝ってくれと言っつから手伝ってもらおうと簡単に考えていたが、甘い考えでいたが駄目だった。

甘い、甘すぎる。

彼女たちを見ていて自分の甘さを思い知る。

「貴方たちは何故そんなに強いのか？」
そう呟かずにはいらなかった。

・ ・ ・

「ったあ！」

「よくそれで済ませるね？」

呆れ顔でこつちを見てくるルナのセリフを無視して言う。

「ここから出ようか？」

「そうだね。」

ルナの許可も出たので皆に呼びかける。

「みなさん、今からここを出ます。ついでにこの孤児院を破壊します。いいですかあ？」

「いいで・・・駄目でしょっ！！！」

軽いノリで言ったので乗ってくるかと思ったんだけど・・・。

「大丈夫。後でこつちで建て替えておく。」

ルナの補足説明。

「で、でも・・・。」

「こつちとしてはさつさと出たいし、壊すのは私だから建て替えに何か異議をはさむ余地は無い。建て替えるのに困らない伝手もあるから金銭面がどうたらこうたらは心配する必要性もない。分かった？」

それでも納得していない人もいるようなので強制発動。

「ルナ。」

「何？」

「多分これを撃つたら私は倒れるかフラフラになると思う。だから後はお願い。いざとなったら兄ちゃん馬鹿の名前も出して力を借りていい。分かった？」

「うん。」

止めても無駄なことは分かっているのだろう。ルナは大人しく引いた。

そこから三十秒もかかる詠唱を行う。

「これが最大威力の！！爆塵^{エクスプロージョン}」

周りが焼け野原になったのを確認した後、俺は意識を手放した。

閑話 3 『過去の記憶3』（前書き）

最初はシリアスとコメディーを4：6やら3：7にしよつと思つたのですが、最近0：1：9：9みたいになつてきてる気がします・・。

頑張つて当初の目標に近づきたいと思いますw

閑話3 『過去の記憶3』

「今時使う武器が弓ですか。」

「だから銃とかの使い方を教えてって頼んでるんだけど。」

暗い。ここは何処かの地下だろう。小さな明かりが点滅している。

「いいでしょう。どの武器を使ってみます？」

そう言つて男が指差した先にはいくつもの武器が棚に整然と並んでいた。

「これとこれ。」

少年が手に取つたのはスナイパーライフルとマシンガンだった。

「随分とまあ小難しい武器を取りましたね。」

「まあまあ、いいじゃん。」

「じゃ、射撃練習してみますか。」

「はい。」

いくつもの的が現れる。それに対して少年はスナイパーライフルを構えて応戦する。

「ほう。」

隣に立っていた男が感心したような声を上げてくる。

「こんなもんかな。」

的は殆どが真ん中を打ち抜かれている。

「その武器だけでも充分戦えるのでは？」

「駄目だよ。これは完全に遠距離専用だ。だからもう一つの武器がマシンガンなのさ。」

「どういう事ですか？」

「マシンガンは中距離でも充分なけん制になる。近距離なら相手を蜂の巣にする事が出来る。」

「なるほど。」

「こうやってな。」

少年は片手のマシンガンを持ち乱射する。

ある程度撃ったところでもう一方の手のスナイパーライフルを打ち込む。

「片手でスナイパーライフルとマシンガンの衝撃を殺すとか貴方は本当に人間なんですか？」

「失礼だなあ、俺はれっきとした人間だぜ？」

「そうとは思えないんですけど・・・。」

「で、俺を呼び出した理由は武器についてだけじゃないんだろう？」

「そうですね、流石察しがいい。」

「で、何の依頼だ？」

「暗殺ですね。」

「誰のだ？」

「最近大きくなり始めた暗部組織、ラインという名前の付いた組織のボスです。」

「ライン、線ねえ。」

「自分達は死と生の境界線だ、とでも言いたいんじゃないですか？」

「ハッ。馬鹿は死なねえと直らねえからな。」

「そうですね。」

「そのボスの名前は？」

「江田島吾郎君です。」

「さあて、本当の暗部を見せてやろうじゃねえか。」

「バックアップは必要ですか。」

「一人だけ頼む。敵位置の指示と逃走経路を頼む。」

「分かりました。」

「さあて狩りの始まりだ。」

「？」

隣の人にさえ聞こえない小さな声で呟いた。

・
・
・

「ターゲットは？」

「今いるビルの隣の民家にいます。」

「民家だと？」

「ええ、暗部で儲けた金で最近作ったようで、防弾、音の遮断、赤外線などの仕組みがいっぱいですよ。」

「ふうん。」

銃弾を窓に打ち込む。

しかし、ヒビどころか傷も殆ど付かなかった。

「これは厄介だな。」

「如何しますか？」

「招き入れてもらう。」

「どうやって？」

「今から言うものを十分以内に用意してくれ。」

・
・
・

「宅配便です。」

「はいはい。」

古典的だが、割と効くこの作戦。

「江田島吾郎さんでよろしいでしょうか。」

「はい。」

「ハンコかサインをお願いします。」

「ハンコを持って来るんで待っててください。」

ターゲットが見えなくなると、ドアのチェーンを切る。

そして中に入り込み、銃を片手に持ちターゲットを待つ。

「お待たせしましたって……。」

「ま、こっちも仕事なんで。」

そう言つて銃を構え、頭を打ち抜く。

「じゃ、天国に行けることを祈つとくんだな。」

そう言い残して、家を去る。

最近昔の夢が多い。
ホームシックにでもなっているのかなあ。

始まり40 『悪乗りしてはいけません』(前書き)

ノリで書いてしまった・・・。
後悔はしていても無いww

始まり40 『悪乗りしてはいけません』

眼を開けるとすぐに飛び込んできたのはルナの顔。

「あ、起きた！！」

「本当か？」

「うん。」

その後聞こえた声は兄貴^{馬鹿}の声だろう。

「大丈夫ですか？」

奈菜さんの声もする。

何で近くに居たルナの顔以外は声だけの状態かって？

意識がハッキリしなくてばやけているから体が思うように動かないんだよ。

「魔法を使いすぎた反動はこの程度じゃ治らないし、まだ寝かせておくべきだと思うわよ。」

桃香先輩、その通りです。もうちょっと寝かせてください。

「そうですね。」

納得したのか、奈菜さんが部屋を出て行く音がした。

その音を最後に、俺の意識はしばらく深い所に落ちていった。

・
・
・

「ふああ。」

体を起こしてみると、既に夜中を通り過ぎて、朝に近づいていることが分かった。

「あと一時間ってとこかな。」

その一時間を考え事に費やしていたら、一時間ではすまず、一時間三十分ぐらい使ってしまった。

椅子に座ってベットに倒れこんでいるルナも起きたようだ。

「うーん。」

「おはよう。」

「お姉ちゃん！もう大丈夫なの？」

「うん。心配掛けてごめんね。」

「よかった。」

「さて、朝ごはんにしようか。」

・
・
・

「お願いします！！」

えーと、目の前には、自分のドレスのスカートを捲り上げて口が閉じきつていない残念な美人の女性が一人……。

俺の口は、将来は綺麗な女の人になるだろうと思われる黒い猫耳少女の唇で塞がっている……。

何でこうなっただけ？

〈回想開始〉

コンコン

「開いてるんでどうぞー。」

朝ごはんを食べ終え、ルナに兄貴と桃香先輩に起きたという報告をしてもらうため、手紙を渡して行ってもらった。

え？自分で言っただけで口頭で伝えたほうが早い？今俺は魔力が殆ど空の為、動くのも面倒なんですよ？

まあ、そこは置いておいて、入ってきたのは、ファミール様だった。

「あ、ファミール様。」

「きちんと正面から向かい合って貴方と話すのは初めてよね。」

「そういえばそうでしたね。」

「私の名前はファミール。ファミール・エイトランス・ラクサスといます。」

「私の名前はルナ、ルナ・カンザキです。」

「聞いてるわ、だから普通に喋っていいわよ。」

「普通、ですか？」

「そう、君が男だって知ってますから。」

「そっか、じゃあ隠す必要も無いな。」

「改めて、俺の名前はライト、ライト・カンザキです。」

「宜しく。じゃあ、本題に入っていいかしら？」

「何ですか？」

「私を囲って下さい。」

「・・・はい？」

いきなりの爆弾発言に俺の脳内はフリーズしどうでもいいことを考えていた。

最近爆弾多いな・・・。

「私を妾として囲って下さい。」

「・・・いきなり何故？」

「新しい国王が現れた今、前国王の娘など要らないのです。」

「はあ。」

「だから、今までの人も同じように勇者様や国王様の妾になってきたのです。」

「今までって、今まで召喚されてきた国王の娘の事？」

「はい。」

ここで妾という感覚のわからない俺は現実味をもっておらず、非常識な事を口走った。

「・・・じゃあパンツ見せて。」

「はい？」

「下着見せて。」

ちよつと悪乗りしてしまったのだ。

それを律儀に行ってしまったファミール様、そこに現れたルナ様。

「あ、あ、あ・・・。」

「い、いや、誤解だ!!!」

「自分で見せろと言ったではないですか。」

その状況を見たルナはとんでもない行動に出た。

「おねえちゃんは渡さない!!」

飛び付いてきて、唇を合わせてしまった。

なんでこうなった・・・。

く回想終了く

「すいませんでした。」

ルナの束縛から離れた後もちろん俺は土下座をして謝った。

そのあとこつてり絞られたのは言うまでもないだろう・・・。

始まり41 『旅の準備』

ファミール様には、妾の案を取り消してもらい、冒険者になってもらう事にした。

冒険者なら自分の生計を立てていくのも難しくないだろうという判断の上だ。ファミール様は魔法がお得意だそうなので、変な男に引っ掛けられることが無ければ、きちんとした前衛役を見つけてバンバン活躍できるだろう。

なので、ファミール様にはルナと一緒に冒険者の登録をしに行ってもらった。

ついでに言えば、ルナにはナイフを取りに行つて、セインとカナを見せてやって来いつて言つてあるからルナとセインも同行していると思う。この二人にも身分証明として冒険者にさせる事にしてある。俺？俺は今兄貴とお話中ですよ？

「雷斗、何のようだ？」

「そろそろ動こうと思います。」

「そうか、だが、いいのか？」

「桃香先輩は今日魔法国に行った。俺もそろそろ動くべきかと思ひましてね。」

「そうか、そう言うと思つて勇者の影武者役は用意してあるけどな。」

「用意がいいですね。」

「いや、変身の魔法が得意な奴がいてな、そいつに、人前に出る時はお前に変身してもらう事にした。勿論給料は弾んでるぜ。」

「そっか。なら安心だ。」

「お前がいてくれれば問題無いのに。」

「理不尽にこの世界に放り込まれたんです。勇者の仕事も真面目にやりますけどそれ以前にこの世界を楽しませて下さいよ。」

「ま、お前がこの世界が楽しいと思つてくれれば魔王討伐に全力を

尽くしてくれるだろうから良いんだけどな。」

「そういえば魔王ってどんな奴なの？」

「最初のほうは百年に一度代わっていたらしいんだけど四代目の勇者からは代わっていないらしい。しかも人間だっという噂がある。」

「人間にしては長生きすぎないかい？」

「そうだよなあ。よく分からん。」

「じゃ、俺はこれで。」

「おう。」

「あ、言い忘れてた。」

「何だ？」

「ルナは連れて行きますね。」

「分かった。」

「理解が早くてありがたいですね。」

「何も理解して無いけど、お前は無関係に人を巻き込むことは無い。ルナちゃんは何かに必要なんだろう？」

「そうですね。」

「後は、あの二人は如何するんだ？」

「カナとセインですか？」

「ああ。カナは連れて行きます。セインはこっちでリーダーとして生活してもらおうと思ってます。」

「冒険者登録したのか？」

「ええ。全員。ちなみにああいう人間が増えますんで奈菜さんはそっちに回してください。給料は俺から送金しておくんで奈菜さんに払わなくても大丈夫です。」

「そうか。そういえば冒険者って一ヶ月に一定数クエストクリアしないといけないんじゃないんだっけ？」

「その辺はテイルと一緒にですから。簡単な抜け道を使いました。」

「あの抜け道は態々使う奴もいなかったよな。」

「経験地は全く入らないですからね。あ、もう一つお願いしていいですか？」

「何だ？」

「セインとかがこれから増えるんで、部屋の確保ともう一つ、訓練を行なってやってください。」

「訓練？」

能力スキルの事は兄貴には話してある。そして、俺が考えている事も。

「近接戦闘、弓や銃による遠距離戦闘などの訓練です。」

「ああ。そういう事かあ。」

「ええ。そう言う時にこそ使える能力スキルもありますからね。」

「分かった。」

「魔法は使えないんで訓練しないでいいですよ。」

「任せておけ。」

「じゃ、俺はこれで。」

「もう行くのか？」

「ギルドに行つて抜け道の準備をしてきます。」

「そうか。じゃあ、またいつか会えるといいな。」

「俺も行く前ぐらいいは挨拶しに来ますよ。」

「じゃあ元の世界の金で五百円賭けてやるよ。」

「乗った。俺が挨拶に来たら五百円下さいよ。」

「その代わり来なかったら、帰つて来た時に寄越せよ。」

「分かった。じゃ。」

「おう。」

・ ・ ・

ギルドで抜け穴の準備を行なっていたら、ルナたちに出くわした。ファミール様が問題になり、時間がかかっているそうだ。

「何処にいるの？」

「ギルドマスターの部屋。」

「行ってくる。」

「行つてらっしゃい。」

その後、ギルドには、叫び声が響き渡った。

・
・
・

「ふう。準備できた。」

「お姉ちゃん。ファミールさんも出来たよ。」

「お、分かった。後の二人のは終わってるんだろ？」

「うん。」

「じゃ、ファミール様、いい前衛役を見つけて頑張ってくださいね。」

「え？私は雷・・・瑠奈さんが連れてってくれるのかと・・・」

「何で？うちには前衛役まだいないし駄目ですよ。」

「駄目・・・なの？」

うつ、涙目・・・。

この人も結構な美人なんだよ。髪の毛はアメリカ人のハーフだったお父さん譲りなのか金色。眼の色はお母さん譲りなのか空色みたいな青なんだよ。

美人さんの涙目とかマジで威力高すぎる。

「分かりました！！分かりましたから、泣かないで下さい！！」

「連れてってくれるの！？」

「分かりました。連れて行きますよ。」

「やったー！」

「やったね、ファミールさん。」

ルナとファミール様仲良くなりすぎ・・・。ハイタッチとかしてるしね。

旅の仲間が増えてきた。

始まり42 『エスパー?』

「そついえばお姉ちゃんは何をしていたの?」

「ん? 抜け穴製作かな。」

「抜け穴?」

「うん。ちよつとした工夫をしたただけだね。」

「ふーん。」

特に抜け穴が何かとか聞いて来ない所がルナはいいね。

「おーねえーちゃん!」

ん?

「ぐふうっ。」

何かが後ろから来たようだったので後ろを振り向いてみると、まあ、一人の少女が突っ込んで来たんですよ。

待ったって言うてんでしようが、無視すんなやゴラァ!!を食らった力●ジョーさん張りの吹っ飛び方をしてしまった。

「あ、カナちゃん。」

いやいやいや、あ、カナちゃんじゃないですよファミールさん(ファミール様は堅苦しいし旅の仲間なんだから呼び捨てがいいと主張して来たが、流石にすぐに変えられるわけでもないののでできるだけ敬語を減らしていつてファミールさんと呼ぶ事になった。)助けて下さいよ。地面と少女のサンドイッチって意外と痛いんですよ?少女の重さがありますし?

「ゴフツ。」

「今失礼なこと考えたでしょう。」

殴られた、というか貴方はあれですか?エスパーですか?

「ちなみに私は心を読む能力を持っている訳じゃないですからね。」

・・・本当かよ?

「そんな疑いまくってますっていう感じが全開の眼で見られても・・・。」

「あれ？顔に出てた？」

「出てましたね。」

「ファミールさん、フォローを、SOSです。」

「自力で何とかして下さいね。」

「・・・エスパーですか？」

「・・・言つて置きますけどそんなに助けを求めた眼でこつちを見ていたら誰でも分かりますからね。」

「・・・そういう事ですか。」

少女を、いや、カナをと言うべきだろう。まあ、そこは置いておくとして・・・。

カナを無理やり引き剥がして降ろすと、なんかよく分からないけど抗議の眼で見られたのでとりあえず肩車をしてあげる事にした。その時ルナが羨望の眼差しでカナを見ていたのは見なかった事にする。

ん？何で見なかった事にするか？この後起こりうる事を察してくれ・・・。

「で、如何したの？カナちゃん。」

俺に肩車をされているのにカナちゃんと目線の高さがちょっとしか変わらない・・・。

最近心に突き刺さるものが多いな・・・。

「あのね、ルナお姉ちゃんが私の事置いて行っちゃったから追いかけて来たらお姉ちゃんが見えたんだ。だから飛び付いたの。」

何で飛び付いて来たのかはよく分からなかったが、ルナが置いてきてしまったという事は分かったので、ジト目を向けてみる。

「・・・ご、ごめんなさい。」

「大丈夫だよ！！」

おお、この子は俺達の良心になってくれそうだ。

「・・・あれ？」

「セインは？」

「先にお店に行ったよ！！」

「そう。ならいいか。」

忘れていた事をちよつと申し訳なく思いながらもセインが居るはずのお店に行くことにした。

・
・
・

「こんにちわー。」

「セインー！本当によかつたあ。」

お店に入つてみると、誘拐されたのでは？と心配をしていたセインが武器屋の少年と感動の再会をしているところだった。

「こんにちわー。」

一応再度呼びかけてみる。

「い、いらつしやいませー！！つてカナー！！」

「ただいまー、ガルク。」

肩車していたカナを降ろしてあげると、カナは少年（ガルクというらしい。今初めて知った・・・。）と感動の再会をはたした。

別に生き別れになっていたわけでも無いんだから感動とか無いし、いつでも会えていたんだから再開でも無くな？と思つても口に出さないのがいいだろう。しかしここにはエスパーが多いからばれていゝるかもしれない・・・。

「冒険者さん。この二人を助けてくれて本当にありがとうございます！したー！！」

「いえいえ。こつちとしてもセイン君とカナちゃんは必要なんですよ。」

「そうなんですか？」

「そういえば私達冒険者になつたんだよー。」

いきなり何の脈絡も無いところから話を出来るのはある一種の才能ですよ、これは。

「そうなのか？」

「カナちゃんが言つてゐることは正しいよ。」

「何でカナやセインを冒険者に？」

「ま、色々あるって事で納得して下さい。」

「ん、そうですか……。」

あまり納得して無いようだが、しょうがない。今はこれで納得して貰うしかないんだから……。

「そういえば、ナイフは出来た？」

「出来ましたよ！！ちょっと待ってて下さい。」

おやつさん。と言いながら奥に入っていくガルク少年。

すると、ガルク少年がナイフを持って帰ってきたのはいいのだが、後ろにいる人間が問題だった。

いくつもの刀傷があるごっついおっさんが出てきたのだ。

「お前があの人を助けてくれた冒険者か？」

「そうです。」

この人となると、コンプレックスがさらに目立つ……。

「あの二人を助けてくれて本当に感謝する。」

「あ、あの、顔を上げてください。そんなにされると此方も話し辛いですし……。」

これは本音だ。

「そうか。では私たちの話を聞いてはくれないだろうか。」

「いえ、いいですけど。」

こうしてよく分からない内におっさんと話す事になった。

始まり43 『メイドさん戦闘術・・・?』 (前書き)

お盆になるので二日間ほど休ませていただきます
ご迷惑をおかけしますが、これからもよろしく願います

始まり43 『メイドさん戦闘術・・・？』

「この子達はな、俺の子供だ。」

「「「え？」」」

おっさんの話は驚くべき所から始まった。

「実の子供ではない。知り合いが預けていったのだから・・・。」
そこから先はあまりカナ達に知られたくない会話のようだ。

「ルナ、あの子達と外で買い物をしてきて。」

そう言つてルナにお金を渡す。

ルナも察していたようで文句も言わずにあの子達を連れ出してくれた。

「ありがとう。」

「いいえ、続きをお願いします。」

「分かった。あの子達の両親は冒険者だったんだ。それ以外の生き方を知らないから、と言つてあの子達を俺の所に預けて金を稼いでいたんだ。だからあの子達にとってここは家のようなもので、俺も親のような存在。弟子のあいつも三人目の兄弟のように過ごしていたんだ。あの子達の両親は悪い奴ではなくてな、精一杯やっていたんだ。しかしある日、ギルドに任された依頼を行なうつて言つて、帰つてこなかった。」

「ギルドに任された依頼？」

「ああ、炎龍ドライアスの討伐だ。」

「炎龍ドライアス・・・。名付きの竜の討伐つて二人で行ったんですか？」

「いや、あいつ等の所属していたグループのメンバー全員で行ったらしい。」

「てことは・・・。」

「ああ、全滅だ。」

「そうなんですか・・・。」

「その後なんだがな、俺があの子達を育てていたんだが、あの二人はもう迷惑をかけられないと言って孤児院に入っちまったんだ。」
「なるほど。」

「その後もちよくちよく来ていたんだが最近の色々あったから来ていなくてな、そうしたらガルクの野郎が苛めにあってるらしいという情報を持ってきやがった。それを如何しようと考えていた所であんな達が助けてくれた。」

「私達は苛めに関しては何もしていませんよ？」

「いいんだよ。あんた達のような信頼できる人間が見つかったって事であの子達は救われた。それでいいんだ。」

「そうですね。しかし私達はあの子達を冒険者にしたんですよ。この世の中で一番危険な職業に。」

「あの子達の親も冒険者だぜ。その血が流れているという覚悟は既にしてある。」

「そうですね。」

「ほれ、注文のナイフだ。それと、これを持っていってくれ。」

「そう言っただけ渡されたのは三つの剣。」

「これは？」

「俺に出来る最高の素材で最高の技術を詰め込んだ剣だ。一つはあんなに、残りの二つはあの子達に渡してやってくれ。」

「分かった。そういえばこれって剣を刻んである？」

「いや、刻んでないが。」

「剣印。魔法による剣の強化のことだ。」

「じゃ、私からの選別として。」

「剣に剣印を刻んでいく。刻んでいくって言っても削る訳ではないので注意だ。」

「この剣印は？」

「刃毀れが起きなくなるのと、対魔法の特性を追加した剣印だよ。」

「何から何まですまんな。」

「気にしないで下さい。この剣。大切にします。」

「じゃあ、あの子達を頼んだぞ。」
「分かりました。」

・
・
・

城へ帰ってきた。

「さーで、明日の出発に備えて準備でもしておくかな。」

一人呟きながら廊下を進んで行くと、ばったりとティナさんに出会った。

「探しましたよー!!」

修正。あちらが探していたようだ。

「何ですか？」

「このお城から出て行くって本当ですか!？」

「声が大きいです。」

「あつ。すいません・・・。」

「いいです、で、お城を出て行くのか、でしたっけ?ええ。私達は城を出ます。」

「間に合ってよかった・・・。」

「如何したんですか？」

「私も連れて行って下さい!!」

「嫌です。」

「即答!? 流石に凹みますよ・・・。」

「だって、付いてくる理由が分からないし、ティナさん基本役立たずじゃないですか。」

「酷い!! 付いていく理由は、神様から監視をしろって言われているからです。ちなみに私はこの城でメイドさん戦闘術の使い手の中で第二位なんですからね!」

「一位は？」

「奈菜さんです。」

メイドさん戦闘術なるものが存在するとは・・・。

「兎に角嫌です。」

「嫌って言っても付いていきます。ちなみに冒険者登録はしてありますから心配しないで下さい!!」

「何で準備万端なんだよ・・・。」

「分かりました。連れて行きます。」

「本当ですか？やった!!」

「出発は明後日ですから準備して置いてくださいね。」

「嘘です、出発は明日です。」

「分かりました。」

スキップしながら去っていくティナさんに手を合わせてみた。した。

始まり44 『すべての始まり』（前書き）

2日ほどですまなかつた・・・。

学生、夏休み後半という単語で理解していただけるとありがたいです。

多分まだ不定期のままだと思うので、期待せずに次を待ってください。

始まり44 『すべての始まり』

「兄ちゃん。」

「ら・・・瑠奈か。」

俺の隣に立っていたルナを見て兄貴はとっさに言い換える。

「行つてこようと思う。」

「そうか。」

「五百円、私が帰ってくるまで取つといて下さいね。」

「分かった。」

「じゃあ、行つてきます。」

「おう、行つて来い！！」

城を飛び出し、兵達には見つからないように移動する。

城下町に着くと、見つかるのが面倒なため、少し暑いフード付きのマントを羽織る。

明らかに怪しいと思われそうだが、今は正直言えば午前3時ごろ。まだ真つ暗な時間帯だ。この時間帯ならば人の往来も少ない上に、ティナさんに見つかる心配も無いと思いこの時間帯に出発した。確認の為か、腰のベルトに無意識に手が伸びる。

昨日貰った剣が脇に差しており、後の方にはナイフがいくつも並んでいる。その少し上には矢の入った筒があり、剣が差していないほうには弓がある。

手と足には勿論天馬を装備している。そして、鎧はドラゴンと戦ったときにボロボロにされてしまったので着けていない。

隣には同じようにルナがフード付きのマントを着たままついてくる。ファミールさんとカナは別ルートで移動していて、王都の外で合流する事になっている。何で別ルートにしたかつて？

勿論四人の黒いフード集団はあまりにも目立つからだ。

そつえばこのフード付きマント、耐暑&耐寒の機能付きに、プラ

ス魔法耐性のある優れ物のマントである。

このマントとベルトはティナさんに会った後、こっそり王城を抜け出して買ってきたものだ。

「ルナ、大丈夫？」

「大丈夫。」

考え事をしながら走っていた為、無意識の内に走るスピードを上げてしまっていた事に気付き、ルナに声を掛けてみたが、平気なようだ。

黒い二つの影は、全てから逃げるかのように暗闇に消えていった。

・
・
・

「カナちゃん。」

「何ですか？」

昨日一日を会話に費やしたおかげで、カナちゃんと少し仲良くなる事が出来た。

最初は緊張していたのか、一つ一つの言葉を話すのにも苦勞していたようだ。しかし今では冗談を言える程度にまでなっていた。

「カナちゃんって何で戦うの？」

ちよつとした疑問も言えるようになっていた。

「うーん。今の所何で戦うという明確なものは無いんですけど・・・。」

敬語はいまだに抜けないが、元々敬語をあまり使わなかった場所にいたせいだ、あまり敬語になっていないが、そこはツツコミを入れないでおく。

「魔法を使ってみたいですね。」

「やっぱり魔法使いつて憧れる？」

「はい！！魔法は少女少女の夢のような物ですからね。」

「今度教えてあげる。」

「いいんですか！？」

「任せておきなさい。」

「わあ。使えるといいなあ。」

こういう笑顔が溢れる国を作ろうと父は前の賢者様と共に頑張っていた。今回の王様と賢者様は、信頼できる人だ。勇者様が一人で無茶をしている間王様と賢者様はとても心配していた。最初は刺々しい感じで接していた私を何の気もなく優しく接してくれた。妾の件でも止めてくれた。セインやカナの笑顔を見て一緒に微笑んでいた。そんな今回の二人の為と思い勇者様に普通に近づいていった。そうしたら勇者様まで同じような方だった。妾ではなく仲間として、同じ立場として話しかけてくれた。そんな人たちの期待を裏切らない為にも、私は立派な冒険者になってみせる。

誓いを胸にファミールは走る。カナが魔法を使えないなどとは露ほども知らずに・・・。

・ ・ ・

「よし、二人とも来たね。」

「うん。」

「何時でも行けるわ。」

「じゃあ行こうか。新しい世界に。」

黒いフード付きのマントを羽織っている4人組。傍から見ればとてもなく怪しい集団だろう。しかし、今俺たちを見る者はいない。

それどころかこんな暗闇の中見える奴が居るのだろうか？

「何をしているんですか？」

「いや、これから旅に出るのにここで待ち合わせをしていたんですよ・・・あ。」

「如何したの瑠奈？つて、何で貴女がここにいるの？」

「それは此方が聞きたいのですが教えて頂けますかね？ファミール様。」

「みんな逃げろっ！！」

俺の叫びも空しく全員がフォークとナイフによって地面に縫い付けられてしまった。

「お・し・え・て・い・た・だ・け・ま・す・か？」

「は、はいっ！」

ファミール様がびびって話し始めてしまった。

俺、終わったな。

「るーなーさん？」

「何で御座いましょうか？」

「ちよつと来てください。」

「動けません!!」

「もう動けますよ。」

うん？

ふと体の方を見るとフォークとナイフは既に無くなっていた。

「早く来てください。」

「嫌ですっ!!」

ティナさんの行こうとした方と逆方向に走り出す。捕まる。

・・・

さて、ここで俺は某アニメのセリフを言わせて貰おう!!

「不幸だ——!!!!!!」

「自業自得です。」

・
・
・

俺たちは新たな一步を踏み出した。

ここから先何があっても負けはしない。

そうここに誓う。

— 完 —

始まり44 『すべての始まり』（後書き）

やっと始まりが終わった！！

―完―なんて書いてみましたけど終わらないですよ。

こんな駄作ですが、これからもよろしく願います。

ついでに話すと今までの二つの作品の反省点を踏まえてもう一作品考えております。しかし、投稿するにしても来年度以降になると思います。

これからもこの作品ともども駄目作者をよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4032u/>

龍の尻尾探聞録

2011年8月24日02時35分発行